

---

# 黎明の空

風

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黎明の空

### 【Nコード】

N3180K

### 【作者名】

凧

### 【あらすじ】

夢を見る。

いつも覚えていられない夢をずっと……そう、幼い時から。でも一つだけ覚えていることがある。

「悲しい」と。

……それだけが私の心にずっと刻まれている。

———月光降り注ぐ夜。

少女は青年と『出逢う』。

その瞬間、止まっていた歯車が動き出した。

過去に翻弄され、傷つきながらも、少女は因果を断ち切るため、立ち向かう。

## 登場人物・世界設定（前書き）

一応この物語は「中華風恋愛ファンタジー」です。

物語を進めるうちに、徐々に増やしていきます。

ネタバレはありません。

## 登場人物・世界設定

### 【登場人物紹介】

? 菖琳麗 しょうりんれい

主人公。年齢は十六歳。半人前の気脈師。  
何事にもめげずに立ち向かえる、一本芯の通った少女。  
人懐っこい性格で、誰とでもすぐ打ち解ける。だが裏を返せば、警戒心がない。

時々無謀なところもあり、周りの者をハラハラさせることも。  
髪の色は鳶色とびいろで、瞳は琥珀。  
今現在、失踪中の己の師匠を探し中。

? 謎の青年（名前は本編にて公開）

琳麗が出逢った青年。  
どうやら気脈師の模様で、かなりの太刀の使い手。  
見た目の年齢は二十一、二歳前後。  
明確な目的はあるようだが、その詳細は不明。  
漆黒の髪と瞳を持つ。

? 李蘇芳 りすおう

年齢は二十四歳。炎術師。  
陽気な性格で、結構お節介。  
普段はお茶らけているように見えるが、いざという時はとても頼りになる。

鋭い観察力の持ち主でもある。  
童顔の所為で自分が実年齢よりも若く見えることが悩み。  
赤茶の髪に、翡翠色ひすいいろの瞳を持つ。

？東藍雄とうらんゆう

年齢は十八歳。雷術師。

蘇芳とは昔からの腐れ縁。

生真面目な性格で、頑固者。ある意味、蘇芳とは正反対の性格である。

纏う雰囲気が大人数びているため、蘇芳よりも年上だと勘違いされやすい。その事で蘇芳からはやっかまれることもしばしば。

東家直系の血筋（房一族そうい）で、次期大將軍と目されている。  
はなだいろ縹色の髪に、こんじき金色の瞳を持つ。

？珍珠しししゅ

琳麗が幼い時に助けた靈獸。

姿形は栗鼠りすや兎うさぎのようで、毛並みは薄紫で瞳の色は藍色。

何かと心配性で、どこか抜けている琳麗をハラハラしながら見守る。

琳麗とは違い、慎重に行動をし、相手を見極めている。

琳麗が助けて以来ずっと傍にいる。

ちなみに性別は雌。

・陳紹帆ちんろはん

気脈師で、琳麗の師であり、義理の父親でもある。

現在、失踪中であるが……？

・李紅華りこうか

蘇芳よりも一つ上の姉。

姐御肌で、しっかり者。

琳麗を優しく見守る。

・渾沌こんとん

年齢は二十歳前後の模様。

紺に近い青の髪を持つ。

饗饗とうてつとは旧知の仲。

「主」として敬っている人物がいるようだが……？

・饗饗とうてつ

年齢は二十代後半くらいの模様。

黒と見紛う程の赤髪を持つ。

口調が特徴。

渾沌と同じように「主」がいるようで、その人物を「我が君」と呼ぶ。

## 【世界設定】

・この話に使われている暦は？  
陰暦。

・この話の設定における龍脈とは？

(1) 大地の気の流れ。

(2) 龍穴とは一番気が集まっている場所であり、龍珠はその場所に安置されている宝珠のこと。

(3) 龍脈は【土】の属性が中心。

(4) 気脈師は別名を【地術師】という。彼らは龍脈と同調しやすい。

【雷】【火】【風】【水】そして【土】の要素を操れる術師のこと。例えば琳麗がそうである。

・この話の術師とは？

人はそれぞれ【雷】【火】【風】【水】【土】のいずれかの要素を持って生まれてくる。

その中で自分に適正したものによって【雷術師】、【炎術師】、

【風術師】、【水術師】、【気脈師】別名【地術師】に別れていく。  
だが皆が皆、術師になれるのではなく、霊力の強さの如何によっ  
て決まっていくな。

龍脈の力を借りて術を使うほか、自身の霊力だけで術を発動させ  
ることもある。例えば結界や治癒の術など。

・この話の世界観は？

東に【青東国】せいとうこく――守護神は青龍。南に【南朱国】なんしゅこく――守護神は朱雀。

西に【白西国】はくせいこく――守護神は白虎。北に【北玄国】ほくげんこく――守護神は玄武。

中央に【黄都国】おうとこく――守護神は麒麟。これはまとめて【五神国】と呼  
ばれ、または中央の黄都国を除いて【四象国】とも呼ばれる。

そしてその他に十二の中小国がある。



## 登場人物・世界設定（後書き）

ここまで読んで下さり、ありがとうございました。

亀更新ですが、頑張りますのでよろしくお願いします。

——静寂ニ響ク雨音——（前書き）

「静寂」は「しじま」とお読み下さい。

——静寂ニ響ク雨音——

『……………雨』

ぽつり、ぽつりと空から降ってくる雫に、少女は俯けていた顔を上げた。

その顔には表情らしきものはなく、ただ虚ろな瞳を空に向けているだけである。だが不意に、少女の瞳からつうと涙がこぼれ出る。

『……………して……………』

掠れた声が雨音に混じって消えていく。

『……………どうして……………何で……………！』

少女は右手に提げていた剣つるぎの柄を、手が白くなるまで握りしめた。それに呼応するように、抜き身の剣から、雨以外のものが地面へ滴したたり落ちる。それは少しずつ、しかし確実に、その場を紅の色に染め上げていった。

『……………っ』

それを見た少女の手から、剣が滑り落ちた。ガシャンとやけに大きな音が、静寂しじまの中に響く。

少女は堪たまらず、その場に崩れ落ちた。両手で顔を覆い、嗚咽おえつを必死で堪える。

『……………するしか……………こうするしかなかったの！ あの方を救うた

めには……こうするしか……!』

自分に言い聞かせるように、少女は強く叫ぶ。その叫びはもはや  
慟哭どうくに近かった。

次第に雨脚が速くなっていく。

しかし、少女は力なくその場に座りこんだまま、そこから一步も動かない。

そのとき、ふわりと少女の手を掠めるものがあつた。その感触に、少女はそろそろと顔を上げる。瞬間、少女の顔が歪んだ。

『あ……』

少女の目の前に、淡い光を放つ白い球体が浮いていた。その光に誘われるように、少女は手を伸ばす。そして大切な宝物のように、そっとそれを胸に抱きしめた。

『……温かい』

彼の人と同じ温もりに、少女は微笑む。

『……よ……か……た……』

嗚咽まじりの声が、少女の口から洩れ出る。瞳からはまた、ぽとりぽとりと涙がこぼれ落ち、白い光に降りかかった。

『……わ……たしは、貴……方に、決……して、許さ……れない……ことを……しま……した。でも……!』

——貴方を失いたくは、なかったのです——

少女はそれを口には出さず、胸の内だけに呟く。

『……許……して、くれな……くても、いいです。恨……んで、くれた……て、構わな……いんです……けれどもっ——』

少女の言葉はあまりにも切実すぎて、もし聞いている者がいたならば、きつとその者の胸をしめつけるだろう。だが、その言葉を聞いている者は、ここには誰もいなかった。そう、誰も何もない。

ただ雨の降り続ける音だけが、静かに響き渡る。

『——けれどもっ……！ ごめんなさいっ！ ごめ……なさいっ！』

ただ謝罪の言葉のみを発する少女の顔は、どこか青白い。徐々に徐々に、少女の身体から生気が失なわれていく。

だが少女はなおも、その言葉だけを口に紡いだ。

『ごめ……なさいっ……！ ごめん……なさい……っ！ ごめ……な——』

しかし、少女は途中力尽きたように、泥濘ぬかるんだ地面に倒れ伏した。僅わずかに胸を上下させ苦しい息の中でも、その胸に抱いた白い光はだけは決して放さず、少女は守るように抱えこむ。

だんだんと少女の意識が遠のいていく。しかし、少女はなおも心の中で謝罪を繰り返した。

最後の最期まで、ずっと——……



——静寂ニ響ク雨音——（後書き）

ここまで読んで下さり、ありがとうございました。

亀更新ですが、頑張りますので、これからもよろしくお願いします。

――月下ノ邂逅（二）――（前書き）

この話で使われているのは、いわゆる「太陰暦」というものです。だからここでの「四月の下旬」は、今使われている暦「太陽暦」で言うと「五月の下旬」にあたります。ようするに「梅雨」の時期にあたることになります。



## ――月下ノ邂逅（二）――

四月の下旬――春が終わり、夏が日に日に近付きはじめた頃、一人の少女が睨めつけ<sup>ね</sup>るように空を見上げていた。

「……一雨来るかな、これは」

ぽつりと呟いた声に、少女の肩の上にいたものが反応を見せた。それは氣遣わしように少女の顔を覗きこむ。

「……琳麗<sup>りんれい</sup>」

「たくつもう！　なんて顔をしてんの、珠珠<sup>しゅしゅ</sup>」

「……」

なおも物言いたげな顔を向けてくる珠珠に、少女――琳麗は苦笑を浮かべながら、その柔らかな毛並みをそつと撫でる。

「この時期ってさ、本当に嫌だよね。じめじめしててさ」

「……そうね」

目を伏せてしまった珠珠に、琳麗は「仕方ないなあ」と言わんばかりに溜息をつく。そして再び空を見上げ、雲の流れを見る。

（本格的になる前に、雨宿り出来るところを探さなきゃね）

幸いにも、現在いる場所は森の中だ。探せばきつと雨を凌<sup>しの</sup>げる場所くらいはあるだろう。そう見当をつけ、琳麗はそそくさと獣道を歩き出した。

しばらく森の中を彷徨<sup>さまよ</sup>ったあと、琳麗は人が一人ぶんくらい入れる大きな木の窪<sup>くぼ</sup>みを見つけた。彼女は躊躇<sup>ためら</sup>わずその中へと入りこむと、腰を落ち着かせた。

その間、琳麗と珠珠の間には、不自然な沈黙が流れていた。

（まったく……珠珠は。でも私の所為なんだよね……）

横目でちらりと珠珠を見やりながら、琳麗は溜息を洩らしそうになる自分を堪<sup>こら</sup>える。

ちょうどその時、ぽつんぽつんという音が彼女の耳に聞こえはじめた。

「……雨、降ってきたわね」

「……そう、だね」

ぽつんぽつんという音は、次第にザアという音に変わっていく。その音を聞きながら、琳麗は胸の内で生まれてくるある感情に目を眇<sup>す</sup>めた。

（……雨は、嫌い）

けぶるような雨を眺めながら、琳麗は自分の思考の中に入っている。

昔から雨の音を聞くと、なぜか無生に悲しい気持ちにさせられる。ひどい時には自分でも気付かないうちに、涙を流していることだった。

だからなのか、雨が降るたびに、珠珠はいつも気にかけるなった。いくら自分が「心配しなくてもいい」と言っても、幼い時からその

光景を何度も目にしてきた珠珠にとっては、無駄なのかもしれない。  
そして雨の日の夜はいつも決まって――

「……い！ ……麗っ！！ 琳麗っ！！」

自分を呼ぶ声に、琳麗は意識をハッとさせる。

「……珠、珠……？」

「大丈夫？ 琳麗」

そっと<sup>まなじり</sup>眦に触れてくる珠珠を、琳麗は訳が分からないまま茫然と見る。だがそれも一瞬のことで、自分がまた泣いてしまったのだとすぐに分かった。

琳麗はそのことに、内心舌打ちしたい気分になる。

（珠珠に心配させたくなかったのにっ……！）

ただでさえ、最近【あの夢】のことで、珠珠には心配のかけ通しなのだ。

だから余計な心配をさせまいと、雨の時はなるべく気を張るよう  
にしていた。その甲斐あってか、最近では涙を流すことはほとんど  
なかったというのに――

「琳麗」

無視できない声音に、琳麗は無言のまま視線だけを珠珠に向ける。  
すると、珠珠が怖いくらい真剣な顔つきで、自分を見つめていた。

「次の街ではゆっくり休みましょ？ そんなに急ぎの旅というわけ  
じゃないんだから」

急に何を言い出すのか、と琳麗は思わず目を剥いた。しかし、言われた言葉を咀嚼するに従い、琳麗は半眼になった目で相手を見据える。

「……前にも言ったと思うけど、ゆっくり休んでいる暇なんて――」  
「いい加減にしなさいっ!!」

続けようとした言葉を、珠珠の叱責に遮られる。

「あの馬鹿親父が心配なのは分かるけど、まずは自分の身体の方が大事でしょう!？」

「だいたいね! 最近のあんた、どういう顔しているか分かっているの!?! 目の下に大きな隈なんか作っちゃって……最近は全然眠れてなんかいないじゃない!」  
「……っ」

珠珠のその言葉に、琳麗は言葉を詰まらせる。

珠珠の言うとおり、最近【あの夢】が原因で、まともに眠れていなかった。その所為で、目の下に大きな隈ができてしまっていることも、自分の顔色が悪いことも自覚はしていた。だが――

「だって早く行かなきゃ。また師匠、遠くに行っちゃうよ……」

「今度という今度は駄目よ!」

この間寄った街でも何度も言ったけど、あんたは『大丈夫だ』の一点張りで、ちっとも私の言うことなんて聞いてくれなかったじゃない!!」

「だからっ、大丈夫だって何回も言ってるじゃん!! 珠珠は心配しすぎなんだよ!!」

珠珠の物言いにカチンと来るものがあつたのか、琳麗もまた声を荒上げて言う。しかし、珠珠も負けてはいなかった。

「青白い顔で言われたって全然説得力なんてないわよ！ それに……—それにあんたの気、前に街に寄った時よりかなり弱ってるんだから！」

「……え？」

珠珠のその言葉に、琳麗は思わず目を見開く。その様子を見た珠珠は、呆れたように溜息を洩らした。

「その顔……やっぱり自覚してなかったのね……。いい？ このまま碌ろくに休まずに旅を続けていたら、確実に妖魔の餌食にされるわよ。それでもいいわけ？」

何も言い返せない琳麗を尻目に、珠珠は滔々とうと言葉を続ける。

「ここらはまだ、戦とかそういうものがないから、妖魔が少ないだけよ。でも妖魔は確実にいる。

あんたが弱りはじめた頃から今まで遭遇しなかったのは、ただ単にあんたの運がよかっただけよ」

「………」

珠珠の指摘は最もで、確かに最近は霊力も弱まったような気がしていた。だが、正直そこまで弱まっているとは思ってもみなかった。なので、琳麗はただ驚くばかりである。

そんな琳麗に、珠珠は更に驚くべき事実を口にした。

「それと気付いているか知らないけど、いつもこの時期になるとあんたは気が弱まっちゃうの」

「え……?」

呆然としている彼女を、珠珠は妙に納得した顔で見る。

「やっぱり……これも自覚はなかったみたいね。まあそれも微々たるものではあったから、私もあの親父もあんたには言わなかったけど」

「……何でそんな大事なこと、二人とも言ってくれなかったの?」

琳麗が声を低くして問うと、珠珠はまたもや呆れたような顔で琳麗を見やった。

「なんで? って……はあ。あのね、あんたにこれ以上負担をかけさせないようにするために、決まってるじゃない。私も紹帆うはんも、この時期のあんたのことをすごく心配してたのよ。

ただでさえ雨と【あの夢】の所為で精神が不安定なあんたに、言えるわけないでしょ?

特に紹帆なんて、あんたがよく見る【夢】に魘うなされているたびに、ひどくうろたえてたじゃない。……あんただって覚えがあるでしょう?」

「う……」

珠珠に言われて、琳麗はありし日のことを思い出す。思い起こせるのは、頼りない師の姿ばかり……。逆に自分が師を宥なだめていた記憶がある。

「まああの馬鹿親父のことは今は横に置いておいて……」

最近、【あの夢】を見る頻度が、昔よりも多くなってきたるでしょう? 雨とかに関係なく」

「……うん」

「その所為であんたが相当参っていることくらい、私分かるんだから。」

それに加えてあの馬鹿親父の突然の失踪と今のこの時期も重なっていると来た。今のあんたは精神的にもすごく不安定……。気が弱まるのも当然と言えるわね」

琳麗は大人しく珠珠の言葉に耳を傾けた。

「……そう、だね」

「今の状態でもし妖魔に遭遇したら、ひとたまりもないわよ？」

それにあんたの霊気は、妖魔にしてみれば、ご馳走と言ったって差し障りないんだからね」

「……分かったよ。珠珠の言うとおりにちゃんと休む」

「そう、分ければよろしい！」

満足そうに頷く珠珠を見ながら、琳麗は心の内で思ったことを言の葉に乗せる。

「……珠珠」

「？ 何よ？」

「心配してくれて、ありがとう」

その言葉に一瞬だけ虚を突かれたような表情を見せてから、珠珠は苦笑めいた笑みを口元に浮かべた。

「いえ、どういたしまして」

静かな森の中、二人して笑い合う。

「あっ！ 雨止んだみたいよ」

「え？ あっ本当だ」

いつの間に止んだのか、木々の葉の向こうに黄昏はじめた空が見える。

「じゃあ、もうちょっと行ってみようか、珠珠。あともう少し先に大きな街があるって話だし」

「そうね。早いところ行かないと、日が暮れちゃうわね」

珠珠の言葉を合図に、琳麗は一歩足を踏み出す。

この先に待ち受ける運命も知らず、ただ一歩踏み出した。



――月下ノ邂逅（二）――（後書き）

ここまで読んで下さり、ありがとうございました！  
亀更新ですが、次も頑張りますのでよろしくお願いします！

――月下ノ邂逅（二）――（前書き）

街の名前を変えました。

――月下ノ邂逅（二）――

「うわあ！　大きい……！！」

小高い丘から見下ろした光景に、琳麗りんれいは感嘆の声を上げた。

あれから何事もなく、無事に森を抜け出せた琳麗たちは、目の前に広がる光景にただ息を呑むばかりだった。

「ずいぶんと大きな街だとは聞いていたけど、まさかこんなに大きな街だなんて思わなかった……」

「私もよ。でも妥当かもしれないわね」

「なんで？」

「なんでって……だってこの街は――。……琳麗、まさか気付いてない……とか？」

「？　何に？」

恐る恐るといった感じに尋ねてくる珠珠しゅしゅに首を傾げつつも、琳麗が素直な疑問をぶつけると、珠珠は驚きを隠せない顔でこちらを見る。しかし、それもすぐに厳しい顔つきとなった。

「えーと、珠珠？」

「……いい？　琳麗。街に着いたら、すぐにでも宿を探して、とっと休むわよ！」

「はいい！？」

意味も分からないまま、今日の予定を強引に決められた琳麗は素っ頓狂な声を上げる。だがあまりにも理不尽な言い様に、次第に琳麗の眉も上がってくる。

「なんでそうなるわけ？ 確かにこの街でゆっくり休むって約束したけどさ。そこまで珠珠に決められる言われはないはずだよ」

普段よりも低い琳麗の声音にも珠珠は反応さえせず、むしろどこか呆れたような顔をする。

「……琳麗、この街の名前覚えてる？」

「何？ 突然。話を——」

「い・い・か・ら答えて！」

強い語調に、琳麗は言いかけた言葉を呑みこんで、渋々記憶を探っていく。

「……あれ？ なんて名前だっけ？」

「……………」

今度こそ溜息をつきたくなった珠珠だが、それでも律儀に答えてやる。

「柳州の州都・丁杏よ ちようあん」

「……丁杏？ 丁杏って……あ！」

やっと思い至ったのか、見る見るうちに琳麗の顔が青褪めていく。

「ここって龍穴 りゅうけつのある街、だよね……？」

「そうよ。だから私は余計この街で休みましようって言ったのよ」

「——」

珠珠の呆れた言葉が、琳麗の耳に届く。しかし、それは彼女に意

識されることなく、通り過ぎていった。

彼女は呆然と、眼下の街を見やる。

活気の溢れる街だ。この丘の上からでも、囃し立てる声が聞こえてくる。祭りか何かをやっているのだろうか？ そこらじゅうに華やかな飾りが飾られ、出店もたくさん出ている。

よく見ると、街じゅうに飾られているそれらの飾りは、夏を思わせる色合いと装飾ばかりだ。

街のその様子を見ていた琳麗は、「そういえば、もう少しで夏至だったなあ」などと、埒もないことを頭の片隅で考えた。しかし、今はそんなこと彼女にとってはどうでもよかった。

穴が開くのではないかと思うくらい、琳麗はジッと街を見下ろ続ける。そして、ずっと目を凝らし続けていた彼女の瞳に、朧げながらやっと金色の光が写し出されるようになった。それが次第に肌でも感じられるようになると、彼女は安堵のあまりホッと胸を撫で下ろした。

「……い、……麗、琳麗！」

直後、自分を呼ぶ鋭い声に、琳麗はハッとなった。慌てて声のする方へと顔を向けると、そこにはやはり心配顔の珠珠がいた。

「琳麗、大丈夫？」

「ごめん、珠珠。私は大丈夫だよ。ちょっと落ち込んだ。でも、自分が思っていた以上に疲れていたみたい」

しばらくの間、ジーと何か言いたげな顔で琳麗を見つめていた珠珠だが、やがて諦めたように息をついた。

「……そうね。私も自分の見立てが甘かったみたい。まさかあんたが龍脈りゅうみやくの気を感じられないほど、弱っているなんて思ってもいなかったわ。妖魔に出くわさなくて、本当によかった……」  
「うん……。じゃ、行こっか」

茜色に染めあげられた街に向かって、琳麗はゆっくりと歩を進めた。



「へーい、らっしゃい、らっしゃい!! その旦那さん、奥さんにこの簪かんざしなんてどうかね？」

「いや俺は——」

「そう言わず! ほら奥さんも強請ねだって強請って」  
「えっでも……」

ちらっと男を見やる女の眼差しに、男は根負けしたように溜息をつく。

「あー分かったよ!! 買ってやるよ。たくっ……」

「……ありがとう」

「別に……たまには、な」

「はい！ 毎度上がりっ！！」

男が女の髪に買ったばかりの簪を挿してやると、女は嬉しそうに微笑む。

「……なんかすごいね、珠珠」

その一部始終を何とはなしに見ていた琳麗が、ぼつりと言葉を洩らす。

「そうね。さすがは都会っていうところかしら？」

周りをきよろきよろと見やりながら、珠珠が適当に相槌あいづちを打つ。  
それに少々剥むくれながらも、琳麗も周りの様子を窺うかがう。

「それにしてもさ、もう夕方だよ？ なんでこんなに人がいるのかな？ それに普通はもう店じまいとかしはじめる頃だよね？」

「確かに言われてみればそうね。……まあそんなことよりも、とつと宿屋を探すわよ！」

「……はい」

後ろ髪引かれる思いで、琳麗は促されるまま人混みの中を歩いていく。

そして手当たり次第に、宿屋らしき建物の中に入っていくのだった。



日もすっかり暮れ月が高く昇った頃、琳麗たちは力なく人気のない街道を歩いていった。

「ねえ珠珠、どこも満室って……いったいどういふことかな……？」  
「そんなの私に聞かないでよ……」

ハアと二人同時に重い溜息をつく。

あれからずっと街を歩きまわり宿屋を探したが、どこの宿屋も満室で空いていないと言われてしまい、こうして今に至っている。

「だいたいなんでこんな真夜中なのに、どうして人が減らないわけいくら祭りだからってさ……。都会ってこんなものなのかな？」

ど田舎で育った琳麗にとって、人がたくさんいる場所というところは、はっきり言ってとても苦手だった。好き好んで行きたいとは思わないのだ。

だから人混みを避け、あえて人気のない場所を選んで歩いていた。

「さあ？ 私だって街になんて滅多に下りたりしなかったもの。そんなこと分らないわ。……あっ」

「？ どうしたの？」

「ほら空を見てみて」



珠珠に言われて、琳麗は夜空を見上げた。

「あっ……今日は満月なんだ」

見上げた空に満天の星が広がり、月は眩いばかりに輝いていた。

「……綺麗だね」

「そうね」

しばらくの間、黙って月を見上げる。だが何かを振り切るように、琳麗は頭を振った。

「そろそろ寝られる場所を探しに行こっか。別に宿屋じゃなくても、身体を休める場所さえあれば、私はどこでもいいし」

「……まあ、しょうがないか……。琳麗、私はあっちの方を探してきてあげるから、あんたは向こうの方を探してきなさい。それと、一人で危ないことに突っ込まないこと。いい？」

「何それ？ 突っ込むわけないでしょ!？」

「さあ、どうだかね」

「ちよつと、それどういう意味!？」

半眼で珠珠を睨むも、相手はどこぞ吹く風といったふうに、ひらりと石畳の上に降り立つ。

「じゃあ私、探してくるから。くれぐれも気をつけなさいね」

「あちよつ珠——……」

追いかける間もなく、珠珠は風のようにこの場から走り去った。琳麗は宙に手を伸ばしたまま、遠ざかる背中を見送る。やがてその姿が見えなくなると、琳麗は憤懣やる瀬ないといったふう、荒く

息を吐き出す。

「まったく……。珠珠は一言余計なんだからっ」

文句をこぼしつつも、琳麗は珠珠とは反対方向に足を向けた。その顔はやはりどこことなく不機嫌そうで、しかし歩む足は止めず、まっすぐにその道を進んでいく。

——まるで、何かに導かれているかのように……。

やがて城壁の側近くまで来た時、不意に空が翳<sup>かげ</sup>った。

「え……？」

思わず空を見上げた琳麗は、瞳に写しだされたその光景に目を瞠<sup>みは</sup>った。

月を背に、人が舞うように空から降りてくる。そして、その人物は音もなく琳麗の目の前に着地した。

長い黒髪が艶<sup>あで</sup>やかに風に踊る。

「あ……」

ドクン

心臓が一つ大きく跳ねた。

その人物——青年は琳麗の存在に気が付いたようで、鋭い視線を向けてくる。

漆黒の瞳が琳麗の姿を捉えた。

視線が合わさる。

琳麗はその瞳に囚<sup>とら</sup>われたように目が逸<sup>とら</sup>らせない。

ドクン、ドクン

心臓の音がやけに大きく聞こえた。

青年は一瞬だけ目を細めると、琳麗から目は逸<sup>とら</sup>らさずにまっすぐに見据<sup>み</sup>えてくる。

「お前……なんだ？」

月光降り注ぐ夏の夜。

琳麗ははじめて【彼】と出逢<sup>であ</sup>った。

この瞬間、止まっていた歯車<sup>まわ</sup>が再び廻<sup>まわ</sup>りはじめる。

——この【出逢<sup>であ</sup>い】によって……。

――月下ノ邂逅(二)――(後書き)

ここまで読んで下さり、ありがとうございます。  
亀更新にですが、どうぞよろしく願います。

――月下ノ邂逅（三）――

青年と目が合った瞬間、琳麗りんれいは時が止まったような気がした。

今までうるさいくらい聞こえていた人々の喧騒が周りから一切消え、ただ己の鼓動を刻む音だけが耳の奥で響いた。

「お前……なんだ？」

ドクン

と、また一つ大きく跳ねた。琳麗はその反応に思わず胸に手をやる。

「……もう一度聞く。お前、何者だ？」

青年の漆黒の瞳が何かを探るように、スウとその色合いを深める。そして、右手に提げている太刀の切っ先がすぐさま琳麗に向けられるように、僅わずかに体勢を変えたのが見て取れた。

しかし、それがわかってもお、琳麗はその場から動かなかった。――いや、動けなかった。

目の前にいる青年は危険人物だと一見してすぐに分かる。

月明かりに照らし出されたその姿は全身血まみれで、あれはどう見ても人の返り血だとは思えない。そして青年の提げている太刀からは、鮮血がいまだに地面に滴したたり落ちていた。

――逃げなければ――

本能というべきところが、そう告げてくる。この青年と絶対に関

わるべきではないと。

だがそれができない自分が、どこかいる。

(……どうして?)

逃げろ、逃げろと、本能が警鐘を鳴らしてくる。

しかし、それと相反するように、動かない身体。そして逸らせない瞳。

(どうしてなんで――……)

意志に反して、だんだんと滲<sup>にじ</sup>んでくる視界。そして――、

(何でこんなにも……懐かしい……の?)

溢れ出しそうになる涙を、必死に瞼の奥へと押しこめる。

だが涙は次から次へと溢れ出しそうで……どうしたらいいのか、琳麗には分からなかった。

ただ“懐かしい”と、その気持ちだけが胸を占めていた。

「……………」

答える気配の見せない琳麗を、しばし無言で見つめていた青年だが、やがて何かに気付いたように、唐突に城壁の上を見上げる。次いで軽く舌打ちをしたかと思うと、次の瞬間には琳麗のすぐ目の前にいた。

「!?’」

それに驚いた琳麗は反射的に足を退きかけるが、青年は有無を言わせずその腕を掴み取ると、素早く物陰へと隠れた。そして、そのままの自然な勢いで、顔を青年の胸板に押しつけられる。

(な、に……?)

一瞬何が起こったのか、琳麗は本気で分からなかった。だが、気付いた時にはもうすでに青年の腕の中にいて、抵抗できないようにしっかりと抱きこまれていた。

トクン、トクン、トクン、トクン、トクン――……

その事実気付いた途端、心臓が早鐘のように鳴り出す。

琳麗は理由もなくその腕から逃れたくなり、必死にもがく。だが、<sup>わけ</sup>もがこうとすればするほど、その腕はしめつけは増すばかりで、決して放してはくれない。

「……大人しくしてろ。でなければ、殺す」

「……っ」

耳元で低く囁かれ、琳麗はびくりと身体を硬直させた。その反応を見て、青年は口の端を僅かに上げる。だがすぐに鋭い視線を城壁へと投げかけ、軽く舌打つ。

「ちっ……存外しぶといやつらだな。おい、お前」

青年に呼びかけられ、琳麗はそろりと顔を上げた。だがその直後、琳麗はまたもや硬直してしまう。なぜなら、青年が間近で顔を覗きこんでいたからだ。

「先程も聞いたと思うが、何者だ？ その気配……どう見ても【俺たち】と同じだ。親は誰だ？」

「なっ、なんであなたにそんなこと答えなくちゃいけないんですかっ！！」

「いいから答えろ」

青年のその物言いに、さすがの琳麗もカチンと来るものがあつた。だいたいなぜそんなことをこの青年に言わなければいけないのか。まったくもって分からない。

「嫌です！ どうしてそんなこと聞くのか分かりませんが、そんなことどうでもいいでしょう！？ というか、いい加減放して下さい！！」

最早“懐かしい”とかいった感情は、どこかに吹っ飛んでしまった。とにかく、この青年から離れたくて仕方がなかった。

だが片腕だけだというのに、いっこうにその腕の力は緩まない。何度力を入れて手で押し退けようとしても、ピクリとも動かないのだ。

再度暴れ始めた琳麗を、青年はさも不機嫌そうに見下ろす。

「……お前、さっき俺が言ったことを忘れてないか？」

青年の漆黒の瞳が、まるで獲物を見定める獣のように、鋭い光を帯び始はじめる。そして不意に、ガチャリと背後で何かが鳴る音がした。

それが何の音かと気付く前に、スツと首元に何かが押し当てられ



る。その感触の冷たさに、それが何なのか分かってしまう。

恐る恐るそこに目を向けると、やはり想像どおりそれは血のこびり付いた太刀だった。

「……っ」

「さっさと答えろ。答えなければ、その首斬り落とす」

息を呑む琳麗に、青年は冷たい口調で告げる。更にその言葉が冗談ではないことを示すように、首元に当てられた太刀が軽く引かれて、そこから血がつうと流れる。

（——っ、珠珠っ!!）

思わず相棒の名前を呼ぶ。

自分の家族と言える者は、珠珠と師の二人だけ。

本当の親の顔など知らないし、自分がどういった経緯で生まれたかなんて考えたことすらない。自分にとって何より大事なものは、その二人なのである。

だから明らかに危険人物だと分かるこの青年に、たとえ殺されかけようとも、大事な家族のことを言うつもりなどない。

それにこの青年に言うてはいけない……そんな気がするのだ。

「……言うつもりはないのか？」

自分を見下ろす瞳の冷たさに、身体が竦<sup>すく</sup>みそうになる。しかし琳麗は負けじとその瞳を睨み返した。

「言うも何も、私は親の顔なんて知らない！ それに私は、ずっと天涯孤独の身の上です！ そんなことまで私に言わせたかったんですか！ もういいでしょう！？ とつとと放して下さい!!」

「……………」

青年は無言で琳麗を見下ろす。  
しかしやがて諦めたのか、一つ息を吐いてから琳麗の身体を引き離した。

「……え？」

そんなに素直に放してくれるとは思ってもみなかった琳麗は、面喰らったような顔で青年を見上げる。

対して青年は何の表情も浮かべずに琳麗を見返していたが、不意に眉根を寄せると、ななめ上に視線を投げかける。

「——覗き見とはいいい趣味だな。……出てきたらどうだ？ 蘇芳」  
すおう

「……女と逢引<sup>あいびき</sup>なんて、ずいぶんと余裕そうだな、アンタは」

そう言って姿を現したのは、目の前の青年より少し年下ぐらいに見える赤髪の青年だった。

その右手には槍<sup>たずさ</sup>が携えてあり、柄<sup>え</sup>の先にある刃<sup>やいば</sup>が月の光を反射して銀色に輝いていた。

琳麗がそれをまじまじと見つめていると、その青年——蘇芳は不意に顔をこちらに向け、にやりと笑ってみせる。ただしその瞳はまったく笑ってはいなかった。

「この娘<sup>こ</sup>ってさ、あんたの連れか何か？」

「……はい？」

「いきなりこの人は何を言い出すのだろうか？」と一瞬それが頭をよぎった。だがその言葉の意味が徐々に頭に浸透してくるに従い、

琳麗は慌てて否定の言葉を紡いだ。

「か、勘違いしないで下さい！！ 私とこの人は真っ赤な赤の他人です！！」

「……そうは見えないんだけどな」

「っ本当ですよ！！ とうか、こんな危ない人と知り合いになんてなりたくありませんっ！！」

「……………」

琳麗のあまりの言い様に、青年の眉間に皺しわが寄っていく。

不穏な空気を漂わせはじめた青年をよそに、琳麗はなおも言葉を募らせていく。

「信じて下さい！ 私、こんな人と知り合いなんかじゃないんです！！」

「はいはい。君の言い分はわかったから。……さて」

そう言葉を切り、蘇芳は青年にひたと視線を据える。

視線を向けられた青年は不穏な空気を漂わせたまま、物騒な目つきで蘇芳を見返す。

「なんでこんなところでのんびり油を売ってんのかは知らねえけど、さっさと逃げなかったことを後悔するんだな。今日こそはアンタの息の根を止めてやる。……覚悟しな」

「……勝手にほざいてろ、この死にぞこない」

「ふん、死にぞこないで悪かったな。俺はそれが売りなんだよ」

まさに一触即発の状態。

琳麗はどうすることもできず、二人の顔を交互に見ることしかできな

(これってどうすれば……!)

琳麗がそう思った瞬間、蘇芳の足が地面を蹴った。

直後、槍と太刀が激しくぶつかり合う音が、辺りに木霊<sup>こだま</sup>する。  
両者の力は拮抗<sup>きつこう</sup>し、しばし刃越しに睨み合う。

しかし不意に、青年が太刀を横に逸らした。それによって槍の軌道がずれ、蘇芳は僅かに体勢を崩し、した。そこを青年はすかさず狙う。

「ぐっ……!!」

横薙<sup>よこなぎ</sup>ぎに払われた太刀を、間一髪で槍の柄で防いだ蘇芳は、力任せに青年の太刀を押し返した。しかし青年は慌てることなく、蘇芳と距離を取る。そして僅かに感心したような眼差しを蘇芳に向けた。

「そんな怪我でよく反応できたな。さすがとでも言うべきか？」

「っはあ、はあ、はあ……っ舐めやがって……っ！」

肩で息をしている蘇芳に対し、青年は息一つ乱さず肩に太刀を担ぐ。そして茫然とその一戦を見ていた琳麗に、視線を移す。

「お前、名前は？」

唐突なその問いかけに、琳麗は一瞬戸惑う。だが無意識のうちに答えていた。

「『菖琳麗<sup>しやうりん</sup>』……」

その答えに満足したのか、青年ははじめて笑みらしきものを向けてくれた。その表情に琳麗の心臓はまたもや脈打つ。

「『菖琳麗』か。……まあいい」

青年はそう呟くと、周囲に風を集めはじめた。

それに気付いた蘇芳は、血相を変えて青年に叫ぶ。

「つてめえ、逃げるのか……!？」

「もう用は済んだからな。見逃してやるよ、蘇芳」

「っ見逃すだど!？　おい、待——」

止める間もなく、青年は風の渦の中に消えた。

蘇芳は悔しそうに、青年の消えた場所を睨む。

「くそ……っ！」

「……あ、あの怪我とか、平気ですか？」

いまだに肩で息をしている蘇芳のことが気にかかり、琳麗のは思わず声をかけてしまった。その呼びかけに、蘇芳は僅かに顔を上げ、琳麗を見る。

「っああ、大丈夫だ。君の名前は『菖琳麗』だったか？」

「あ、はい、そうですけど……？」

「俺の名前は『李蘇芳』だ。ちよつと州城まで来てもらってもいいか？」

「えっ、州城に……？」

「ちよつと事情を聴きたいんだ」

その言葉を機に、琳麗はある事件へと巻きこまれていく。  
だがそれも、ほんのはじまりにすぎなかった。

――月下ノ邂逅（三）――（後書き）

ここまで読んで下さり、ありがとうございます！  
亀更新ですけど、これからお付き合い願えればと思います。

——開幕ノ序曲（二）——

静寂が漂う一室で、男が一人、静かに椅子に腰掛けていた。

灯あかりを灯ともしていた油はもう既に切れており、月明かりだけが室内を照らしていた。

だが男はそれを気にかけて風もなく、ただ静かに目を閉じ続けた。

やがて月が雲に隠れ、部屋の唯一の光源が消える。

男はその気配を感じ、伏せていた瞼まぶたをゆつくりと上げた。

そこに現れた瞳の色は、禍々しいまでの紅あか。暗闇の中で、それだけが異様な光を放っている。

「……時は満ちた、か」

男はそう呟き、堪え切れないように、くつくつと喉を鳴らして笑う。

「我が君よ」

唐突に声をかけられる。

男は笑いをおさめ、部屋の隅に視線を送る。するとその視線に応えるように、闇の中から一つの影がずっと現れ出る。

「……久しいな、饕餮とうてつ」

「我が君。遅くなってしまう、申し訳ございません」

姿を現したのは、男よりも少し年上の男。黒と見紛う程の赤髪が印象的で、切れ長の目が相手を見据えている。



「別によい。他の二人より遙かにましだ。あやつらはまだ【寝て】いる。全く、相変わらざるの寝ぼすけ共だ」

「ではもう、渾沌こんどんは【起きて】いるのですね？」

「ああ。もう動いてもらっている。そなたにも存分に働いてもらおうぞ」

「もちろんでございます」

その答えに、男は満足そうに笑みを浮かべると、窓へと視線を向ける。

紅い目をうつそりと細め、今は見えない月を見上げる。

「今度は容赦しない。覚悟しておけ、我が愛しい愛しい、憎き【姫】よ……」

呪詛にも似たその響きは、静かに闇に溶けていった。



（私、何してるんだろう……？）

太陽が地上を眩しく照らし、小鳥達が囀さえずり合う爽やかな夏の朝。

琳麗<sup>りんれい</sup>は部屋の隅っこで、今の現状を嘆いていた。

この部屋の内装は質素すぎるほど質素で、置かれている調度品は、寝台に机、椅子など生活に必要な最低限の物が大半だ。そして明かりを取り入れるための小さな窓が一つ。しかも頑丈な格子付きである。扉に至っては、こちら側からでは絶対に開けられない。これは確認済みであったりする。そして手首には、靈力の一切を封じるへ封碎石<sup>ふうさいせき</sup>が施<sup>ほどこ</sup>されていた。

「……はあ」

詰まるところ、琳麗は牢部屋に閉じこめられているのだ。事の経緯は、昨晚までに遡る。

『ちよっと州城まで来てもらっていいか？』

『えっ、州城に……？』

蘇芳<sup>すおう</sup>の唐突なその申し入れに、琳麗は一瞬言葉に詰まった。

『ちよっと事情を聴きたいんだ』

《聴きたいって……私はあの人と全く関係なんてないんですが？》

心の中でそう反論しつつも、琳麗は笑顔で答えた。

『嫌です』

そう、きっぱりと否定の言葉を。

『私、これから用事があるんです。それにもう一度言いますけど、私はあの人のことなんて何も知りません。というか、関係ありませんから』

蘇芳はその言葉に若干顔を引き攣<sup>ひきつ</sup>らせるが、すぐに笑顔に戻る。

『そうか。それは……』

残念だな

最後の言葉がやけに耳に残った。

その直後、項<sup>うなじ</sup>に軽い痛みを感じたと思った瞬間、目の前が真っ暗になり、何も感じられなくなった。

（不覚としか言い様がないよね、これは……）

いくら油断していたとしても、気脈師としては情けない限りである。たとえば半人前であったとしてもだ。

（だいたいあの時、さっさと逃げていればよかったんだね……）

思い返せば、蘇芳とあの青年との戦いなど見ていないで、あの場から即座に離れておくべきだったのだ。それをしなかった自分が悪

いと言われれば、それまでの話だが後悔は尽きない。

(……まあ、今更何を嘆いても仕方がないけどさ。どうしようもないし。……それよりも)

琳麗は思いつ切り顔を顰める。

「しゅしゅ珠珠、絶対に怒ってるだろうなあ……」

今にもその怒鳴り声が聞こえてこそうだ。怒る顔が目には浮かぶ。琳麗が軽く頭を抱えていると、扉がぎいと音を立てながら、ゆっくりと開かれていった。

「あっ、目覚ましたみたいだね。よかった」

扉の向こうから顔を出したのは、琳麗よりも年上の女性。赤茶の髪を高く結いあげ、目は意思の強さを感じさせるように、きりつとしている。

女性は安心させるように、ひすいいろ翡翠色の瞳を細める。

「ごめんね。私の弟が乱暴を働いたみたいで。首は痛くない？ 大丈夫？」

「いえ、別に痛くはありませんけど……」

弟？

その言葉に引かかりを覚え、琳麗はまじまじと女性の顔を見る。

(そういえば、この人の顔どこかで……)

「誰がいつ、乱暴を働いたって？」

その時、琳麗の思考を遮るように、聞き覚えのある声が部屋に響く。

「何？ 働いていないって言いたいわけ？　じゃ、この子の首の傷はどう説明する気よ？　蘇芳」

「だ・か・ら、それは俺じゃないって、何回言わせば気が済むんだよ。俺が気付いた時には、とっくにあったってーの！」

眉を顰めながら姿を現したのは、琳麗をここの放り込んだであろう張本人・李蘇芳である。女性と同じ赤茶の髪を前の方で緩く縛っており、翡翠色の瞳は不機嫌そうに女性を見据えている。

「たっく、俺ってそんなに信用がないのかねえ？　本当悲しくなってくるよ」

全然悲しくなさそうに言う蘇芳に、女性は冷たい視線を送る。

「あんたの普段の行いの所為でしょうが！？　信用されたいんなら、もっとしっかりした生活態度を取りな！！」

「へいへい、わかってますわかってます」

投げやりに答える蘇芳の態度に、女性の眉が吊り上がる。

「蘇芳っ！　あんたって奴はいつも——」

「はいはい、説教は後で聞くから。ほらその娘、びっくりしてるじゃん」

「え……？」

自分の目の前に、琳麗がいることをすっかり忘れていたのか、女性には慌てて琳麗の方に顔を向ける。

「ご、ごめんね。見苦しいところを見せちゃって」

「いえ別に……」

「自己紹介がまだだったわね。私の名前は『李紅華』<sup>りこうか</sup>。あなたは確か『菖琳麗』<sup>しょうりん</sup>さんよね？」

「どうして私の名前……」

「昨日な、あいつに名乗っていただろう？」

驚きに目を見開いている琳麗に、蘇芳は事もなげに言う。琳麗はその事実により驚かされる。

「あの状況下で覚えられたんですか？」

「まあな。あんたの声ってよく通っていたしな」

あんぐりと口を開けている琳麗に、蘇芳は軽く笑ってから顔つきを改める。

「あいつとは知り合いじゃないんだな？」

「……それは昨日から言っているじゃないですか。私、あの人のことなんて知りません。あそこを歩いていたら、突然空から降って来たんです」

「じゃあ、あいつと何を話していたんだ？」

「……それを聞くために、わざわざ私をここに入れたんですね？」

琳麗の鋭い指摘に、蘇芳と紅華の両名は驚いたように目を剥く。<sup>む</sup>だが蘇芳は直ぐに無表情に戻り、些<sup>ちか</sup>か冷めた目つきで琳麗を見下ろした。

「そんなことどうでもいい。で、何を話していた？」  
「……私の両親は誰なのか？　って聞かれたんです」  
「両親？」

二人同時に言う。両者の問いかけるような視線に、琳麗は言葉を続ける。

「私の気が自分たちとよく似ているって言われました。どういう意味なのか、さっぱりわからないんですけどね」

「あんたの両親は？」

「私、物心つく前から両親がいなかったんです。師匠が言うには、私は捨て子だったみたいなんですけど」

「……師匠っていうのは？」

「あつ師匠は私を育ててくれた人です。今は私、その師匠探しの旅をしている最中なんです」

「そうなの……。ごめんね。私たち、あなたの邪魔をしちゃったみたいね」

紅華の労わるような眼差しに、琳麗は首を横に振る。

「平気です。気にしないで下さい。私、この街で少しの間休むつもりでしたから」

「なあ、あんた」

「はい？」

「今更これ言うのも、あれなんだけどな。……あんたがあいつと関わりがないのは、何となく最初からわかってたよ」

「……え？」

「あんたには本当悪いことをした。悪かったな、こんな所に閉じこめたりしてよ。」

まあこつちにも色々と事情があつてな。あいつに関する情報が全く無いんだよ。だから少しでもあいつの情報が欲しかっただけなんだ」

「そうだったんですか……」

蘇芳のばつの悪そうな顔に、琳麗の頬が次第に緩んでくる。

「ちゃんと説明して下さったので、いいです。気にしないでいいですから」

「その詫<sup>わ</sup>びと言っちゃなんだけどよ。あんたの師匠の名前はなんて言うんだ？ 心当たりがあつたら、教えてやれる」

「ありがとうございます。師匠の名前は『陳紹帆<sup>ちんろはん</sup>』っていうんです」

「……なんだって？」

「……師匠を知っているんですか？」

二人して顔を見合わせるの反応に、少し嫌な予感を覚える。

「ねえ、琳麗ちゃんの探している人って本当にその人なの？」

「はい、そうですけど……あの、師匠がどうかしたんですか？」

紅華の顔が複雑そうに歪められる。それに更なる不安を抱<sup>いだ</sup>かされた琳麗は、詰め寄るように二人に近付く。

「教えて下さい！ 師匠がどうしたんですか!？」

「……『陳紹帆』っていう奴は、この業界じゃかなり有名な人なんだよ。黄都国で大事件を起こした奴としてな」

「大事件……？」

「そう、黄都国前皇帝とその後継ぎを暗殺しようとしたんだよ。その時、数十名の官吏も亡くなっているらしい」

「う……そ。師匠がそんなことするわけない」



「事実だよ。もう二十年近く前になるけどな」

その言葉に、琳麗の頭は真っ白になる。

嘘だ、嘘だと思おうとする度に、師のあの物悲しそうな顔が思い浮かぶ。

（なん……で？）

それを最後に、琳麗は意識を手放した。

——開幕ノ序曲（二）——（後書き）

ここまで読んで下さり、ありがとうございます！

いよいよ本格的に物語が動き始めます。

琳麗がどのような道を選んでいくのか、皆様ぜひとも見守って下さい。

それでは、相変わらずの亀更新ですけど、よろしくお願いします！

【追記】 お気に入り登録して下さった方、ありがとうございます！  
！期待に応えられるかどうか分かりませんが、精一杯頑張りますので、今後ともよろしくお願いします。

——開幕ノ序曲（二）——

あれは私がまだ五、六歳くらいの頃のこと。

「夕刻前には帰って来る」と言い置いて、昼間に家を出て行ったり、一向に戻って来ない師を心配した私は、暮れ始めた空を無視して家を飛び出した。

徐々に薄暗くなってくる森の中を、己の勘だけを頼りに歩き進める。

やがて湖の畔ほとりに、探し求めていた姿を見つけ、私は無意識のうちに駆け出していた。

『ししうっ！！』

私の声が聞こえたのか、師は驚いてこちらに顔を向けてくる。

『おまつ、何で……』

『もう！ さがしたんだよ！？』

危なっかしい足取りで駆け寄って来る私に、師は厳しい声を向ける。

『琳麗りんれい、お前な……。暗くなってきたら、家から出るなど言っただろう？ 俺の言いつけを忘れたのか？』

『ご、ごめんなさい……。でもししうが、ぜんぜんかえってこないから、しんぱいになちゃって……。』

もじもじと言いつけを始める私を見て、師は呆れてたように溜息を

一つ吐く。

『だからって来なくてもいいだろうに。……まあ俺が、時間どおりに帰らなかったのが、いけなかった訳だしな。……俺も悪かったな』

そう言っおもむろて、徐に私の頭へと手を伸ばすと、髪の毛を掻き混ぜるように撫でってくれる。それが嬉しくて、私は甘えるように師の身体に抱きついた。

『たくっ……急にどうした？』

『えへへ』

嬉しそうに笑みを洩らす私に、師は苦笑しながらも頭を撫で続けてくれる。だがその表情に、私はふと違和感を覚えた。

『どうした？ 琳麗。変な顔して』

『……ししよう、なにかあった？』

何となく確信めいたものを感じていた。

飄々とした師の表情は、いつも通りだ。だが、やはりいつもと何か違う。

『何だ？ いきなり』

『だって、ししよう。いつもよりげんきが、ないような気がするんだもん』

私のその言葉に驚いたように、師は目を見開く。だがやがて何か懐かしいものでも見るように、目を細めて私を見る。

『参ったな……。やっぱりお前らには一生敵わないよ』

『へ？』

不思議そうに目を瞬<sup>またた</sup>く私に苦笑してみせてから、師は湖に顔を向ける。

その横顔はどこか悲しそうで、沈みゆく夕陽をじっと見詰めている。

『……ししよう？』

『綺麗な夕焼けだな。琳麗』

それっきり師は口を開かなかった。ただ静かに黄昏<sup>たそがれ</sup>ていく空を見詰め続けた。

これは夏に近付き始めたある日——私が珠珠<sup>ししき</sup>に出会う前のこと。そう、梅雨入り前のことだった。



かたかたと何かが揺れる音に、琳麗はふと目を覚ました。目の前に見えるのは、先程の牢部屋とは違う天井。

（あれ？ 私……）

寝惚けた頭は未だにうまく働かない。

琳麗は自分が置かれている状況がわからないまま、<sup>け</sup>気だるさの残る身体を起こす。

「……ここは？」

周りを見回すと、やはり先程までいた牢部屋とは違う。普通の造りの部屋のようだ。

窓を見遣ると、もう日暮れが近いのか、空は茜色に染めあげられている。

「え……もう日暮れ？」

先程まで、自分は蘇<sup>すわう</sup>芳達と話していたはずである。なのに何故、今現在こうして寝台に寝かされていたのだろうか？ しかも時刻は夕刻だ。自分の記憶違いでなければ、昼にもなっていないかったはずなのだが……。

「……………あ」

そこまで思い至って、琳麗はある事を思い出す。

思わず、自分に掛けてあった布をぎゅっと握り締めた。

「……師匠」

掠れるような声が琳麗の口から洩れる。

琳麗は沈んだ面持ちで、先程まで交わしていた会話を思い返していた。

『教えて下さい！ 師匠がどうしたんですか！？』

『……『陳紹帆』<sup>ちんろはん</sup>っていう奴は、この業界じゃかなり有名な人なん

だよ。黄都国<sup>おうとこく</sup>で大事件を起こした奴としてな』

『大事件……？』

『そう、黄都国前皇帝とその後継ぎを暗殺しようとしたんだよ。その時、数十名の官吏も亡くなっているらしい』

『う……そ。師匠がそんなことするわけない』

『事実だよ。もう二十年近く前になるけどな』

その言葉を最後に、琳麗の意識は途切れていた。

「……だから師匠は、黙って私の前から消えたのかな……？」

琳麗はやる瀬ない気持ちで、外の景色を眺める。

暮れてゆく空は、師のあの表情を思い出させた。あの時、師は何を思っていたのだろうか？

「師匠ともっと……ちゃんと話しておけばよかった……」

今思っても仕方がないのはわかっている。だがどうしても割り切れずにいる自分がいるのだ。

琳麗が歯噛みしていると、扉がずっと音もなく開かれた。

「あっ琳麗ちゃん、目が覚めたのね。気分はどうかかな？」

扉の隙間から顔を出したのは、蘇芳の姉・紅華<sup>こうか</sup>。

にこにこ笑みを浮かべながら琳麗に近付くと、紅華は目を合わせるように傍ら<sup>かたわ</sup>にしゃがみこんだ。

「うん、顔色もだいぶ良さそう。……ん？」

きよろきよると何かを探すように、首を巡らす。

「紅華さん……？」

その様子を訝しく思い、琳麗が紅華の名を呼ぶ。しかし、どうやらそれは聞こえていなかったようで、紅華は寝台の下まで覗き込んでいる始末である。

「あ、あの紅華さん、聞いてます？」

「うーん、おかしいわね。絶対にここから離れないって思ったのに、何処に行っちゃったんだか……」

再度、琳麗が呼びかけてみても、紅華は自分の思考に没頭してしまっているようで、まるで琳麗の声など届いていないようだった。



琳麗はその様子に、苦笑いを浮かべた。

（あはは……これ聞こえてないよね）

さて、どうやったら“こっち”に戻って来てくれるだろうか？

と、琳麗が真剣に考え始めたその時、がったんと大きな物音が部屋中に響き渡った。

「琳麗っ！！」

それと同時に、聞き覚えのある声が琳麗の耳に届く。

琳麗はその声に弾かれたように、窓を振り返った。

「珠——」

「こんのお馬鹿っ！！」

「へ？」

直後、右頬に鋭い痛みが走った。

琳麗は無意識のうちにそこを押さえ、茫然と相手を見下ろす。

対して相手は、憤然やる瀬ないといった風情で、こちらを睨みつけてくる。

「珠珠……」

「あんたはどれだけ私に心配させれば気が済むのよっ！ この大馬鹿者っ！！」

「……ごめん」

「“ごめん”じゃないわよ！ 私が昨日どんな気持ちでいたかわかる？ あんたの気が突然消えて、探っても探ってもわからなくて……もう二度とこんな思いはさせないでよ！」

「…………ごめん」

謝る以外の言葉が見つからず、琳麗はただその言葉を口にするしかなかった。

悄然と項垂れる琳麗を見兼ねてか、紅華がそつと口を挟む。

「ね、ねえ珠珠ちゃん、その辺にしよう？　琳麗ちゃん、さっき目が覚めたばかりなんだから」

「……………」

沈黙が降り立った部屋に、こんこんと扉を叩く音が響く。

その音に、琳麗は俯いていた顔を上げ、扉の方に顔を向けた。

「よう、琳麗。目が覚めたみたいだな」

「……………」何が“よう”よ。許可なく女の子の部屋の扉を開けるんじゃない」

「あつ、あーわりい。悪気はなかったんだ。まあ、そう怒るなよ、姉貴」

そうあつけらかんに言って、部屋に入って来たのは蘇芳。

そのまま紅華の隣に来ると、姉と同じように琳麗と目を合わせる。そして赤くなっている頬に軽く触れる。

「頬、赤くなってるな。大丈夫か？」

「……………」はい、大丈夫です」

「そうか……………」

蘇芳は伸ばしていた手を琳麗の頭に乗せると、そのまま労わるようにくしゃりと一撫でする。そして琳麗の傍らにいる珠珠に目を向

ける。

「なあ珠珠、お前の気持ちもわからなくはない。俺もお前と同じ立場だったら、絶対に怒るしな。でもさ、お前も言っていただろう？悪いのはあいつを逃がした俺らで、こいつは全然悪くないって。だからあまり責めてやるなよ？責めるなら、もう一度俺らにしろ。甘んじて受けてやるよ」

「……元凶のあんたに言われたくないわ。そんなこと、私だってわかってる」

「ふうーん？　ならいいけどな」

「……望みどおり、もう一度蹴っ飛ばしてあげるわよ？」

「…………それはもう止めてくれ。あれはさすがに痛い」

蘇芳の言い様に、隣にいた紅華が何かを思い出したか「ふふ」と笑いを洩らす。

「そうね。あんた、あれから半刻ほど気絶してたものね」

「……それ、こいつの前でわざわざ言わなくてもいいだろう？　姉

貴

「そう剥れないでよ。蘇芳」

半眼で自分を睨みつけてくる弟に、紅華は更に笑みを深くする。

その一部始終を見ていた琳麗も、何だかおかしい気持ちになって来て、自然と口を押さえる。でも堪え切れなくなって、口から「ふふ」と笑みを洩らしてしまう。

それに気付いた蘇芳は、恨ましげな瞳を琳麗にも向ける。

「なーに琳麗も笑ってるんだよ。あっおいつ珠珠も笑うな！」

しばらくの間、部屋には笑いが満ちた。

ようやく笑いがおさまると、不意に紅華が何か思い出したかのように口を開いた。

「そういえば蘇芳、藍雄らんゆうはどうしたの？ 確かあんたと一緒にいたわよね？」

「藍雄？ あいつは用事を思い出したとかって言って、慌ててどこかに行ったぜ」

「あの藍雄さんってどなたですか？」

「ん？ 藍雄か？ あいつはな——」  
「おいっ蘇芳！！」

蘇芳の言葉を遮るように、ぽんっと音を立てて扉が開く。

「おお噂のご本人が登場だ」

「何が噂のご本人だっ！！ 貴様、自分の仕事をほったらかして、何を優雅に寛くつろいでる！？ 貴様の部下が泣いていたぞ！？」

鼻息荒く言うこの青年は、年の頃は蘇芳より少し年上に見える。  
縹色はなだいろうの髪に、金色こんじきの瞳がよく映はえていた。

蘇芳はその青年をまじまじと見詰め、そして何かに思い至ったかのように、ぽんっと手を叩く。

「あ、やべ、忘れてたわ」

「“あ、やべ、忘れてたわ” じゃないだろうがっ！？ とっと思行け！！」

「はいはい。わかりましたよ。たっくお前、俺が年上だってこと、忘れてね？」

「貴様が尊敬に値する奴ならば、忘れることはないだろうがな」

「うわあ、相変わらず生意気な餓鬼だな……おっそうだ！ 琳麗に

ちゃんと自己紹介してやれよ？　じゃあな」

そう言い残して、蘇芳は彼らに背を向けて、部屋を出ていった。その様子を眺めていた青年——藍雄は、疲れたようにふうと溜息を零す。

「やっと行ったか。全く世話の焼ける」

「あなたが藍雄さん？」

琳麗が問いかけると、しかめっ面で扉を睨んでいた表情が和らいで、優しい顔つきになる。

「そうだ。あんた、目を覚ましたんだな」

「はい、お陰さまで」

「色々と蘇芳の奴が迷惑かけたようで、すまない」

「いえ。そう言って頂けるだけで十分です」

形式的な会話が済み、ふと藍雄が真剣な瞳になる。

「琳麗。あんたに折り入って頼みたいことがあるんだが、いいだろうか？」

「……変なことを頼むんじゃないわよね？」

「ちよっ、珠珠！」

「いいから琳麗は黙ってって」

いきなり失礼なことを言い出す珠珠を、慌てて琳麗は止めようとするが、珠珠の鋭い声音こわねに押し黙る。

「で、どうなの？　場合によっては断るわ」

「あんた達の目的の邪魔はしない」

「……あんた達は紹帆を捕まえる気はないの？」

「何故？ 前にも言ったと思うが、俺達に捕まえる気はない。俺達は黄都国おうとこくとは敵対関係にある。捕まえる義理はない。むしろ感謝してる」

「え……？」

その言葉に思わず琳麗が声を洩らすと、先程から黙って話を聞いていた紅華が説明してくれる。

「琳麗ちゃんのお師匠さんが、黄都国内部を混乱させてくれたお陰で、その頃政治が不安定で揺れていた南朱国なんしゅこくは、何とか戦の危機をまぬがれたの。だから私達は感謝してるのよ」

「そうなんですか……。でも何であんな言い方したんですか？」

「あの時は二人ともちょっと驚いちゃっただけだから、気にしないで。まさか琳麗ちゃんの口から、その人の名前が出てくるとは思わなかったし。もしかしてずっと気に病んでいたかしら……。だったらごめんね」

「いえ！ こちらこそ気にしないで下さい！！」

「……そろそろ話を元に戻すが、いいか？」

話が脱線してきた頃に、藍雄が間に割って入ってくる。

琳麗がその言葉に黙って頷くと、藍雄は改めて話を始める。

「さっきも言ったように、俺達に捕まえる気はない。あんた達は確か次に行く場所は南朱国の首都州・星州の祝融しゅくゆうだったな？」

「ええ。そこに行くって情報を前の街で聞いたから。それが？」

珠珠が聞き返すと、藍雄は琳麗と真正面に向き直った。

「俺達と一緒に行かないか？ あいつを捕まえる手助けをして欲し

い

——開幕ノ序曲(二)——(後書き)

ここまで読んで下さり、ありがとうございました。  
亀更新ですが、これからもよろしく願います。



——開幕ノ序曲（三）——

「俺達と一緒に行かないか？ あいつを捕まえる手助けをして欲しい」

思いも寄らない言葉に、琳麗りんれいは己の耳を疑った。そして言った本人の顔をまじまじと見詰める。

藍雄らんゆうはもう一度言い聞かせるように、今度はゆっくりとした口調で、かつはつきりと言う。

「あんたに協力して欲しい。あんたはあの男と同じ気脈師だと聞いた。それにあんたに興味があったようだしな」

人好きのする笑みを口元に乗せ、藍雄はじつと琳麗の瞳を見る。その瞳は優しさを湛たたえながらも、視線を逸らすことを許さない、そんな強さがあった。

「あ、あの、その——っ！」

琳麗はその視線に半ばたじろき、言い淀よどんでしまう。

「琳麗。そんな奴の言葉なんか聞かなくてもいい」  
「珠珠」

そんな時、横合いから助け舟が出された。

琳麗はそれにほっとして、自分の真横に視線を向ける。珠珠は琳麗を庇うように、藍雄の前に進み出ると、目を吊り上げて藍雄を睨み据える。

「それってつまり、琳麗を利用してその男を捕まえようということよね？」

「……確かにそうなるな」

藍雄のその言葉に、珠珠は瞳をずっと冷たくさせる。藍色の瞳が鋭さを帯び、藍雄を射抜く。

「そう。こんなに琳麗に迷惑をかけておいて、よくもぬけぬけとそんなことが言えるわね？　いつそのこと、感心するわ」

「……それを言われると痛いんだが。だが、あんた達にも悪くない話のはずだ」

「は？」

珠珠の目つきが一段と険しくなる。だが藍雄は気にした風もなく、むしろ平然とした態度で珠珠の瞳を見返す。

「先程も言ったと思うが、俺達はある俺達達の邪魔をしない——そう言ったはずだ」

「それが何？　私達があんた達の事情に関わる理由にはならないわ。むしろ関わり合いになんてなりたくない。それがとんでもなく危険な野郎を捕まえることなら尚更よ」

「あんた達の探している人物の行方を一緒に探すと言ってもか？」  
「え？」

驚愕の声を上げた琳麗に、藍雄は静かな瞳を向ける。

「あんたの師匠の行方はわからないが、俺達——東一族が<sup>とう</sup>一丸となつて探す手筈を整えよう。この国の中は、俺達の庭みたいなものだからな」

「……どうしてそこまでするの？」

藍雄の意図がどこにあるのかわからず、珠珠は鋭い視線を向け続ける。

珠珠のその問いに、藍雄は言葉を練るねように一瞬上向き、そして朗らかな笑みをこちらに向けてくる。。

「蘇芳すおうの奴が迷惑かけたから……だな。あいつの尻拭いはいつも俺の役目だしな」

どこか奥歯に物が挟まったような物言いに、珠珠はますます険しい顔つきになる。

「東一族といえ、この国で三番目に勢力を誇る一族のはずよ。あんたがそれを動かせる位置にいるのか甚はなはだ疑問だけれど、そんな一族が何故わざわざ小娘一人のために動くの？ 何が目的？」

その言葉に今まで口を噤つぶんでいた琳麗が、はっとしたように藍雄に顔を向ける。

驚愕に彩いろどられた表情に、藍雄は内心「よく表情が変わる娘こだなあ」と思いつつも、それを表情には？おくひにも出さず、常の表情で対する。

「気脈師はこの国ではかなり貴重だ。ほんの一握りしかない。それに先程も言ったと思うが、俺達が相手している奴もまた気脈師。しかも相当な使い手だ。俺達は気脈師のことについて詳しくない。だから気脈師であるあんたの助言を聞きたいのが本音だな」

「私の……？」

「ああ」

「琳麗ちゃん、それに珠珠ちゃん、私からもお願いできないかな？」

紅華こうかの縫すがるような視線を受け、琳麗は困惑した風情になる。

ちらりと真横に目を遣れば、珠珠はじつと藍雄を視線を注いでいる。その鋭い眼光は、何かを探ろうという必死さが窺えた。<sup>うかが</sup>

琳麗は徐に藍雄に目を戻す。<sup>おもむく</sup>

金色の瞳が答えを待つように、静かな色を宿していた。

琳麗はすつと息を吸い込み、力強い目つきでそれを見返した。

「……協力します！」

狭い部屋に琳麗の凜とした声が響き渡る。途端、藍雄と紅華の顔に喜色が浮かんだ。だが、珠珠は眉間に眉を寄せ、睨めつけるように琳麗を見上げる。

「何を言っているの、琳麗！ こいつら絶対に裏があるに決まっているわ。あんただってわかるでしょう！？」

「確かにそうだけど……、でも絶対に悪い様にはならないと思うから」

この人は絶対に自分を裏切らない……何故かそう感じられた。理由も根拠も何もない、ただの直感だ。この人を信用しても大丈夫だと確信めいたものがある。

(……それに)

“あの青年にまた会いたい”とそんな気持ちが胸を占めていた。師を探すという目的は変わっていない。これからそれは変わらないだろう。だがそれと同時にその気持ちも強く持っている。

いくら理不尽なことをされても、関わり合いにならない方がいいとわかっていても、どうしても“会いたい”という気持ちは、昨夜

からずっと消えなかった。

……それはどうしてなのか、自分でもわからないけれども。

「最初はいきなり『協力してほしい』と言われて、正直言って凄く困ったけどさ。でも話を聞いている限りじゃ、悪い感じは全然なかった。」

それに協力してもらえば、師匠も早く見つかるかもしれない。……だから珠珠、私協力したい」

「……琳麗」

珠珠の諫めるような責めるような声音に、琳麗の胸がちくりと痛んだ。多分それは師を探すためだけに、自分は協力するわけではないから、だろう。

でもそんなこと、珠珠に言うわけにはいかない。

珠珠は心配性だ。それもこちらが呆れてしまう程に。言えば絶対に反対される。心配な上に。

それがわかっていいるから、余計言うわけにはいかないのだ。

「珠珠、お願い……！」

「……………」

長い長い息が吐き出された。



「珠珠ちゃん、本当に琳麗ちゃんのこと心配なのね」

珠珠が話があると言って、藍雄と一緒に部屋を出ていった後、残された琳麗と同じく部屋に残された紅華は何気なしに口を開いた。

「あなたが気を失って、封碎石ふうさいせきを外してこの部屋に寝かした後、しばらく経ってから珠珠ちゃんがここに飛び込んで来たのよ」

「え……？」

紅華は微笑ましいものを見るように、琳麗に柔らかい眼差しを向ける。

「それからね、布団に横になっている琳麗ちゃんを見て、最初に目が合った蘇芳と大喧嘩して……本気で心配している気持ち私にも伝わってきたな。」

それを藍雄と私の二人掛かりで何とか止めようとしたけど、琳麗ちゃんも知ってのとおり、結局珠珠ちゃんの蹴りが見事に蘇芳の顎に当たって、私たちが止めるまでもなかったって落ちになっちゃったけどね」

悪戯っぽくそう言い、くすくすと笑う。

琳麗は自分が寝ている間にそんなことがあったのかと、大きな瞳をぱちくりさせている。

「それにさっきの様子を見ると、珠珠ちゃんって琳麗ちゃんのお母さんみたいだなんて思ったの」

「あはは……確かにそうかもしれないですね。でも昔から珠珠はあんな感じです。こちらが呆れてしまう程に心配症なんですよね。だけどそれは私を心配してるからだってわかってるんです。

だから私はなるべく心配かけないように、慎重に行動するよう心掛けてはいるんです。……それでもやはり心配させてしまうのは変わりないんですが」

「そうなの……。でもそう言えば、珠珠ちゃんって用心深い性格よね。霊獣って皆そうなのかしら」

「皆が皆そうではないと思いますけど、珠珠は——……」

琳麗は過去に思いを馳せるように、どこか遠くを見詰めた。

珠珠とはじめて会ったのは、雨が降り続いている季節。

琳麗は雨が止んだ合間を縫<sup>ぬ</sup>って、一人外に出た。

しばらく森の中を歩き続け、その時不意に横の草むらで何かが動く気配がした。琳麗は気になってそちらに足を向けた。そして見つけたのは酷い怪我を負った一匹の小さな霊獣。

思わず駆け寄った琳麗が傷の具合を診ようと身体を触ろうとした途端、その小さな霊獣は激しく威嚇した。その頑<sup>かたく</sup>なに自分を拒絶しようとする態度に、正直に言って琳麗は困惑してしまった。

どう接すればいいかわからず、右往左往していると、突然その霊獣は横に倒れた。

慌ててその身体を抱きかかえると、その冷たさに背筋にひやっとしたものが駆け下りた。見ると手は血にべっとり汚れていた。

——このままでは危ない……！

まだ幼い琳麗でも判断できる程、その怪我は酷い有様だった。

即座に家に帰ろうと琳麗は踵きびすを返した。だが荒い息を吐きながらも、その小さな霊獣は激しい抵抗をした。

何とか師のいる家まで連れ帰り、師と共に丸三日不眠不休の体ていで看病し続けた。その甲斐あってか、その小さな霊獣は徐々に回復していき、助けてくれた自分たちに恩を返そうと、以来ずっと自分と一緒にいる。

「何があったのか聞いてみましたけど、珠珠は何も答えませんでした。多分、珠珠は人間に傷つけられたんだと思います。何となくですけど、そんな気がするんです」

「そう……」

「だから珠珠はそう簡単に人を信用しようとは思わないんだと思うんです。相手をよく見てから、行動に移すようにしているように思えるんです。……きっと怖いのだと思います」

そう言い切ると、琳麗はすっかり日が暮れた空を窓越しに見上げる。紺色の空に一番星が輝いていた。

「だから、だからこそ珠珠にはあんまり心配をかけたくないんです。……でも、それでも私、あなた達に協力したいです」



どこか切実な琳麗の言葉は、静かに部屋に響いて消えていった。

――開幕ノ序曲（三）――（後書き）

ここまで読んで下さり、ありがとうございました。

今回は蘇芳たちに協力するようになった経緯と、珠珠との出会いを主な話としました。

ちまちまと進んでいって、相変わらずの亀更新ですが、どうぞよろしく願います。

――開幕ノ序曲（四）――（前書き）

この話は最初はシリアスですが、後半が少しギャグになっております。

——開幕ノ序曲（四）——

「うーん！ 朝からいい天気だー！！」

開け放した窓から清々しい朝の風が流れ込んでくる。

琳麗りんれいはそれを肺いっばいに吸い込みながら、硬く強張った身体を徐々ほぐに解していく。

今朝も昨日同様、気持ちの良い目覚めだった。

最近では毎晩のように見る【あの】の所為で、いつも目覚めは最悪と言っても過言ではなかった。だが昨日から、それは嘘のように見なくなった。

その理由は、自分でもよくわからない。いつまでこの状態が続いてくれるのかも、正直なところわからない。けれどもこの状態がずっと続いてくれればと、願わずにはいられなかった。

もうあんな【夢】など……見たくはないのだから——

ふと見上げた空は、この梅雨の時期には珍しい快晴だ。気持ちまで晴れ渡るかのような、雲一つないどこまでも青い蒼い空。

それを見る琳麗の顔が、自然と綻ほころんでくる。

「今日もずっと晴れているといいな。……ね、珠珠ししし」

琳麗は振り返って、寝台の上で静かに目を向けてくる霊獣を見る。珠珠はじつと琳麗の琥珀色の瞳を見据え、やがて徐おもにふさふさした長い尾を一振りすると、短く「そうね」と答える。

琳麗はその返答に軽く苦笑すると、再び晴れ渡った空を見上げる。

その一連の動作をつぶさに見守っていた珠珠は、どこかほっとし

たように詰めていた息を吐き出す。

どうやら今日は【あの夢】を見ずに済んだようだ。

そうであれば、昨日も見なかったというのは本当のことなのかもしれない。自分は琳麗が己を心配させないように、わざと吐いた嘘だと思っていたのだが……どうやらそれは違ったようだ。

（そう。嘘でないならその方がいいもの。だって琳麗のあんな顔、……私もう見たくないもの……）

最近、毎晩見るようになってしまった【あの夢】。

内容は全く覚えていないという。だがその【夢】の残滓ざんしに、琳麗はいつも苛さいまれ続けてきた。

苦しくて、悔しくて、悲しくて……どうしようもない程の絶望感が襲ってくるのだと、昔泣きじゃくりながら言っていた言葉を思い出す。

（……それに）

自分は知っている。

悪夢に魘うなされながら、うわ言のように何度も何度も繰り返していた言葉を。

——ごめんなさい、と。

それはとても悲しい声音こわねだった。

この事は琳麗には伝えていない。いや、伝えたくはない。

（どうして、琳麗は【その夢】を見るのだろう……？）

いつも頭に浮かぶ疑問。けれど決して口にはしない疑問。

珠珠は尚も空を仰いでいる琳麗を見遣る。

時折、あの山から出なかった方が良かったのではないかと思う時がある。あのまま山で過ごしていた方が、この子は幸せになれたのではないか？　そう思うのだ。

（……何も起こらないで欲しい。どうかこの子の平穏を壊さないで欲しい）

珠珠がそう切に願った時、突然部屋の扉が開かれた。

「よう、琳麗。よく眠れたか？」

「……蘇芳さん、いきなり扉を開けないで下さい。着替え中だったら、どうするんですか？　はっ、まさかそれを狙って……？」

「いやいやいやっ！　違うからっ！！　誤解してくれるなっ！！」

琳麗の低い声音に、蘇芳は慌てて手を振る。その顔は必死だ。

「なーにが誤解よ？　あんたのその行動自体が怪しすぎるわ。だいたい、勝手に女の子の部屋を開けるなんて、……非常識にも程があるんじゃない？」

珠珠の冷たい指摘に、蘇芳は今度は首をぶんぶん振って否定する。

「だから違うって言っているだろう！？　不可抗力だ！　下心なんてない！！」

「どーだかねえ？」

「だから違っ——ぐえっ——！！」

蛙が踏み潰されたかのような声と共に、蘇芳が顔から倒れる。

その様を後ろから来た藍雄は、酷く冷めた目つきで見下ろしていた。それは恰も、道端に転がっている石を見るのと同じ冷たさだった。

「朝っぱらから、煩いぞ、蘇芳。もう少し静かにできないのか？」  
「……………てめえ、藍雄……………！」

蘇芳がむっくりと起き上がる。だがその表情は前髪に隠れて、窺い知ることはできない。

「早く起きろ。そんな所で寝てられると邪魔で構わん」

ゆらりと、まるで幽鬼を思わせる動きで蘇芳が立ち上がる。

「……………おい、藍雄」  
「何だ？」

蘇芳の地を這うような声にも、藍雄は涼しい顔で返す。

「いきなり人の背中を蹴りつけるとは、どういう料簡だ？ 一度お前と話し合わなきゃ、いけないようだな？」

「俺はそう思わないがな。ただ邪魔だから退かした。それだけだ」  
「へえ？ そうかよ。……………なら、表に出ろっ！ この餓鬼！！ 今度という今度は許さねえ……………！」

「……………ふん」  
「あ、あの二人共……………！」

琳麗は思わず二人に声をかける。だが二人はお互いを睨み合ったまま動かない。

部屋に流れる時間が、やけにゆっくりと感じられた。

殺伐としたものを二人の間に感じるのは、果たして自分の気のせいであろうか……？

琳麗が再度声をかけられずにいると、扉の影から一人の人物が現れる。その人物は音も立てずに二人に忍び寄ると、己の拳を二人の頭に叩き落とした。

ごんつと潔い音が、辺りに響き渡った。

「……っ、痛え……!!」

「…………っ」

二人は打たれた箇所を押さえる。その二人を睥睨とした眼差しで見下ろすのは――

「紅華さん……」

琳麗が思わずその人物の名を口にとすると、紅華は一瞬だけ琳麗に顔を向け微笑む。だがすぐに険しい顔つきに戻ると、屈んで頭を押さえている二人を見る。

「……二人とも、朝っぱらから何をしているの？　しかも女の子の部屋で」

「あ、姉貴……」

「…………」

蘇芳は涙目で自分の姉を見上げ、睨めつける。しかし紅華はその視線を受けても、柳に風といったふうで、怯む様子は見られない。紅華はふうと息を吐き出すと、自分を恨みがましい目で見詰めてくる弟を無視して、傍らで同じように頭を押さえている藍雄に視線



をくれる。

「藍雄、あんたまでこの馬鹿に乘せられてどうするのよ？　もっと時と場所を弁わきまえなさい。こいつと同類になるわよ？」

「……すみません、紅華さん。以後、注意します」

「うん、よろしい」

「おい、待て姉貴。何だよ、その言い草は。聞き捨てならねえんだけど？」

蘇芳の陰のある声に、紅華はやつとまともに弟と向き合った。

「あんたねえ、年下相手に喧嘩なんかして……大人げないと思わないの？　藍雄はあんたよりも六つも下なのよ？」

「そんなの関係ねえだろう！　だいたいこいつが先に――」

「む、む、六つ……！？」

二人の会話に割って入るかのように、琳麗が唐突に声を上げる。

怪訝けげんに思って琳麗に顔を向けると、何やら琳麗がわたたと蘇芳を指さしていた。その顔は、まるで信じられないものを見た時のように、驚愕きょうやくに彩いろられている。

「おい、琳麗。どうした？」

琳麗のその様子を訝うしろさって蘇芳が声をかけると、琳麗はごくりと生唾なみだを呑み込んだ。そして意を決したように次の言葉を発した。

「蘇芳さんって、藍雄さんより六つも年上だったんですか？」

「……………」

蘇芳は誰が見てもわかるくらいに、がっくりと肩を落とした。そ

して床に意味もなく、ぐるぐると円を描き始める。

「……どうせ、俺は童顔だよ。悪いか。俺だって好きでこんな顔に生まれてきたんじゃないってーの……」

「あもう、蘇芳さん？ どうしたんですか？ 具合でも――」

何やらぶつぶつと独り言を言い始めた蘇芳を心配して、琳麗が駆け寄って声をかけようとする、それをやんわりと紅華に止められる。

「琳麗ちゃん。どうか今はほっといてあげて」

「どうしてですか？」

琳麗がそう問いかけると、紅華は言い辛そうに目を逸らす。だが代わりに答えてくれたのは、いつの間にか琳麗の横に立っていた藍雄だった。

「琳麗。お前は今、あいつにとっての禁句を言ったんだ」

「禁句？」

「ああ」

それ以上は藍雄も口を閉ざし、蘇芳に憐みの眼差しを向けていた。琳麗は何だか釈然とせず、答えを求めて紅華に視線を戻せば、その紅華も弟に憐憫<sup>れんぴん</sup>の表情を向けている。

「ねえ琳麗」

二人のその様子に、琳麗が眉を顰<sup>ひそ</sup>めていると、今まで沈黙<sup>ひんじふもく</sup>を通してきた珠珠が、琳麗の肩に飛び乗り、耳元で小さく一言囁<sup>ささや</sup>く。

「あいつって多分、自分の童顔の所為で、実年齢より餓鬼に見えることが負い目なんじゃないかしら？」

「えっ、そうな——」

「誰が餓鬼だっ!? このちび獣がっ!!」

それまでぶつぶつと独り言を呟いていた蘇芳が、いきなりくわっとこいらに目を剥く。そのあまりの迫力に、琳麗は思わず後ずさりした。

「誰がちび獣よっ! 失礼な野郎ね!？」

「ああ? てめえが先に言ったんだろうが!？」

「あんた被害妄想が激しいんじゃないの!? やあね、地獄耳の奴って」

「んだとー!？」

(……耳元でぎゃんぎゃん煩いんだけど、珠珠……)

二人? の言い争いに巻きこまれる羽目になった琳麗は、半ば現実逃避の体で、視線を窓の向こうの空へと向けていた。

(ああ、今日の空はやっぱり綺麗だなあ)

すぐ側で繰り広げる戦いを尻目に、琳麗はのんびりと青空に思いを馳せていた。

それから紅華と藍雄が止めるまで、その争いは続いたのだという。

だが今思えば、これが本当に全てがはじまる前の、平和な朝の光景だったのかもしれない――。

——開幕ノ序曲（四）——（後書き）

ここまで読んで下さり、ありがとうございました！

前書きでも書きましたが、後半にギャク要素が少し混じっています。  
あまりセンスはないかもしれませんが……（汗）。

毎度お馴染みのチマチマとしか話が進まないわりに、亀更新な物語  
ですが、

これからお付き合い合えればと、思います！

——開幕ノ序曲（五）——

一陣の風が、湖の水面を浚さらっていく。

琳麗りんれいはその風を頬に受けながら、波立つ湖面を静かに見詰める。

（あの湖とよく似ているな……）

脳裏に浮かぶのは、故郷の山の麓ふもとにある湖。ここに吹く風は、あの湖と同じ薫かおりがする。

（……師匠）

「琳麗、何ぼーつとしてるのよ？　蘇芳すおうたちに置いていかれるわよ？」

郷愁ふけに耽ふっていると、横合いから珠珠しゅしゅがぬっと顔を出してくる。

そう、今から遡ること、半刻前——。

てんやわんやあった朝が過ぎ、太陽が真上に昇った頃。自分達はようやく彼らの事情を知ることとなった。

そして話だけでは分からないだろうからと、紅華こうかが蘇芳すおうと藍雄らんゆうの両名に自分たちをこの湖にまで連れて来させ、今に至るのだ。ちなみに紅華は何か用事があるらしく、同行はしていない。

「あーごめん、ごめん。あの山の湖とよく似てる気がしたからさ。ついね」

苦笑に近いを笑みを浮かべながら答えると、珠珠が神妙な顔つきで自分を見据えていた。

「な、何？ 珠珠」

「……もしかして帰りたい？」

「え？」

唐突なその問いに、琳麗は数度目を瞬く<sup>まばた</sup>。そして食い入るような目つきで、珠珠を凝視した。

「何でそうなるの？」

「別に……。特に理由ないわ」

曖昧<sup>あいまい</sup>な口調で、珠珠はついと首を逸らす。

「珠珠――」

「私、あいつらに協力すること、まだ完全に賛成したわけじゃないから」

珠珠のそんな反応に眉を顰め<sup>ひそ</sup>口を開きかけるが、それを遮るように言葉を被<sup>かぶ</sup>らされる。

「あんたは迂闊<sup>うかつ</sup>で、変なところで頑固。だから心配なのよ。

それにあんたはまだ本調子じゃないでしょ？ 一昨日<sup>おととい</sup>から比べれば、格段によくなったとはいえね」

その言葉に、琳麗ははあと溜息を吐く。

「もう大丈夫だよ。それに今日も夢見は悪くなかったし。そんなに心配しなくても――」

「だ〜か〜ら〜、そういうところが迂闊だって言うのよ！ あんたは樂觀視しすぎ！！」

くわっと目を開き、眼光鋭く睨みつけてくる。その形相はまるで鬼のようで、元が可愛らしい顔をしているだけに、余計に……怖い。

「……う、うん！ そうだね！ 私って迂闊だよ！ 樂觀すぎるよね！ 珠珠の言うとおりだよ！ これからは気をつけるからだ、だからさ、ちょっと落ち着こうよ！？ ね！？」

琳麗は引き攣った表情を浮かべながらも、鼻息の荒い珠珠を宥めるために必死に唇を動かす。だが――、

「十分落ち着いているわよ！」

（ひえ……これ本気でぶつつんきてるし……）

本気で泣きたくなった琳麗だが、どこにも救いの手というものはあるもので、そんな二人に（正確には一人と一匹に）蘇芳の声がかけられた。

「おーい、琳麗！ 何やってんだよ？ そんなところで。早く来いよ！ 置いていくぞ？」

「はい！ すぐ行きます！！！」

内心「助かった」と胸を撫で下ろしながら、なるべく珠珠に目を向けないようにして、蘇芳と藍雄のいる所までひたと走る。

蘇芳たちは少し先の方で足を止め、琳麗が追いついて来るのを待っている。

「すっすみません！！！」

「たっく……。何してんだ？」



呆れた風情で、蘇芳が問いかけてくる。藍雄も同様に何か物言いたげな視線を向けてくる。

だが琳麗は、それに作り笑いを浮かべて答える。

「あはは……。何でもないです。気にしないで下さい」  
「……さいですか」

半眼で見下ろしてくる蘇芳の視線から、琳麗は思わず目を背ける。身体に突き刺さってくる視線が、やけに痛かった。

しばらくの間その状態が続くと思ったのだが、横から思わぬ助け舟が出される。

「おい、蘇芳。いつまでそんな事してる気だ？ とっと社の所まで行くぞ。日が暮れる」

「わかってるよ。たく……。行くぞ」

藍雄の冷静な指摘に、蘇芳はふっと息を吐き出すと、その場で踵を返す。

琳麗は慌ててその後を追った。

「……………」

だがそのやり取りの間、珠珠はずっと沈黙を貫いていた。



「ここだ。俺達が琳麗を連れて行きたかった場所、『朱夏殿』」

蘇芳のその言葉に、琳麗は目の前に聳え建つ壮麗な社を見上げる。

「凄い……。これがあの有名なお社ですか？ 私、初めて見ました。遠くから見た時は小さく見えましたが、凄く大きいんですね……」

今、琳麗たちがいる場所は、州城のすぐ裏手にある広大な湖の上。そこに建つ『朱夏殿』の一角『柳宮』の前だ。

城の窓から見下ろせる位置にあるその社は、一般の者はおろか州城に務めている者ですら近付くことを禁じられており、また湖に近寄ることも禁じられているという。

その事に疑問を持ち、「どうしてなのか？」と理由を訊いてみたところ、「龍珠を護るためだ。だから常に目の行き届く州城内に社がある」と実に簡潔に藍雄は答えてくれた。

だがもう一つ疑問が浮かんだ。州城の者ですらこの湖に立ち入ることは固く禁じられているというのに、明らかに余所者である自分たちを、何故ここに案内するのだろうか？ と。

「あのどうして私をここに……？ はっ、まさかあの人と何か関係が？」

「ご明察のとおり。あの野郎と関係ありまくりだ」

苦虫を噛み潰したような顔で、蘇芳が吐き捨てる。藍雄も同様に、悔しそうに顔を歪めている。

その二人の顔を交互に見上げ、琳麗は困ったように眉を下げる。沈黙が続いている珠珠も、何か問うような瞳で蘇芳を見ていた。

「あのお二人とも、あの人と何があったんですか？ いい加減教えてくださいませんか？」

これはあの夜から、ずっと気になっていたことだ。

あの青年と遭遇した直後、打ち合わせたかのように蘇芳があの場に現れた。その身体の傷は満身創痍<sup>がた</sup>とは言い難いものだったが、それでも全身に酷い傷を負っていた。

それに月明かりに照らし出されたあの青年の姿。頭から血を被ったかのように、全身血にまみれていた。

「あの人是一体……何をしたのですか？」

「……来ればわかるさ」

そう一言言い残し、蘇芳は社の中へと入っていく。  
翠の瞳は、どこか思い詰めた風だった。

その瞳を垣間<sup>かいま</sup>見た琳麗は、何の言葉も掛けられず、無言でその背を見送る。するとその時、ぽんと右肩を軽く叩かれる。

振り返ると、藍雄が静かな眼差しでこちらを見詰めていた。

「藍雄さん……」

「あいつの言うとおり。来ればわかる。行くぞ」

「は、はい！」

藍雄に背を押され、琳麗は社の中へと足を踏み入れていった。



——開幕ノ序曲（五）——（後書き）

ここまで読んで下さり、ありがとうございました！

今回の話は少し長くなりそうだったので、  
次回の話とで分けました。

ご感想やご指摘など頂けると、飛び上がるほど嬉しいです。

——開幕ノ序曲（六）——

社やしろの中に足を踏み入れた途端、琳麗りんれいは言い知れぬ違和感を感じた。

（何……？ 空気が……変わった？）

気になり、周囲を隈くまなく見回す。すると、ある一点に目が留まった。

中央に安置された朱雀を象かたどった像の向こう、その更に奥にある祭壇の上。一つの鏡がそこに置かれていた。

だがよく見れば、所々ひび割れ、鏡面は酷く濁っている。最早鏡としては使い物にならないだろう。

（……というか何であんな所に鏡があるの？ 普通、龍珠だよね……？）

そう思ってしまうのは、至極もつともなことで、ここは龍珠を祀まつる場所の筈だ。だがその肝心の龍珠は何処にも見当たらず、龍珠があつてしかるべき場所には、何故か鏡がある。しかもその鏡はお世辞にも、この場に似つかわしいとは言えない有様だ。

（うーん……なら、何か特別な力を秘めているとか？）

そう思い直し、注意深く見る。が、それも微々たるもので、あそこに置かれる理由としてはかなり頼りない気がする。

だが、妙に気になった。

琳麗は一度頭を振って、無理やりそこから視線を引き剥がす。そして再び周りを見回した。

だが見たところ、それ以外は別段変わったところは見受けられない。至ってどこにでもある普通の造りの廟だ。まあ、施されている意匠は、そこらのものと格段に違うことを除けばの話だが……。

「ねえ珠珠」

「何？」

「何かここ変だと思わない？ 何て言うのかなあ……こうしっくりこないっていうか」

「そうね……。強いて言うならば、『認識をずらされてる』って感じかしら」

声を潜めて珠珠に話しかけると、珠珠も何かに感じていたようで、鋭く辺りに目を走らせていた。

「二人共、勘がいいな」

その様子を見ていた蘇芳が、苦笑混じりに言う。藍雄もどこか感心した風情だ。

「やっぱり何かあるんですね？」

二人のその反応から、そう確信した琳麗はすかさず問う。

蘇芳はその問いに軽く首肯すると、首をくいと祭壇の方に向けた。

「まあな。琳麗、珠珠。祭壇に置かれている鏡をよく【視】てみる。あとこの社の気配も探ってみな。お前らなら、多分わかるんじゃないか？」

「鏡を……？」

蘇芳に言われ、琳麗は改めて鏡を視界の中に入れる。今度は【視ることに重きを置いて。

一目見た時から、どうにも気になっていた鏡。そしてこの社の中に入った時から感じていた、拭い切れない違和感。

琳麗はそれらの正体を見極めようと、己の五感を研ぎ澄ませた。次に鏡から発せられる僅かな力に意識を定め、それを中心に周囲に自分の感覚を広げていく。

だがその瞬間――ぴりつとした痛みが全身を駆け巡った。

「……っ」

息を止めてしまう程の衝撃。

全身に未だ残る痺れに顔を顰めつつも、琳麗は構わず作業を進めていく。

しかし、またあの衝撃が身体を襲う。それは先程よりも強く、まるで琳麗がこれ以上侵入するのを拒んでいるようだった。

（何これ……結界？ でも何だか……）

そう、結界とは微妙に何かが違う。でもその『何か』が、はつきりと言葉にすることができない。

琳麗はそのもどかしさに焦れながらも、逸る気持ちを抑え、反発するそれに更に自分の感覚を押し広げていく。

そしてようやく探り当てた微かな気配に、琳麗は軽く目を瞠った。

「これ……、空間転移の術……ですか!？」

気付いてしまえば、この社全体の異常さが分かる。恐らく入った



時点で、既に術の中に取り込まれていたのだろう。

媒体は、あの鏡であることには間違いない。だが驚かされたのは、それではなかった。

琳麗はごくりと唾を呑み込み、蘇芳を見る。

「この術……、『四象』系統のもですよね？」

『四象』——数ある術の系統の中で『五行』に次ぐ威力を誇る高度な系統だ。それがこの社で展開されている。

「(一)明答」

蘇芳は徐に祭壇に歩み寄ると、鏡にゆっくりと手を翳した。それと呼応するように、鏡も仄かな光を放ち始める。

「蘇芳、あんた何する気？」

急に行動を取り始めた蘇芳を訝しんだのだろう。珠珠が怪訝な顔つきで問う。

「ん？ 『何？』 って、鏡の中の世界に行くだけさ」

「は？」

「『鏡の中の世界』 って……。どういう事ですか？ 蘇芳さん」

珠珠の問いかけに、蘇芳は何でもないかのように軽い口調で答える。だが、その内容はあまりにも現実離れをしていた。

「鏡の中は鏡の中だよ。……おい、藍雄。お前も手伝え。俺一人にやらせる気か？」

戸口近くに立つ藍雄に、蘇芳は半眼を向ける。視線を投げかけられた藍雄は、蘇芳に気付かれない程度のそっと嘆息をつく、祭壇に近付いていく。

「蘇芳。あんたは相変わらずこういった繊細な作業が苦手だな。いい加減慣れろ」

「うるせえ。こういうちまちましたのは性に合わないんだよ。いいから手伝え」

「……………はあ」

藍雄はどこか諦めたように、鏡に手を翳す。すると、鏡から放たれる光が更に強くなった。

「よし、これで準備完了だな。おい、琳麗に珠珠も早く来い」

「えっあの……話がよく見え——」

「いいから早く来い！！ 説明は後でしてやるから！」

手招きされ、琳麗は珠珠を肩の上に乗せながら、彼らの真ん中に入っていく。その直後、ぐいっと肩を引き寄せられる。

「うわあっ……………！ ら、ら、藍雄さんっ!？」

「……………おい。何やってんだよ？ お前」

「……………」

蘇芳と珠珠の両者に睨まれても、藍雄は平然とした態度を崩さず、淡々とした口調で言い返す。

「あんたは自分一人だけで精一杯だろう？ こいつらの事まで気を回せるのか？」

「ぐっ……確かにそうだけどよ」

「なら異存はないだろう？　俺がちゃんと連れていく。さっさと行くぞ、蘇芳」

その言葉を合図に、琳麗たちは膨張する光の中に飲み込まれていった。



鉄の錆びた臭いが、つんと鼻に衝いた。

周りを見回すと、壁や床などが所々破壊され尽くされ、最早原型を留めている物を探す方が難しい。

だが最も目を引いたのは、それらではない。

至る所に付着している夥おびただしいまでの赤黒い――血。

琳麗は込み上げてくる吐き気を、寸前で押さえ込む。

「……な、何これ……？」

目を灼やき尽くしそうな眩まばゆい光が納まり目を開けた途端、眼前に広がっていた惨状に言葉を失った。肩の上にいる珠珠も、同じように言葉を失っている。

「……これがあいつのやった事だよ」

蘇芳の無機質な声が、やけに耳に残った。

「事のはじまりは、藍雄の生まれ故郷・青東国せいとうこくからだった」

蘇芳の静かな声音が、閑散とした空間に響く。

「これは知っているだろうが、昔からこいつの国と俺の国——つまり南朱国なんしゅこくは、兄弟同然の付き合いをしてきた。家同士の繋がりも深くてな、こいつも生まれは青東国が誇る東家の直系・房一族そいだが、育ちはこの南朱国だ」

藍雄を指し示しながら話す蘇芳の言葉に、琳麗は驚いて思わず藍雄に見る。

「藍雄さんって、房一族の方だったんですね？」

「ああ。だが幼い時分から、こちらで暮らしている。あっちにも行ったりしているが、俺もここが故郷のようなものだ」

「そうなんですか」

話の一段落がついたところで、ごほんと咳払いが入った。

「なあいいか？ そろそろ話を戻すぞ」

「す、すみません……！ 蘇芳さん」

脱線しかける会話を、無理やり軌道修正させた蘇芳は、改めて居直る。

「で、話は戻すが、今から一か月半くらい前に、こいつの生家からある報告が入ってきた」

「ある報告、ですか？」

「『龍珠が何者かによって奪われた』ってな」

「えっ……!!？」

「……それ、どういう事？」

思わぬ言葉を聞き、琳麗は驚いて目を見開く。珠珠も同じようで、険しい顔つきで蘇芳の顔を見ている。

「どうもこうも、そのままの意味さ。でもな、その報告をされた時には、もう時既に遅しってやつで……青東国にある龍珠は全て奪われていた。誰にも気付かせることなく、な」

「誰にも気付かれることなく……?」

蘇芳のその言葉に、琳麗は若干の引っかけかりを覚える。ゆっくりとその意味を噛み砕き、思考を巡らす。

「でも、それ少しおかしく不是吗？ 確か龍珠がその土地から離れれば、そこには必ず異変が起けると聞いています……」

「ああ、その筈……だったんだけどな。何も起きなかったんだとよ。天変地異の兆<sup>きざし</sup>もなかったって聞いている」

「ねえ一つ聞いていいかしら」

「ん？ 何だよ？」

蘇芳が話の続きを促すように顎でしゃくると、珠珠は一つ頷いて

前に進み出<sup>い</sup>でる。

「何で今まで全く気が付かなかったのに、その時は気付いたの？」

「あーそれはだなー……………ありゃ、何だったけ…………？」

珠珠がぐくつと体勢を崩す。藍雄はどこか呆れたような視線を向けていた。

「あ、あんたね…………」

「諦めろ、珠珠。そいつは肝心なところがいつも抜けているんだ」

「おいおい。何だよ、その言い草は？」

蘇芳が眉根を寄せ、射抜くような目で藍雄を見遣る。その視線を受け、藍雄は疲れたように息を吐き出した。

「…………事実だろう。否定できるのか？」

「んぐつ…………！」

グサリと辛辣<sup>しんらつ</sup>な言葉で蘇芳に止めを刺し、藍雄は琳麗と珠珠に向き直る。

「その問いには俺が答えよう。」

普段は用事が無い限り、そこに立ち入ることが許されている者でも滅多に訪れるべきではないんだ。

だがちょうどその時、俺の一族の一人がそこを任せている者に用事があって『青春殿<sup>じょうしゅんでん</sup>』を訪れたんだそうだ。そこでこの事件が発覚された」

「どうしてそこを任されている人たちは、知らせて来なかったんですか？」

「……………それは」

「知らせたくてもできなかったんだよ」

言葉を詰まらせる藍雄に代わって、蘇芳が淡々とした口調で答える。しかし反してその顔は、どこか痛みを堪えるように顰められている。

「できなかったって……」

「死んじまったら、もう口なんて利けないだろう……?」

その言葉に、琳麗ははっと息を呑む。思わず藍雄を振り返り、そこに浮かんでいる苦悶の表情を目にする。

「嘘……」

どうしてかその事実を信じたくなくて、琳麗はそう口に出す。だが次の蘇芳の言葉に、それは見事に打ち砕かれた。

「嘘なわけないだろ。あいつが全員を殺ったんだよ。……まだ餓鬼だって居たってえのに……」

（なん……で?）

頭を鈍器で殴られたような錯覚を陥る。じんと耳鳴りがやけに煩い。

思い出すのは、あの青年の姿。

頭から血を被ったかのように全身血にまみれて、漆黒の瞳はどこか昏い色を宿していた。それは人を殺したことがある者特有の目で、それくらい自分でもすぐにわかる。でもそれを否定し目を逸らし続けたのは、紛れもない己自身だ。

琳麗はあえて見ないようにしていた横の惨状を見遣る。

（止めなきゃ、絶対。何が何でも）

何故目を逸らし続けてきたのかはわからない。でも一つだけわかることがある。

（あれ以上、あんな目をさせては駄目）

決意を宿した瞳で、琳麗は目の前の光景を見据えた。



——開幕ノ序曲（六）——（後書き）

ここまで読んで下さり、ありがとうございました。

次回の話で漸くヒーロー……というよりダークヒーローの名前が出せます。

ここまで来るのに、どれだけ時間が掛かってるんだよって感じですよ。

（汗）。

あと多分スポットも当てられると思います。良かったね、『謎の青年』よ。

こんな調子の亀更新ですが、お付き合い願えばと思います。

——開幕ノ序曲（七）——（前書き）

『謎の青年』視点です。

——開幕ノ序曲（七）——

静閑な森の中を、さあと風が吹き抜けていく。梢同士が絡まり合  
い、葉が微かな音を奏で合う。  
その中を、一つの人影が佇んでいた。

風に踊る漆黒の髪が艶やかに煌めき、その秀麗な横顔はただ一点  
を——空に浮かぶ月を見据えていた。何の感情も写さない漆黒の瞳  
は、まるで凧いだ湖面のようで、人間らしい彩に欠けている。

しかし、その瞳が一瞬、揺らぐ。

瞳の奥がゆらゆらと陽炎のように揺れ、その揺らぎを抑えるよう  
に青年は瞼を閉じた。そして次に開かれた時には、もう元の静けさ  
を宿した瞳がそこにあった。

青年はしばしの間、欠けた月を見上げ続ける。だが不意に、その  
瞳が冷たさを帯びた。目だけを動かし、背後の森に視線を遣る。右  
手に太刀を出現させ、いつでも応戦できるよう体勢を低くめた。

「慧雅様」

しかしその瞬間、鈴を転がしたような澄んだ声が、辺りに木霊し  
た。

青年——慧雅は現れ出た人物の姿を認めた途端、肩の力を抜いた。

「杏樹か。……わざわざ俺を探しに来るなと、前にも言ったと思う  
が？ それに、夜に郷の外に出るな」

慧雅がぞんざいに言い放つと、杏樹と呼ばれた女性はむっと唇を  
尖らせる。

「だったら急に姿を消さないで下さい！ 当主様が心配されていますよ！」

叫ぶように言う言葉の中に『当主』という単語を聞き取り、慧雅は思いつ切り顔を顰めた。だいたいの事情を察し、思わず溜息を洩らす。

「それでお前一人をここに来させたわけだな……。相変わらず手のかんだ事をする親父だ」

「違います。当主様に言われて来たわけじゃありません。私は自分の意思でここに来たんです」

「……あの親父に言われて来ようが、お前の意思で来ようが、俺はどっちだっていい。さっきも言ったと思うが、もう一度言うぞ。『わざわざ俺を探しに来るな』」

突き放すような慧雅の物言いに、杏樹は悲しげに顔を伏せる。

「貴方と少しでも長く居たい。……そんな私の願いすら否定なされるのですか？」

「……………」

慧雅はその言葉に軽く目を眇めた<sup>すが</sup>だけで、何も答えない。重苦しい沈黙が、二人の間に降り積もる。

杏樹は伏せがちになりそうな顔を必死に持ち上げ、慧雅の漆黒の瞳をじっと見詰める。それを慧雅は顔色一つ変えずに見返す。

しかしやがて、疲れたように慧雅は溜息をついた。

「……確かに、お前は俺の許嫁だ。しかし、だからといってそれに

縛られる必要はない」

「そんなんっ！ 私は縛られていっるわけじゃありません！！ 私は……貴方を本当にお慕いしたしているんです！！ どうして……っ、どうしてそんな事を仰るんですか！？ 貴方だって、私の気持ちを分かっただけでしよう……？」

今にも泣き出してしまいそうな声にすら、慧雅は眉を動かす事なく、感情のない瞳を向ける。

「杏樹、早く戻れ。俺はもう少しここにいる」

「……っ！ 慧雅様っ、待って下さい！！」

立ち去ろうとする慧雅の腕を、杏樹が必死に掴み取る。

「杏樹、はな——」

「放せ」という言葉は、半ばで遮られた。

唇に柔らかいものが押しつけられる。

杏樹は慧雅の首に腕を回し、乞うように深く口付けてくる。慧雅もそれに反射的に応こたえる。しかし、その心は酷く冷めていた。

(……違う)

激しいとも取れる口付けを杏樹と交わしながらも、慧雅は頭の片隅でそう感じていた。

しかし、何がどう違うのか説明できない。ただ一つはつきりとしていることは、『自分が欲して止まないものではない』——それだけだ。

だが、それが具体的に何を求めているのかは分からない。それでも自分の心は、ずっと……ずっと何かを探し求め続けている。

そんな事をつらつらと考えていると、不意にあの少女の姿が脳裏をよぎる。その瞬間、慧雅は杏樹の身体を引き剥がしていた。

「けい、が様……？」

「もう気が済んだだろう？ 早く帰れ」

呆然とする杏樹をその場に置き去りにし、慧雅は背を向けて歩き出す。それを半ば見送っていた杏樹は、はっとしたように声を上げる。

「ま、待って下さい！ 慧雅様っ！！」

杏樹が己を呼び止める声にも、慧雅は立ち止まることなく歩を進める。

しばらくすると、杏樹の咽び泣く声<sup>むせ</sup>が耳に届いた。

「どうしてっ……！ どうしていつも私を拒否なさるんですか！？ 私ほっ……私ほっ——」

（……拒否……か）

その言葉に、自嘲めいた笑みが唇の端に浮かぶ。

確かに、いつも自分は杏樹という女を拒んでいる。理由もなく、無意識に。だが杏樹はいずれ、将来的には己の妻となるだろう。こちらの意思など関係なく、絶対に。

（何故俺はこれ程に、拒絶しているのだろうか？）

杏樹は妻としては申し分ないと言うのに。

器量も良く、尚且つ自分の【あの体質】のことも知っている。次期一族を率いる者としては、早々に杏樹を迎えるべきなのだろう。それが己に課せられた義務なのだから。だが――

慧雅は空を仰いだ。あお天上で輝く月は、あの夜と同じように美しく、そしてどこか優しい。

あの夜以降、月を見る度に、あの少女の温もりを思い出す。どこか頼りなく、だがすが縋りたくなるような温かさ。

『とっとと放して下さい!!』

顔を青白くさせながらも、意思の強さを秘めた琥珀の瞳は、一瞬はつとする程に美しく、思わず見惚れた。そして、そこに宿る輝きをどこか懐かしくも感じていた。

『お前、名前は?』

『ししょうりんれい菖琳麗』……』

慧雅は無意識に口元を緩ませる。もう疾とうの昔に、笑い方を忘れてしまった彼が、あの時と同じ仄ほのかな笑みを浮かべていた。

「琳麗……か」

さわさわと木々の枝が揺れる。

その音に耳を傾けながら、慧雅は揺れ動く感情に瞳を閉じた。

（俺にはやるべき事がある。一族を守るため、そして一族に課せられた使命を果たすため――）

「迷っている暇ひまなど、ない」

漆黒の瞳から感情がすうと消え失せる。その無機質な瞳が、目の前に広がる闇を、ひたと見据えた。



――開幕ノ序曲（七）――（後書き）

ここまで読んで下さり、ありがとうございました。

今回は前回に予告した『謎の青年』の名前を出しました。彼はこんな性格です。ある意味でかなり歪んでいます。

琳麗、がんばれー！

ちょっと短かったかもしれませんが、更新速度を上げてみました。でもこれが精一杯です！ すみません……。

こんな亀更新ですけど、これからもお付き合い願えればと、思います！

お気に入り登録して下さった方、ありがとうございました！

では、これで失礼させていただきます。

——蠢ク『モノ』(二)——(前書き)

「蠢く」は「うごめ・く」と読んで下さい。

——蠢ク『モノ』（二）——

崖縁に一人の青年がいた。

その青年は所在無げに眼下の街を見詰め、一つ溜息をついた。

「さて、これからどっすかなあ……」

紺にも近い青の髪を風に靡かせながら、青年は独り言ちた。

三日前の夜——満月が天上で輝いていた日、主の命で目覚めて以来ずっと探し続けてきた【姫】の姿を、やっとのことで見つけ出した。だがその姿の前には、あの男の姿もあった。

「……はあ」

無意識に溜息が洩れる。

自分が一々報告せずとも、あの主にはもう既に知れていることだろう。何しろ、あの男と主との間には、切っても切れないものがあるのだから。

「俺、今まで何をやって来たんだろうなあ……」

主の命を受けてから、早三ヶ月以上は経つ。なのに中々見つけることができず、そしてやっと見つけた時にはもう——

思わず頭を抱えて蹲る。

「あーもう！ 意味ねえじゃんかあ！！ あの方より先に見つけなくちゃよお——！！」

主人に仕える身としては、これでは失格だ。受けた命をまともにこなすこともできない従者など、役に立たないどころの話ではない。確実に足手まといになる。

「ああ俺って……」

あまりの情けなさに頭を項垂うなだれていると、不意に背後で生き物の気配がした。反射的に武器を構えて、後ろを振り返る。

だがその姿を目にした途端、青年は目玉が飛び出るのではないかというくらいに、その目を見開いた。

「お、おまつ……！」

「久しいの、渾沌こんどん。相変わらず元気そうで何よりだ」

突如現れた人物は、未だ口をぱくぱくとさせている青年・渾沌に構うことなく、その隣へと腰を下ろした。その際、「どっこいせ」というやけに爺くさい言葉を吐く。

「な、な、何でお前がここにいんだよ？ 饕餮とうてつ」

「我が君の命令だ。お主が中々帰って来んから、迎えに行けとな」

“我が君”という単語にわかりやすいぐらいの反応を示した渾沌を横目で見つつ、饕餮とうてつと呼ばれた男は徐おもむろに息を吐き出した。

「そんなにびくびくせんともいだろうが？ 我が君は寛容なお方だ。お主の一度や二度の失敗など目を瞑つぶって下さるに決まっている」

「……お前は他人事だから、そう言えるんだよ」

「まあ実際問題、他人事だからな」

「……っお前なあ……！」

「少しは落ち着け、馬鹿者」

興奮し出す渾沌の頭上に、饕餮とうてつは拳を一発お見舞いしてやる。  
ごんつと容赦ない音が、辺りを震わせた。

「いつまでも失敗を引きずるではない！ 前を向け！ 前を！！」

悶絶壁地もんぜつびやくじ——まさしくその言葉の通り転げ回る渾沌。

しかし意気揚々と言い切る饕餮とうてつの目に、その姿は入っていない。  
その目は夜空に輝く月を写し出していた。

渾沌は涙目になりながらも何とか持ち直し、キツと饕餮とうてつを睨みつける。

「てめえ……！ 俺を殺す気か！？」

「そんなわけなからう。お主を落ち着かせるためだ」

「どこがだー！？」

ぜいぜいと息を吐きながら叫ぶ渾沌をしばし見詰め、饕餮とうてつは首を傾げた。

「むう？ おかしいの。先程より興奮してるような気がするの。

どれ、もう一ぱ——」

「いらね！ もういらねえよ！！ 俺はもう十分落ち着いてる！」

じりじりと近付いて来る饕餮とうてつから逃げながら、渾沌はこの短い時間の中でかなり自分が疲れていっているような気がした。

（ああ……。こいつはこんな奴だった……）

錆びついて朧おぼろげだった記憶が、徐々に色付いてくる。その中でこんなやり取りは、何度も何度も繰り返しやってきた。

（昔の俺って、結構苦勞してたんだな……）

我ながらに自分を誉めてやりたかった。こんなどこか吹っ飛んで  
いるような奴の親友をやっていたことに。

「まあ、そんな事よりも」

「はあ！？ 何だよ！！ そんな事って！？」

条件反射で突っ込みを入れてしまう。

急な話の転換はいつものことだったが、こんな理不尽な転換は珍  
し……くはないか……。

肩を落としている渾沌を尻目に、饕餮は崖縁に近寄り、眼下の景  
色を見下ろす。

「あやつらもここにいるのだな」

先程まで浮かべていた表情全てを消し去り、饕餮は氷刃を宿した  
瞳である一点を見据えた。

視線の先にあるのは、張州の州都・芒種にある城。

「……これも因縁というやつか」

平坦な声音で紡がれる言葉たち。だがその目に宿るは——憎悪。

「因縁、ねえ……」

饕餮のその言葉に、渾沌は皮肉げに嗤った。  
つかつかと饕餮の側まで近付き、同じように眼下の景色を見下ろ

す。

「確かに因縁と言えばそうなんだろうな。あの野郎には何回殺しても殺し足りねえ程の、恨みがある。因果応報ってやつだ。……楽には殺してやらねえ。戮<sup>なぶ</sup>り殺しにしてやるさ」

先程までの明るい口調が嘘のように消え、冷え冷えとした昏い<sup>くら</sup>声音が闇を這う。

「……早まるなよ、渾沌。まだ……早い」

渾沌の豹変したその態度に饕餮<sup>とうてつ</sup>は一抹の不安を覚え、釘を刺す言葉を放つ。

「………そんなくらい言われなくても、わかってる。まだ時期じゃねえ。だが」

渾沌の瞳が禍々しく光る。

「いつか絶対に、あの時の借りは返してやる。たとえお前が覚えていなくてもな、――」

哄笑<sup>こうしょう</sup>が低く、辺りに鳴り渡った。

——蠢ク『モノ』（二）——（後書き）

ここまで読んで下さり、ありがとうございます。

今回の話は……敵さんサイドです。

この二人、のんびりしているように見えますが……どう見えますか？  
どう見えるか、ちょっとおっかなびっくりです（汗）。

この人達、奥が深いんです。

でも私の文才の無さの所為で、多分いえ絶対に表現できてないような気がするんです。

……才能が欲しいこの頃です。

今回は、意外と早めに更新できました。次はいつになるだろう……？  
私生活の方でだんだんと忙しくなってきました（汗）。

レポートに、試験に……試験に。

私の人生に掛かってくる大事な試験なので、頑張らなくてはいいけないんです。

今月は一回更新できれば、多分いい方です。

もし、この話を楽しみにしている方々（……いないかもしれません）が、すみません……！

文章表現が向上するよう、もっと努力をするので、どうか見捨てないで下さい……！

それではここまで読んで下さった方々、どうもありがとうございます。  
しました。

これで失礼させてもらいます。

【追記】お気に入り登録をして下さった方々、本当にありがとうございます！  
ございました！ 凄く励みになります……！



——蠢ク『モノ』(二)——(前書き)

【追記】お気に入り登録を下さった方々……本当にありがとうございます！  
ございました！！

——蠢ク『モノ』(二)——

空から絶え間なく降り注ぐ雪が、地面を濡らした。陽射しは厚い雲によって遮られ、地上に届くことはない。

それに少し肌寒さを感じ、琳麗りんれいは僅わずかに身じろいた。

「寒いのか？ 琳麗」

その動きにつかさず反応を示し問うてきた珠珠しゅしゅに、琳麗は苦笑を向け首を横に振った。

「ううん、平気だよ。たっくもう、何まだ心配そうな顔してんの。大丈夫だって言ってるじゃん。もう慣れてるんだしさ」

それでも尚、心配そうな顔を向けてくる珠珠に、琳麗はそっと息をついた。別に珠珠に対してではない。自分に対してにだ。

「……ねえ珠珠」

「ん？」

再び仰ぎ見た空は、ここ何日か見てきたものと同じどんよりとした暗さに満ちている。何度見てもそれは変わらず、重く垂れ籠めた空はまるでそのまま己の心模様を写しているかのようで、正直嫌になる。

「雨なんて……大嫌いだよ」

「……琳麗」

珠珠の柔らかい毛並みをそっと撫で、琳麗は堅く目を閉じる。

何度見ても思い出せない【夢】。でも見る度に心に刻まれていく後悔と深い悲しみ……そして絶望感。それらがどんどん自分の心<sup>なか</sup>に降り積もっていけば……琳麗<sup>じぶん</sup>は一体どうなるであろうか？ いつもその恐怖心と戦っている。己が己であるために――。

「本当……大嫌い」

「なあにが嫌いなんだ？」

「ぎゃあっ！！」

突然背後からかけられた声に、思わず声を上げてしまう。慌てて後ろを振り返れば、雨具を着た蘇芳が栗毛の馬と共にそこに立っていた。

「お、お、おはようございますっ！ 蘇芳<sup>すおう</sup>さん！！」

「おう、おはようさん。……で、何が嫌いだった？」

「えーと、あの……」

にっこりと笑って問う顔が意地悪げに歪んでいるのを見て、琳麗はひくつとなった。自然および腰になり、蘇芳から後ずさる。それを見た蘇芳は更にその笑みを深めた。

「おーい。何も逃げる必要はないだろ」

「す、す、蘇芳さん。何か怖いです……」

「気のせいだろ」

「……うわぁ、性格悪……」

「あゝ？ 何か言ったか？ 珠珠」

ぼそりと洩らした珠珠の一言に、蘇芳の目は半眼になる。じつと睨まれても、珠珠は素知らぬ顔で嘯<sup>うそぶ</sup>いた。

「さあ？ 私は何も言っていないわよ。それこそ、あんたの気のせいじゃない。もうやねえ、自意識過剰な奴って」

「……誰が自意識過剰だって？」

「誰って……あんたしかいないでしょ？ 馬鹿蘇芳」

「……なあ琳麗。そいつちょつと貸してくれないか？」

「えっ……あの、その……」

二人？ の間を青い火花が飛び交っていた。バチバチと、それはもう激しく。周りのものに発火しそうな勢いで。その光景に、琳麗は即座に回れ右をしたい気分になった。でも珠珠が肩の上に乗っかっているので、それもできない。

「ふ、二人とも止めましょうよ？ ね？」

「うるさいわね！ 外野は引っ込んでなさい！」

「琳麗、そいつを早く寄越せっ！ ぎったんぎったんにしてやる！  
！」

（もう嫌だーこの二人いい！！ 何なのおー！？）

顔合わす度に喧嘩するのは止めて欲しい。というか何でこんなにいがみ合うのか意味不明。相性が悪いとかそういう以前の問題な気がする。

（……もしかして最初の出会いが原因？）

前に紅華こうかから聞いた話だと、この二人の出会い方は最悪だったらしい。どういう風だったのか、自分は寝ていて詳細は分からないけれども、何でも出会い頭に珠珠の蹴り（正確には尻尾だったみたいだが）を食らい、半刻程蘇芳は気絶してしまっただけ。そしてその後の話し合いで、ますます関係が悪化していったとこのこ

とだった。

（というか、どのくらいの力で蹴ったわけ……珠珠）

琳麗は恐る恐るといった風情で、真横の珠珠に視線を写す。その瞬間、琳麗はひっと顔を引き攣らせた。めらめらと藍色の瞳を燃え滾らせ蘇芳を睨んでいる様は、何というか……怖い。

（これ本気だ……やばい）

冷や汗が流れた。

珠珠は形は小さいが、歴とした霊獣だ。しかも自分と同じ土属性の。野山などにいる精霊とはわけが違う。普段は忘れがちになるが、そうあくまで“霊獣”なのだ。精霊から進化した上位の存在。そんなじよそこらの妖魔相手では話にならない。それくらい力が強い。

「ちょっと珠珠……」

「いいから琳麗は黙ってって。もういい加減我慢できないわ。大丈夫……すぐ終わらせるから」

口元に凄絶な笑みが浮かんでいる。妖魔を相手にしている時と同じ笑みだ。それを見た琳麗の体感気温が一気に下がる。

ヒッヒーンと馬が嘶いた。命の危険を感じたのか、ここから離れようと懸命に暴れ出す。

（やばい！ これ本気でやばい！！ 蘇芳さん早く逃げ——）

思いの丈を込め前を向いた瞬間、琳麗の思考は一時停止した。

ざあざあと雨の降り続ける音がやけに大きく感じる。

馬が蘇芳の手から逃げる。ぱっかぱっかと蹄つめの音が遠くで反響した。

（……私も逃げたいな……）

切実にそう思った。

この状況、もう自分じゃどうすることもできない気がする。恐らく、血を見るまでは止まらない。

ぴりぴりとした空気が辺りに満ちる。

（もう嫌だ！ 何で朝から、こんな目に遭わないといけないのさ！）

誰かこの人たちを止めて——そう願った刹那、

「こらあ！ 蘇芳っ！！ 朝っぱらから殺気振りまいてんじゃない！！」

「あ、姉貴っ……！？」

「紅華……」

まさしく鶴の一声とはこの事だろう。先程までの空気が、まるで嘘のように霧散した。

琳麗はほっとし、胸を撫で下ろした。

（さすがです、紅華さん……）

「たっく……蘇芳、それに珠珠ちゃんも！！ 一体何してるの！？ ここにはたくさん怪我人がいるのよ！？ 彼らの傷に障さわったらどうすの！？ もうちょっと考えて行動なさい！！」

「……ごめんなさい……」

「……姉貴の大声の方がよっぽど障ると思うけどな……」

「あゝ？ 何か言った？ 蘇芳」

「い、いえ……何も言ってもせん……」

「ふうーん？ ならいいけど？」

紅華はにつこりと微笑みながら腰に手を当て、蘇芳を見る。しかし何故だろう？ 紅華の方が背が低いはずなのに、蘇芳の方が小さく見えた。

「あっそうだ！ 琳麗ちゃん、はいこれ雨具。確か前に雨具を駄目にしちゃったって言ってたから持ってきたのだけれど、大きさはちようどいいかしらね？」

そう言って手渡されたのは、少し色の褪<sup>あ</sup>せた紺色の雨具。ちよつと草臥<sup>くたび</sup>れてはいるが、生地もしっかりとしているし、まだまだ使える物だ。

「これ……いいんですか？」

「ええ。それ私が昔使っていたやつなのだけれど、よかつたら貰<sup>もら</sup>ってくれる？」

「あ、ありがとうございます……。大事に使わせてもらいますね」

はにかむように微笑む琳麗を、紅華はまるで妹を見るような眼差しで見る。

そのほのぼのとした光景を何となしに見ていた蘇芳が、急に思い立ったかのように大声を上げた。

「やべっ！！ 汐<sup>せき</sup>が逃げたー！！」

「おい、その鈍くさい奴」

「ああ？ 誰が鈍くさ——汐っ！！」

ばしゃばしゃと音を立てながら、蘇芳は一目散に栗毛の馬のもとに駆け寄る。

「ごめんな、汐。怖かったよな？ ……藍雄<sup>らんゆう</sup>、どうもな」

「別に。汐、お前の主人はどうしようもないな」

溜息混じりに言う藍雄の言葉に答えるように、汐という馬はブルと鼻息を立てた。

「……………」

「ほら、汐もこう言っている。紅華さん、潮<sup>ちよう</sup>を連れてきました」

「ありがとう、藍雄。本当、あんたが私の弟だったらよかったのに。こんなできの悪い弟なんていららないわ」

「……………」

「……蘇芳さん、元気出して下さい」

肩を落として、見るからに意気消沈している蘇芳が居た堪<sup>たま</sup>れなくなり、琳麗はそつと言葉をかける。だが蘇芳は力なく笑い返すだけだった。

「蘇芳さん……………」

「琳麗、こんな奴放っておきましょ？」

「もう！ 珠珠、蘇芳さんを煽<sup>あお</sup>るようなことを言わないで！ ……

本当すみません、蘇芳さん」

「……………いや、気にしてないからいいよ……………」

「……蘇芳さん？」

翡翠色の瞳はどこか遠くを見ており、声にもあまり覇気が感じられなかった。はあと重い溜息をつき、汐を連れてとたとたと紅華た



ちがいる所まで歩いていってしまおう。

「……蘇芳さん、どうしたんだろう？ 何かさっきより元気がなくなってる……」

「まあ止めを刺しちゃったからね。……はじめてあいつが不憫に見えたわ」

「え？」

「別に、何でもないわ。ほら、さっさとそれ着れば？」

「えっ……あっ、うん」

珠珠に言われ、渡された雨具を着る。着てみると、それは自分にぴったりだった。

（うん、大丈夫。動きにくくない）

腕を上げたり、身体を捻<sup>ひね</sup>ってみたりしながら、着心地のよさを確かめる。それから意を決して、屋根のある場所から出る。

ぽつりぽつりと雨粒が顔に当たった。

「……っ」

瞬間、頭に何かがよぎる。

琳麗はずきずきと痛み出した頭を押さえた。

「うっ……」

「琳麗っ！！」

「大丈夫。いつもの偏頭痛だから……」

ほぼ無意識に片手で頭を押さえながら、琳麗は痛みを堪えるように唇を噛みしめる。覚悟はしていても痛いものはやはり痛い。

（ああ本当、雨の日って碌ろくなことがないなあ……）

「琳麗……」

「平気だよ。もう治まったから……」

「……………」

無言でこちらを見詰めてくる藍色の瞳に笑ってみせてから、琳麗は前を向く。

「本当もう、珠珠は心配しすぎだって。……ほら行くよ」

頭痛を振り切るように、琳麗は蘇芳たちのもとへと駆けていった。



「でもよ、こんな雨の中を本当に行くのかぁ？」

琳麗が彼らのもとに辿り着くと、蘇芳がそんなことを言っていた。

「うわぁ復活早……」

「珠珠……」

「だってそうでしょ？」

「……………」

それを見た珠珠は感心半分呆れ半分といった感じで感想を述べる。琳麗は声を潜めて諫めるように言うが、的を得た答えに言葉を窮した。

しかしそんな一人と一匹を尻目に話はどんどん進んでいく。

「当たり前のことをめかすな。今日出立しなければ、祝融祭までには間に合わないんだぞ」

「そうは言ってもよ。こんな雨の中じゃ視界が利きにくいだろう？」

妖魔とか夜盗どもに遭っても、すぐに反応できるかどうか……」

「確かにその危惧はあるが……しかしだからと言って、もうこれ以上は待てんだろう？」

「……まあな」

二人同時にはあと重い溜息をつく。叩きつけるような雨が、より一層の重さを醸し出した。

そんな二人の煮え切らない態度に、恐らく嫌気が差したのだろう。紅華がいらついたように言葉を言い放つ。

「もう……男ならしゃんとなさい！ 確かにこんなに連日降り続けているんじゃないわ、土もかなり泥濘ぬかるんでいるだろうし、足場も相当悪いに違いないわ。でも今日行かなきゃ間に合わないの！ 当日の日に着いたって何の意味もないのよ！ いい加減肝を据えなさい！！」

「……すみません、紅華さん……」

「別に。姉貴に言われなくなたって、それくらいわかってるってーの……」

そう、時間は五日前に遡る。

彼らが正体不明の青年――慧雅と遭遇してから、既に五日程経過してしまっている。だがその期間中、彼らは何もしていなかったわけではなく、むしろ精力的に働いていた。その内容は実に様々で、怪我人の治療の手配をしたり、被害の報告を上にしたりと三人で忙しく駆け回っていた。

要するに、その忙しい最中の中、琳麗や珠珠に時間を割いてくれていたわけである。

「わかってるんなら、つべこべ言うんじゃない！ こっちの気が滅入るでしょうが！！ さっきも言ったでしょ？ 時間がないの！ 本当は二日前には丁杏城を出なくちゃいけなかったのに、二日も雨に足止めされたのよ！ ここで悠長にしている暇はないの！！」

紅華はぴしゃりとそう言い放つやいなや、ひらりと栗毛の馬・潮に飛び乗る。それを追うかのように、雨具の裾が僅かに翻った。

「ほら！ さっさと行くわよ！！」

「あーもう、そんなに急かすなよ……。あつ、そうだ琳麗！！」

「へ……？ あっ！ はいっ！！」

急に話を振られ、今までぼけっと彼らの会話を聞いていた琳麗は飛び上がった。

「なーんで俺が話しかける度に変な声を出すかな……。まあいいや。お前、確か馬に乗れないんだったよな？ 誰と一緒に乗る？」

蘇芳も身軽に汐に騎乗しながら、琳麗にそう問いかける。

「姉貴はなしな。姉貴の馬は暴れ馬でさ、姉貴以外を乗せたがらな

いんだ……。だから俺か藍雄のどっちかだ」

「どっちかと言われても……」

「藍雄に乗せてもらいなさい」

どっちにするべきか悩んでいると、紅華が助け舟を出してきた。しかし姉の言葉に不満だったのか、蘇芳が僅かに目を<sup>すが</sup>眇めて紅華に視線を送る。

「何で藍雄なんだよ？」

「藍雄の方が気が利くし、それに……ね、藍雄？」

「……どうして俺に話を振るんですか？」

いつの間にか、黒毛の馬に乗っていた藍雄は、懽然とした表情で紅華を見返す。

「んー別に？ 理由なんてないわよ」

「……」

沈黙したまま、藍雄はじっと紅華を見る。その瞳は困惑しているかのようであり、どこか怒っているかのようでもあった。

紅華はその反応を面白そうに見遣り、次いでにっこりと琳麗に笑みを向ける。

「というわけで琳麗ちゃん、藍雄に乗せてもらいなさい」

「というわけで……何だよ？ それ！！」

「あーもう面倒臭いわね。あんたと珠珠ちゃんの相性が悪いからよ！ 理解できた？」

「……何か投げやりじゃね？」

「気のせい、気のせい」

「……あっそう」

半眼を向けてくる弟の視線を軽く流し、紅華は手綱を引いた。

「ほら、琳麗ちゃん。早く乗って!」

「え……あ、はい。じゃあ藍雄さん、よろしくお願いします」

「……わかった」

藍雄は濡れた前髪を面倒臭そうに払い、しっかりと雨具をかぶる。そして琳麗にひとつ手を差し伸べてきた。

「琳麗、手を寄越せ」

「あっ、はい——うわっ……!?!」

藍雄の手に自分の手を重ねた途端、ぐいっと上の方に引っ張り上げられ、そしていつの間にか藍雄の前に座らせられていた。

「しっかりと髻たてがみに掴つかまってろ」

「は、はいっ!」

「じゃ、用意もできたし……行きますか!」

紅華のその言葉を合図に、三頭の馬達は一斉に走り出した。

琳麗は必死に髻にしがみ付きながらも、しっかりと前を見据えた。

（この先にきつと……）

琳麗が名前も知らないあの青年の名を知るのは、もう少し先のこと。



——蠢ク『モノ』(二)——(後書き)

ここまで読んで下さり、ありがとうございました！

そして予告していた時間に更新できなくて、すみませんでした……！  
恐らく、今月はこれが最後の更新になります。

待って下さる人は……いないかもしれませんが、もしありましたら  
謹んでお詫び申し上げます。

それでは亀更新な話ですが、今後ともよろしくお願いします。



——蠢ク『モノ』（三）——

人が訪れない深い森の奥に、ひっそりと湛<sup>たた</sup>えた泉があつた。滔<sup>とう</sup>々と湧き上がる水は、静かに川へと流れていき、やがて森に棲<sup>す</sup>む全てに生物たちに力と恵みを与えた。

そこに、二つの人影が姿を現す。

淡く光を放つ泉を、その人影らは無表情で眺め、そのうちの一人が、徐に右手を泉に向けた。

「さあ、起きてもらうぞ。この地の守り神よ」

その宣言とともに、右手から焰<sup>ほのお</sup>が放たれる。それは一瞬にして泉の水を蒸発させ、しかしそれだけに止まらず、周りにある草木も全て燃やし尽くした。

「……早く出てこんど、この森全てを燃やし尽くしぞ？」

轟<sup>ごう</sup>々と燃え盛る様を見詰める双眸<sup>そうぼう</sup>は、その焰<sup>ほのお</sup>と同様に冷え切っている。

更に焰<sup>ほのお</sup>の勢いが増した。

それは空間さえも捻<sup>ね</sup>じ曲げようとする程の、業火。

〈……誰だ。我の眠りを妨げる者は〉

その時、厳<sup>おごそ</sup>かな声がその場に響いた。続いて眩いばかりの光が、泉の中心から放たれた。その光を一瞬眩しそうに見や遣ったが、すぐにその人影——饕餮<sup>とうてつ</sup>は口元を歪めた。

「ようやつと出てきよったか……主の力を利用させてもらうぞ」  
「その妖気……貴様らただの妖魔ではないな？」

光が治まり、その居たのは一匹の逞しい鳥。雄々しい体軀に、そこから伸びた脚には鋭い鉤爪。そして翼はしなやかで美しく、何より力強さを感じさせる。

それは朱い燐光を放ちながら、己の眠りを妨げた不届き者を見下ろす。しかし、饕餮は面白そうに目を細めて、それを見返しているだけである。

「ほう……さすがは聖獣といったところか。儂らの正体を一瞥で見抜くとはもう」

「……私の力を利用するとは、どういう意味だ？」

「そのままの意味だが？ まあもつとも、お主には知る必要のないことだがの。さて――」

一瞬、言葉を止め、饕餮は右手をぐっと握り締めた。

「儂らの麾下に下ってもらおうとするかの」

「……！？ つぐあああああああつ！！」

森の守り神の周りを焰が纏いつく。それは舐めつくすように広がり、守り神を一瞬にして囲む。

「うぐっ！ うぐあああああああつ！！」

「……そうだ。もつと苦しむがよい」

苦しみ悶える守り神を、饕餮は歪んだ笑みを浮かべながら、実に楽しそうに見遣る。

やがて焰が治まり、黒く焼け焦げた守り神はそのまま下へと落下

した。

「ふむ。これで完了だの」

「……お前、相変わらずえげつないよなあ」

「……何だ、渾沌こんどん。その言い様は？」

それまで事の成り行きを静観していた渾沌は、呆れともつかない溜息を洩らした。そして黒く焼け焦げた守り神に視線を送る。

「そんなことよりも、早くそいつに命令を下せば？　もう堕ちたんだろ？」

「ああ、そうだの。……おい、起きろ」

饕餮とうてつは低く呟いた。すると、死んだように倒れ伏していた守り神が、むくりと起き上がり、やがて何事もなかったかのように飛翔した。しかし、その姿は先程とは打って変わっていた。秘めた輝きを放っていた瞳は濁り、神々しい光を放っていた翼はまるで爛ただれてしまったかのように、酷く醜い。

「お主に命ずる。この森一帯を穢けがせ」

〈御意……〉

妖魔へと変貌した守り神は、今まで己が守ってきた森を、何の抵抗もなく闇に染めた。

その様子を見ていた饕餮とうてつは、唐突に笑い出す。

「くははっ！　気分がいいものだな。あやつの配下だと思うと余計に！」

「……で、何でこんな面倒臭えことをやってんだ？」

「……渾沌よ、お主はもうちつと楽しむことを覚えた方がよいぞ？」

「余計な世話だ！ 俺は効率よくやるのが性に合うんだよ！」

「のわりには、随分【姫】を探すのに手間取ったのう？」

「ぐっ……！」

それを言われるとさすがに痛い渾沌は、悔しげに目を逸らし、ちつと舌打ちをする。混沌のその仕草を見た饕餮は少しばかりからかいすぎたかと思い、ぽんと渾沌の頭上に手を乗せる。

「まあ、そう拗ねるな。……余興があつた方が楽しいだろ？」

「……余興？」

「そう、余興だ。あやつらと“遊んで”みるのもいいだろう？」

“遊ぶ”という単語に、渾沌は一瞬目を輝かせる。しかし何か思い当たったのか、すぐに難しげな顔つきになった。

「でも【お姫】のことはどうすんだ？ それが本来の目的だろ？」

「無論、【姫】のことは忘れてはいない。我が君の命令だ。丁重に招待する。……こやつを使つてな」

そう言って、饕餮は宙を旋回している元守り神に視線をくれる。唇の端を上げ、これから起こることに思いを馳せる。

「少しは楽しませてもらうとしよう。のう我が宿敵よ……」

命溢れる場所から死が蔓延る場所へと変わった森に、ぽつんぽつんと雨が降り始める。次第に更けこんでくる空に、饕餮は目を細めた。



生温かい風が、雨や汗で濡れた頬を撫でていく。その何とも言えない感触に、琳麗<sup>りんれい</sup>は知らぬうちに眉を顰<sup>ひそ</sup>めた。

(……眩暈<sup>めまい</sup>が……する……)

頭痛の所為でぼんやりと霞<sup>かす</sup>む頭は、もはや思考する能力を失い、同時に体力も根こそぎ奪っていった。

琳麗はふらつきそうになる身体をなけなしの気力だけで支え続け、鉛<sup>なまり</sup>のように重い脚を懸命に動かす。しかし雨はそれを嘲笑<sup>あざわら</sup>うかのよう<sup>なまり</sup>に、ますますその勢いを強めた。

(倒……れちゃ……駄目……)

雨脚が増すにしたがい、頭痛もいつそう酷くなる。琳麗はその痛み<sup>すわう</sup>に耐えながら、何とか列の最後尾に付いていく。だが、それでも蘇芳<sup>すわう</sup>たちとの距離は自然と開いていく。

(やば、い……このまま、じゃ……)

次第に離れていくそれに、琳麗は焦りを覚えはじめた。

時刻<sup>とき</sup>は既に、昼過ぎの半ば。

琳麗たちが朝早くに芒種城を出て、馬を走らせ続けることもう半日が経過していた。

そして今、彼らは鬱蒼と生い茂った森の中にいる。

空が見えなくなる程に敷き詰められた枝葉は、雨の所為で届きにくい陽の光を、更に遮った。

えもいわれぬ暗さが、森一帯を支配する。

そんな中を、馬で進むことはかなりの危険を孕むため、琳麗たちは地道に脚を使い、道なき道を突き進んでいた。

「……琳麗」

「……な、に？ 珠珠」

小声で名前を呼ばれた琳麗は、一拍の間を置いて返事をする。すると珠珠が懐からひょっこりと顔を覗かせ、大きな丸い目を向けてくる。その藍色の瞳は、どこか案じるように僅かに揺れていた。

「もう無理しないでよ。……限界でしょう？」

「大丈夫、夫だよ。ほら、濡れちゃう……から、ちゃんと中、に入っ  
てな、よ……」

琳麗がそう言うと、途端に珠珠の顔が不機嫌そうに顰められる。

「何が大丈夫よ？ 息も荒い。顔色も悪い。……これのどこが大丈夫だって言うの？」

「だっ、て……迷惑、かける、わけには、いかないし。まだ、大丈夫、  
夫……」

「……琳麗、痩せ我慢も程々にしないと、いい加減怒るわよ？ それにね、途中で倒れられる方がよっぽど迷惑よ」

「……」

琳麗は無言の答えを返した。ついと目を細め、前方を歩いている蘇芳たちを見る。

確かに、珠珠の言い分はもつともだ。彼らに、自分の体調のことを伝えた方がよいのだろう。だが、どうしても言い出せない。……いや、言いたくはないのだ。後々に迷惑をかけてしまおうとわかっていても、なるべく彼らにはこの頭痛のことを……【あの夢】のことを知られたくはない。

「……琳麗」

珠珠の陰しい声音が、自分を諫めるように放たれる。

琳麗は荒くなりかける息を整え、脂汗で滲む額を片手で拭った。そして、少しぎこちなさが残る笑みを珠珠に向けた。

「珠、珠……大丈夫、夫だ……から。本当、に……やばく、なったら、言う……から。それ、まで、黙っ、てっ。……お願い」

「琳麗……」

「お願い……！」

「………わかったわよ。全く……」

「ありが、とう」

渋々ながら頷いてくれた珠珠に、琳麗は安堵の笑みを浮かべた。しかしその直後、ふっと目の前が真っ暗になる。

（あれ……）

全身から一気に力が抜けていく。脚ががくつとなり、泥濘<sup>ぬかる</sup>んだ地面へと前のめりに倒れていく。

「——琳麗っ!!」

遠くで珠珠の呼ぶ声が聞こえる。そして顔が地面に触れる寸前、誰かがそつと身体を支えてくれたような気がした。それを最後に、琳麗の意識はぷつんと途切れた。



——蠢ク『モノ』(三)——(後書き)

ここまで読んで下さり、ありがとうございます。

随分久しぶりな更新な気がします。

待っていて下さった方がいましたら、誠に申し訳ございませんでした！

今回の話を打っていて、一つ思ったことがあります。

主人公……意識を失いすぎなような……。

な、何ででしょう？ 主人公、別に病弱でも何でもないんですけど……(汗)。

……………どうか気にしないで、スルーして下さい……。

では、この辺りで失礼いたします。

——蠢ク『モノ』（四）——

細かな雨粒が、莊嚴な雰囲気を漂わせる都に、静かに降りしきる。その中心には暗い空の下でも、煌びやかさを失わない城があった。それを民家の屋根から、黙然と見据える青年がいた。

鋭い眼差しは城のある一点に注がれ、一本に結いあげた漆黒の髪は雨の中にいるのにもかかわらず、全く濡れていない。それは身に付けている衣服も同様で、どうやら雨粒が触れる直前に風で弾いているようだった。

しばし無言で城を見詰めていた青年——慧雅は、煙のような雨中、その漆黒の瞳を僅かに細めた。

「……今回はやりづらい……か」

ぼそりと呟かれたその声は底冷えがする程に冷たく、また表情もそれと相俟って、まるで削げ落ちてしまったかのように、そこになり。ただ漆黒の瞳だけが、前方を鋭く貫いていた。

「あの時、あいつらを殺しておけばよかったな……」

そう、あの時——蘇芳と藍雄にはじめて相見えた時、それまで自分が行ってきたことと同様、あの二人を殺しておけば、今、悔恨の念に襲われる必要はなかったはずだ。だがその時の自分は、何故か二人を殺さなかった。

理由など定かではない。むしろ自分が問いたいぐらいだ。あの時までは、たとえ女子供であろうと、自分の姿を見た者は例外問わずに殺してきた。それが男二人だけであったならば、尚更躊躇わず手を下せたであろう。しかし自分は殺さなかった。あの時の自分の行

動をいくら思い返しても、何故そうなったのか、よくわからないのだ。

「……………今言っても詮無いことか」

慧雅は疲れたように、ふっと息を吐き出した。

今更自分の奇行を後悔しても仕方がない。それに今現在、最優先で考えるべきことは、そんなことではなかった。

「さて——どうするか？」

慧雅は再び城の……正確には湖とそこにある社の様子を探るため、知覚を飛ばそうと神経を研ぎ澄ませた——まさにその時だった。

《タスケテ——》

微かな声とともに、凄まじい衝撃が彼の身体を貫いた。

慧雅は反射的に後ろを振り返る。

（今は——？）

自分を襲った衝撃。これは——、

「龍脈が乱れたのか……？」

滅多に乱れることなどない龍脈が、何故？ 一瞬、疑問が浮かぶ。だが慧雅はすぐにその原因に思い当った。信じられないものを見てしまったかのように、その目を見開く。

「まさか……龍脈を守護する者が穢れた、のか……？」

先程の声の主は、おそらくそれに間違いないだろう。守り神が穢れた理由はわからないが、一族を継ぐ者として、龍脈の乱れをこのまま放置しておくわけにもいかない。今後に支障を来す恐れがあるなら余計に、だ。

「この方角は……森か」

徐々に穢れが増してくる気配を頼りに、慧雅は方角を定める。そして次の瞬間、慧雅はふっと煙に紛れるかのように、その場から姿を消していた。

ざあざあと雨音が響く。

降り続ける雨粒は、慧雅のいた場所を瞬く間に濡らした。



ぴちゃん、ぴちゃんと水が落ちる音が、遠くの方で反響し合っている。その音に、琳麗りんれいは重い瞼をうつすらと持ち上げた。

(……ここ、は?)

視界に真っ先に飛び込んできたものは、低い天井とそれがごつつつしているということ。次いでわかったことは、周りが暗がりであるということ。

(ここって……洞窟の中?)

起きぬけの頭では、はっきりとしたことはわからない。だが肌にあたるひんやりした石の感触から、どうやら自分が横に寝かされているということはある。

(……そういえば珠珠ししゅしゅは?)

いつも傍にいる、あの小さな姿が見当たらなかった。いくら視線を巡らせても、近くにはいない。そして、最近一緒に行動をしはじめた蘇芳たちの姿も、ここにはなかった。そのことが琳麗の不安を煽あおる。

「み……んな、どこ……?」

口から洩れた声は、ひどく掠かすれていた。

琳麗はいまだ気だるさの残る身体を何とか起こす。一瞬ふらっとなったが、それを頭を振って誤魔化し、琳麗は辺りをぐるりと見回す。

「やっぱり、ここ洞窟だ……」

自分のいる場所は他の所よりも少し開けた場所にあるらしい。奥の方まで続いているのかは定かではないが、声の反響する具合からみて、結構大きな所であることはわかる。

琳麗はゆっくりと脚を立たせた。

「とりあえず外に出てみようかな。みんながいるかもしれないし……」

光が射し込む方へと琳麗は足を向けた。しかし、琳麗は一、二歩足を進めたところで、ぴたりとそれを止めた。目を見開き、洞窟の入り口を凝視する。

（これ……珠珠の結界じゃ？ しかもこの感じて——）

自分が進もうとした先から慣れしたんだ気配を感じ取った。しかし、それも普段とはだいぶ異なっていた。珠珠はいつも使う結界ではなく、疲れるからと滅多なことでは使わない類いたぐいのものを使っていたのだ。

琳麗の背中を氷塊が滑り落ちていく。無意識に琳麗は入り口に向かって走り出した。

——自分が寝ている間に何かが起こったのだ！

「珠珠っ！ 紅華こうかさんっ！ 蘇芳さんっ！ 藍雄らんゆうさんっ！」

琳麗は結界から転がり出るように飛び出す。そして目の前に広がる光景に、はっと息を呑んだ。

「何これ……！？」

妖魔がいた。それも数え切れない程の。

そのあまりの数に半ば茫然としていると、すぐ横合いから怒号が飛んできた。

「馬鹿っ！！ 考え無しに出て来るんじゃない！！ 馬たちと一緒にその結界の中に入ってなさいっ！！」

「！ 珠珠っ！！」

視線を向けると、珠珠が肩で息をしながら前方を睨んでいた。その横では紅華も辛そうに顔を歪めつつも、手に出現させた矢を弓に<sup>つが</sup>番え、次々の妖魔に向かって放っていた。

「珠珠、紅華さん、一体これ——」

「つべこべ言わずその中に入ってなさい！！ ここも結界を張ってあるけど、あっち程安全じゃないの！！」

「！ 二つも張っているの！？ 何でそんな無茶を——」

「あーもう！ それをしなきゃあいつらがまともに戦えないからよ！ いいから病人は洞窟の中に入ってなさい！！」

珠珠のある言葉に琳麗ははっとなり、結界内を見回す。すると先程まで気付かなかったある光景が目に入ってきた。

「藍雄っ！ 大丈夫か！？」

「ああっ！」

遠くの方で、蘇芳と藍雄は背中合わせになっていた。それぞれの武器を構え、油断なく辺りを見回している。しかし、よく見ると二人はぼろぼろで、自分の横にいる珠珠たちと同じような状態だった。

「蘇芳さんっ！ 藍雄さんっ！」

「待って！ 琳麗ちゃん！！」

思わず二人の元へ駆け寄ろうとした琳麗を、紅華が止める。

「紅華さんっ！　でもお二人が……！」

「行っちゃ駄目よ！　蘇芳たちの邪魔になる」

「えっ……邪魔に、なる……？」

「琳麗ちゃん、よく見てみなさい。……私の言っている意味がわかるから」

琳麗は言われて、蘇芳たちの方をじっと見る。

蘇芳たちの周りは、珠珠の張った結界を妖魔が突破しても、即座に撃ち落とす紅華のお陰で、一見何もないように見えた。だが、微かにゆらりと、まるで陽炎のように蘇芳たちの周りが揺れていた。

その空気の揺れに琳麗が目を細めた時、唐突に黒い靄もやのようなものが二つ出現した。

「何あれ……影？」

「わからない。あなたをこの洞窟の中に運んだ直後に、急に現れたのよ。……妖魔の大群と一緒にね！」

紅華はそう言い放つと同時に、ぎりぎりまで引き絞しぼった矢を妖魔に向けて射る。放たれた矢は炎の軌跡を描き、結界内に入り込もうとした妖魔の眉間に突き刺さった。そして一瞬にして妖魔を消し炭にする。

琳麗はその一連の動きを驚きのあまり無意識で目で追っていた。

だが、遠くで金属同士が激しくぶつかり合う音にはっとなり、反射的にそちらに目を移した。

「蘇芳っ！　右だっ！！」

「！？　ぐう……っ！」

蘇芳は襲いかかってきた影の武器を、あの夜に見た朱塗りの檜で



何とか受け止めている。藍雄も両手に二刀の小太刀を構えながら、相手との距離を計っていた。

「何あれ……妖魔でもない。しかも人型で武器を持っている。それに……」

琳麗は妖魔で溢れ返っている結界の外を【視】<sup>み</sup>る。今まで気付かなかったが、自分が気を失う前と森の様子が明らかに異なっていた。

「一体どうなっちゃってるの……?」

「——もう！ 琳麗、病人は大人しくすっ込んでなさい！」

「珠珠ちゃんの言うとおりのよ。琳麗ちゃん、中に入ってたなさいな。ここは私たちに任せておいて」

いつまでもこの場にいる琳麗に焦れたのか、珠珠が眦<sup>まなじり</sup>を逆立てこちらを睨みつけてくる。紅華もそれに同意するように、炎を纏わせた矢を放ちながら言う。

しかし琳麗は首を横には振らず、右手に細身の剣<sup>つるぎ</sup>を出現させた。

「琳麗っ!!」

「珠珠、もう大丈夫だから！ それに……こんな状況下で大人しく寝てなんかいられない!! 私、戦う！」

琳麗が大上段に言い放った——その時だった。

いつの間にか、眼前に一羽の、漆黒の鳥がいた。全身が酷く爛<sup>ただ</sup>れ、落ち窪<sup>くぼ</sup>んだ虚<sup>うつ</sup>ろな瞳がこちらを見詰めている。

——タスケテ——

そう言っている気がした。

「あなた……」

茫然とその瞳を見返している琳麗の周りが、一瞬にして変わる。

「!? な……!」

「森の守り神よ、御苦労だな」

「!?」

驚いている暇はなく、唐突に背後で聞こえた声に、琳麗は咄嗟に振り向いた。反射的に剣を構える。

視線の先に、男が二人いた。

一人は紺に程近い青色の髪的青年で、もう一人は黒と見紛う程の赤髪を持つ青年。

「お待ち申し上げておりましたよ【姫】」

そう言って、柔和な笑みを浮かべる赤髪の青年を、琳麗は油断なく見据えた。無意識に柄を握り締める手に力が入る。

「あなたたち、誰っ!? それに“姫”って何!?」

琳麗の問い掛けに、しかし赤髪の青年は答えず、柔和な笑みを浮かべながら、琳麗を上から下までじっくりと見下ろす。

「前と変わらぬ美しい姿をしておられるな」

「……何を言っているの? 私はあなたたちと会ったことなんてない! いいから私の問いに答えて!」

「御心も前と変わらぬようであるな。――なあ相棒?」

「……そうだな。早くやれよ。俺、こういうのに向いてないし、俺は早くあっちに行きてえんだよ」

「まあ、そう急<sup>せ</sup>くな」

くくくと笑い、赤髪の青年が琳麗に一步近づいた。琳麗もその動きに合わせて一步下がる。

「私に近寄らないでっ!!」

「そうもいきません、【姫】。我が君の命令です。――そのお身体に流れている血を分けて頂かなくては」

「!？」

一機に距離を詰められていた。そしてあつという間に剣を弾き飛ばされ、気付いた時にはもう抵抗できないように身体を地面に押しつけられていた。

「うっ……!!」

「申し訳ございません、【姫】。我が君のために、そのお血が必要なのですよ……【呪<sup>しゅ</sup>】を解くためには」

（“シュ”……？ “シュ”って“呪”のこと？）

ぼんやりと霞む頭で考える。こんな状況下であるにもかかわらず、頭は何故か冷静だった。

右手の袖が捲<sup>まく</sup>り上げられる。

（何で私の血が必要なの……？）

肌に何かが触れる。

血を取られる。――そう覚悟した時、

一陣の風が吹いた。

その直後、ふっと身体が軽くなり、琳麗は瞑<sup>つぶ</sup>っていた瞳を薄らと開ける。

漆黒の瞳が前方を真つすぐに射抜いていた。

ドクンとまた心臓が一つ跳ねる。

（なんで……？）

「——貴様ら、何をしていた？」

耳に心地よく響く低い声。そしてどこか安心する温もり。

琳麗は溢れ出しそうになる感情を抑える。  
ぎゅっと自分の服を掴む。

またあの青年と会えた——。

——蠢ク『モノ』(四)——(後書き)

ここまで読んで下さり、ありがとうございます。

八月中と申し上げていましたが、九月になってしまい本当に申し訳ありません。

少しでも楽しんでもらえたでしょうか？  
でしたら、幸いに思います。

それでは、これで失礼させて頂きます。

——蠢ク『モノ』（四ノ二）——（前書き）

「——蠢ク『モノ』（四）——」の挿話です。  
物凄く短いです。

それと、この話を始めてからの初のまともな戦闘描写が入ります。

——蠢ク『モノ』（四ノ二）——

唐突だった。

すぐ傍にいたはずの琳麗りんれいの姿が、忽然と消えたのだ。

「……っ!? 琳麗っ!!」

珠珠しゆしゆは青褪め、辺りを見回す。しかし、何処にも琳麗の姿はない。気配を探ってみても、〈封碎石ふうさいせき〉で気配を消されてしまったあの時と同じように、琳麗の気配を掴めない。何処にいるのか、全くわからない。

珠珠はすうと身体の奥が冷えていくのを感じた。わなわなと身体が震える。

「……琳麗、琳麗——」

「珠珠ちゃん、落ち着いて! 結界が揺れる!」

取り乱しそうになる珠珠に、紅華こうかが尽かさず声をかける。紅華の呼びかけにはとなった珠珠は、乱れかけた己の気を何とか抑える。だが徐々に込み上げてくる感情は抑えきれそうにもなかった。

「紅華、琳麗がっ……!」

「……っ」

紅華も眉をぎゅつと真ん中に寄せ、感情を抑えるように下に視線を向ける。だがすぐに顔を上げ、結界の外を見据える。

「何で琳麗ちゃんが消えたのかはわからない。もしかしたらこの妖魔たちの軍勢は、何かそれに関係してるのかもしれない……けど!

今、私たちがやることは蘇芳たちを援護すること！　そして少しでも早くこの場を切り抜けて、琳麗ちゃんを探すことよ！」

「……そうね。その通りだわ！」

声は僅かに震えていたが、珠珠の瞳は毅然と前を見据えていた。

「後ろの結界を解くわ。紅華、いい？」

「了解。潮たちは慣れているから平気よ。それにここは守るから」「それならよかった。さて——本気で行かせてもらおうわ！」

その瞬間、珠珠の纏う気配が一変する。穏やかな気配であったものが瞬時に猛々しいものへと変貌を遂げた。

「外の妖魔たちを一掃してくる——」

そう言い終わる前に、珠珠は結界の外へと躍り出た。紅華はそれを半ば茫然と見送る。

「……凄い」

珠珠のあまりの変わりように、紅華は驚いて開いた口が塞がらなかった。

霊獣が稀な存在でその持つ力は強大であるということを知識で知ってはいても、実際それがどれ程のものは知らなかった。だが、はじめてその力を見せつけられ、霊獣の凄さを思い知らされた。戦慄すらも覚えた。

「普段は力を抑えているのね——と、そんなことより」

いまだ鳥肌が立つ腕を一撫でし、紅華は自分のやるべきことを成



すため、弓を構えた。



「——琳麗っ!!」

悲痛な叫びが、耳を衝いた。  
藍雄は咄嗟に声のした方に、顔を向ける。しかし、それがいけなかった。

「……っ!?! 藍雄っ!! 真上だ!!」  
「!?!」

蘇芳の叫びに、藍雄は上を振り仰いだ。眼前に刀が差し迫っていた。

藍雄は反射的に小太刀を交差させる。

ガッキンと刀同士がぶつかり合う音が、辺りに鳴り響く。

「ぐっ……!!」

冷や汗が藍雄の顎を伝い落ちた。

辛くも刀を受け止めることはできた。しかし真上からまともに食らった攻撃は、思いのほか……重い。

腕が痺れ、小太刀をうまく支えきれない。

受け止めた体勢も悪かった所為か、徐々に押される。目の前のある影の顔がにやりと笑う気配がした。

「!?　ぐはっ……!」

その瞬間、腹に強烈な痛みが襲う。

腹を蹴られたのだとわかった。

激しい嘔吐感に見舞われ、藍雄は思わず体勢を崩す。

影はそれを狙っていたのだろう。藍雄に体勢を立て直させる隙を与えず、再度刀を振り落とした。

藍雄は半ば霞む視界でそれを見る。

万事休すか——そう思われた時、

「何やってんだ!!　てめえは!!」

蘇芳の怒鳴り声とともに、炎が目の前を横切った。

影はそれを寸前で避け、藍雄と距離をとる。

「蘇芳……悪い」

「たくっ……何やってんだよ!」

「……すまん」

何とか体勢を立て直した藍雄の背後に、蘇芳が素早く立つ。

お互いの背後を守るように、それぞれ武器を構える。

「おい、早めに蹴りをつけるぞ?　ここからじゃよく見えないが……琳麗に何かあったみてえだしな……」

「ああ」

少女の青白い面を思い出す。あの時、抱きとめた身体は、こちらがぞっとする程冷え切っていて、このまま儚く消えてしまいたいような気がした。

藍雄は二振りの小太刀を持ち直し、それに己の靈力を注ぎ込む。その瞬間、バチツと音が鳴った。しかし、それだけに止まらず、更にバチバチと音が鳴り響いた。

「さっさと倒さないとな」

放電したかのように、藍雄の持つ小太刀は青白い光を纏っている。

「こいつらに術を使っている暇はない！　ごり押しで行くぞ！」  
「ああ、わかってる！」

蘇芳の持つ槍も炎を纏っていた。熱がこちらにまで伝わってくる。藍雄の金色の瞳が、小太刀の放つ光を受けて煌めいた。

——蠢ク『モノ』（四ノ二）——（後書き）

ここまで読んで下さり、ありがとうございました。

……はい、分かってます。戦闘描写下手くそですよね……。  
ごめんなさい。これが私の限界でした。  
もっと勉強してきます……。

では、これで失礼しますね……。

——蠢ク『モノ』（五）——

彼に会ったら、聞かなければならないことがあった。

あの鏡の中の空間で、蘇芳<sup>すおう</sup>たちから聞かされたのは、彼の行った残虐の数々。

その話を聞くにつれ、自分は「止めなくては」と決意を固くしていったのを覚えている。

だから彼の話を聞きたいと思った。

たとえ刃を交えることになったとしても、彼の口からその理由を聞きたいと思ったのだ。

けれど自分は……ただ彼に会いたかっただけなのかもしれない。あの満月の夜に、たった一回しか会ったことのない相手に……。

——会いたい。

彼と会ってからずっと抱いていた、その漠然たる思いは、いつの間にか自分の中で深く、そして強くなっていた。……「師匠を探す」という己の目的以上に。

それをこの瞬間、思い知らされた。



（何で……？）

様々な感情が心の中で鬩せめぎ合って、頭が真っ白になる。何も考えられなかった。

琳麗りんれいはただ茫然と、青年の顔を見上げる。

（何でこんなに――）

「もう一度言う。……貴様ら、この地で何をしていた？」

しかし青年の鋭い声音に、琳麗はハッと我に返る。次いで、今の自分の状態を顧みて固まった。

（え……？）

理解した途端、思考が一気に凍りついた。だが徐々にそれを認識するにつれ、自然と顔が紅潮していくのがわかる。

そう、今のこの状態を端的に言えば、自分は彼に抱き上げられている。もっと具体的に言えば、「お姫様抱っこ」というものをされている。

（――いや無理！）

その事実、琳麗は耳まで真っ赤に染めた。

それに、彼は蘇芳たちにとっての敵だ。しかも、どうしてここにいるのかもわからない。もしかしたら、自分を襲ってきた彼らの仲間かもしれないのだ。

(……そうだ。そうだよ！ 早くここから抜け出さない！)

そこまで思い当たると、琳麗は青年の腕から抜け出そうと、硬直した身体を無理やり動かした。だが手足をばたつかせて暴れてみても、青年の腕は小揺るぎもしない。変わらず、琳麗の身体をしつかりと抱き上げ続けている。

「ちよっ降ろして！ 降ろして下さいっ！！」

恥ずかしいと思う気持ちと理由のわからないこの事態に、琳麗は半ば混乱状態に陥りはじめていた。すると、青年がようやく琳麗に瞳を向ける。

闇夜のように静かな眼差しが琳麗を捉えた。

「悪いようにはしない。だから、少しだけ大人しくしている」

青年はそう小さく囁くと、またすぐに視線を前に戻した。

それは時間にして、ほんの一瞬の出来事だっただろう。だが先程までさざめいていた心は、今では嘘のように凪いでいた。

(どうしてなのかな……？)

素っ気ない言葉と態度であつたのに、何故こんなにも自分は安堵しているのだろうか？ どうして彼の言葉を信用しようとしているのだろうか？ 正直、己の心がわからなかった。だが――。

(私は、この男を信じたいんだな……)

その気持ちだけは理解できてしまった。

琳麗は己のその心の持ち様に戸惑いを覚えながらも、大人しくその身を青年に委ねた。そして、無意識に詰めていた息を吐き出し、肩の力を抜く。その瞬間、緊張していた身体から一気に力が抜け、身体が弛緩する。

一方、青年は相変わらず顔を前に向けていたが、琳麗のその変化を感じ取ったのであろう。もう一度しっかりと抱き直すと、再び鋭利な眼差しを彼らに向けた。

「これが最後だ。……貴様らはここで何をしようとしていた？」

「…………。まさかお主に邪魔されようとはな……」

青年の低く搾り出すような声音に、それまで息を詰め、こちらの様子を窺っていた赤髪の男が、ようやく口を開いた。だがそれは問いの答えになっではおらず、それどころか彼らはまるでこの青年のことを知っているかのような口振りだった。

「……俺のことを知っているような口振りだな？」

青年もそう思ったのか、警戒心を露わに問う。対して赤髪の男は、感情を悟らせない表情で青年を見遣やっていた。

「さて…………どう思う？ 『魏慧雅』」

「…………。貴様ら、何者だ？」

「それをお主に教える義理はなкаろう？」

「…………」

「それに、儼らはその娘に用があるだけだ。お主と事を構える気は一切ない。——退いてもらおう」

「……俺の問いに答える気はない、というわけか……」

青年は瞳をゆっくりと閉じた。そして再び開けられた瞬間、今ま



で穏やかであつた風が一気に吹き荒<sup>すさ</sup>む。  
青年の漆黒の髪が、それに煽<sup>あお</sup>られて翻<sup>ひる</sup>がった。

「貴様らが何者で、この地で何をしようとしていたのかはわからんが――」

青年は目を細め、煌<sup>きら</sup>めく漆黒で彼らを見据える。

「龍脈を乱す真似は見過ごせない。こいつも渡さない」

「……どうやら退いてはもらえぬようだな。――渾<sup>こんとん</sup>沌」

「わかつてるよ……。なあ饕<sup>とうてつ</sup>餮、本気であいつと戦<sup>や</sup>り合うのか？

今の俺らじゃ、下手したらこっちが殺<sup>や</sup>られるぞ？」

「そんなことわかつておる」

彼ら――饕<sup>とうてつ</sup>餮と渾<sup>こんとん</sup>沌が臨戦体勢を整える前に、青年は機敏な動作で琳麗を朽ちた大木の根元に降ろした。そして片手で軽く印を組むと、小さく一言呟く。

「巽<sup>そん</sup>・陰<sup>いん</sup>」

その瞬間、琳麗は瞬<sup>またた</sup>く間に円状の風に包み込まれた。

「なっ……！」

「そこで大人しくしている。すぐ終わる」

分厚い風の層が、外界との接触を一切遮断していた。琳麗はそれを見て、愕<sup>がく</sup>然とした表情になる。

（嘘……簡略した術式でここまで……？）

彼が使用したのは基本中の基本だ。【巽】は八卦の一つで「風」を意味し、【陰】は「守」という意味合いを持つ。また【陰】の部分が【陽】だと「攻」という意味になり、文字通り敵を攻撃する術となる。これは素人でも使える簡単なもので、よく妖魔との戦闘中でもその補助として扱われる。だがそれはあくまで補助の域を出ず、妖魔を倒す決定打には成り得ない。なのに、彼はその補助の域を軽く超えていたのだ。

しかし、そんなことは今はどうでもいい。琳麗はキツと青年を睨む。

「私、あなたに守られるほど弱くありません！　ここから出して下さい！！」

「地面に押さえつけられていた奴がよく言う」

「んぐっ……！」

「いいからここにいろ。……悪いようにはしないと、さっき言っただろう？」

有無言わせぬ口調でそう言い放つと、青年は背を向け歩き出す。その右手にはあの夜と同じ太刀が握られていた。

「あ……」

去っていくその後ろ姿に、何かが重なった。

「——って……待って下さい！」

琳麗はその後ろ姿に向かって思わず叫んだ。だが青年にこの声は届いていない。それが堪らなく嫌だと思った。

「お願い待って！　待って！！」

追いかけてようとしても、風の壁を阻まれて、前へ進めない。

「待つて！！ 行かないで！！」

何かが自分を駆り立てた。その後ろ姿が無性に不安になる。

「お願い！！ 行かないで——慧雅！！」

声だけが空しく辺りに響いた。

——蠢ク『モノ』(五)——(後書き)

更新がだいぶ遅れてしまい、大変申し訳ありませんでした……！  
しかも、内容が……orz  
楽しみにして下さっていた方(……いるのかな?)、二重にお詫び  
申し上げます。

けれど、ここまで読んで下さり、本当ありがとうございます。  
このような亀(に失礼)更新ですが、どうぞ今後ともよろしく願  
いします。

——蠢ク『モノ』(六)——(前書き)

お気にいり登録を下さった方々、誠にありがとうございました。

——蠢ク『モノ』(六)——

「ここにいろ。……悪いようにはしないと云っただろう？」

少女にそう言い残し、慧雅けいがはその場で身を翻ひるがえした。同時に周囲の風に強く念じ、外の音が少女に漏れ聞こえないよう命じる。するとすぐに風が応こたえ、少女を覆っている風の気が一気に強まる。

慧雅はそれを一瞥することなく己の感覚で捉え確認すると、目前にいる敵へと視線を移した。

冴え冴えと冷たい瞳が彼らを射抜く。

「貴様らをこの場で——消す」

淡々とした口調で紡がれる言葉たちは、まるで機械仕掛人形が喋っているかのようだ。温かみも人間味も全く感じられない、抑揚を欠いた声音。

先程まで少女に向けていたものとあまりに違うそれらに、彼ら——渾沌こんどんと饕餮とうてつは思わず息を呑んだ。

だが、そんな彼らを尻目に、慧雅はゆっくりとした歩調で近付いていく。

「……なあ饕餮とうてつ。あいつ、ただの人間……だよな？」

近付いてくる青年に気圧されるように、渾沌が一步下がった。

「……形なりだけは、な。」

呼びかけられた饕餮とうてつもまた、額に冷や汗を浮かばせ、後ろへ身を引いている。

半ば及び腰になりかけている彼らに構うことなく、慧雅はまた一歩また一步とその距離を縮めていく。そして右手には、いつの間に顕現けんげんさせたのか、大振りの太刀が握られ、青年の纏まとう気が更に鋭く冷たいものになっていく。

“これはただでは済まされない”

そう二人が直感した瞬間――とうてつ餐饕の目の前で鈍い光が閃いた。

「なっ……!?!」

一瞬で距離を詰められたとうてつ餐饕は、半ば条件反射で上半身を反らし、寸前で躲かわす。だが慧雅は容赦なく二撃目を繰り出し、とうてつ餐饕を斬り捨てようとする。

「させるかっ!!」

その瞬間、渾沌が二人の間に割り込み、慧雅と刀を交じ合わせた。ガッキンという音が辺りに木霊する。ギリギリと鏢つばぜり合いが起こり、火花が散った。しかしその均衡も、すぐに崩された。

慧雅はとうてつ餐饕に手を出される前に、太刀を振り下ろしていた両腕の力をふと抜いた。すると、慧雅の一打を受け止めていた渾沌は、唐突に力の行き場を失い、体勢を崩す。慧雅はそこを見逃さず、続け様に腹を蹴り飛ばした。

「がはっ……!」

勢いよく吹っ飛ばされた渾沌の身体は、地面の上を何度も弾み転

がる。

「渾沌っ!!」

それを見た饕餮は身体を動かそうとして……動かせなかった。

「ぐっ……!？」

饕餮は目を下に向け、次いで瞠目する。

地面から金色の糸が伸び、手首や足など身体に至るところを拘束していたのだ。

「こ、これは……!？」

「……………」

目を剥く饕餮に向かって、慧雅は無言で掌を翳し、そして握り締めた。その瞬間――、

「うつ……――ぐあああああ!!」

饕餮は言葉にし難い叫びを上げた。バチバチという音が響く度に、饕餮は苦悶の声を上げる。慧雅はそれを【蒼】く光る瞳で見据えていた。

「っ……饕餮っ……!」

うつ伏せで地面に倒れていた渾沌は、その叫びを耳にするやいなや、身体を起こそうと腕に力を入れた。だが途中で力尽きてしまい、またも地面に倒れ伏してしまう。



「うぐっ……くそお……!」

悔しさに顔を滲ませながら、渾沌は蹴られた腹を庇うように押さえる。よく見ると、その箇所からじわじわと赤いものが広がっており、饕餮と同様、時折、音を立てて帯電していた。

慧雅は饕餮に手を翳したまま、ゆっくりとした動きで渾沌へと顔を向ける。何の感情も浮かべていない【蒼】い瞳は、底知れない深淵が漂っていた。

「……無理に動かない方がいいぞ。貴様ら妖魔が苦手とする力を込めて蹴ったからな」

「!? お前……気付いて、いたのか……?」

「確信はしていなかったがな。貴様らの後ろにいた化生——いやこの地の守り神か……それが教えてくれた」

「な……に?」

“そんな馬鹿な” そう思い、渾沌は目先で蹲っている黒い塊を凝視する。だが、黒い塊は微動だにせず、ただ虚ろな瞳で虚空を眺めるだけだ。

「どう……いうこと……だ?」

「……」

口を突いて出た疑問に答える者はここにはおらず、渾沌の頭にはありえない出来事で埋め尽くされる。だが、それを悠長に考えさせてくれる暇を慧雅は与えてはくれなかった。

「——っ、ぐああああ……!!」

「!? 饕餮っ!!」

饕餮<sup>とつてつ</sup>の絶叫に、渾沌は反射的に身を起こそうとするも、腕に力が入らず崩れ落ちる。

「遊びはここまでだ。これで終わりにする——」

慧雅が最終通告と共に、饕餮<sup>とつてつ</sup>に太刀を振り下ろそうと構えた瞬間——何かが破裂する音が大気を震わせた。

慧雅は瞠目して、咄嗟に後ろを振り返る。

「もう止めなさい！！ 慧雅っ！！」

凜とした声が響いた。

慧雅の視線の先には、剣<sup>つるぎ</sup>を片手に提<sup>さ</sup>げ、悠然とその場に立つ少女がいた。

「お前……」

【蒼】から漆黒へといつの間にかその色を変えていた瞳で、慧雅は少女を見詰める。そこに宿る感情<sup>もの</sup>は、驚愕と——困惑。

「……理由が何であっても、私があなたに殺させない」

強い決意を宿した瞳で、少女——琳麗<sup>りんれい</sup>は言い放った。

——蠢ク『モノ』 (六) —— (後書き)

ここまで読んで下さり、ありがとうございました。

相変わらず、戦闘描写は苦手です(汗)。読みづらいところが多々あると思います。本当にすみません。これでも前よりは頑張ったんです。でも……あまり上達は出来ていないかもしれません……(大汗)。

それでは、こんな感じの作品ですが、お付き合い願えればと思います。

失礼いたしました。

——蠢ク『モノ』（七）——

——行かないで——

去っていく背に、少女は何度も叫んだ。だが、その背は決して少女を振り返る事なく、徐々に遠のいていく。

少女は縋り付くように風の壁に両手をつけ、それに額を押し付けた。

「お願い……行かせて」

血泥土を吐く思いで、少女は風に願った。しかし風は応えてはくれず、少女は成す術もなく打ち菱ひしがれるしかなかった。

——嫌だ。行かないで。私を置いていかないで——

己でもよく分からない湧き上がるその思いに、少女は白くなるまで手を握り締めた。

——お願い。また私を置いていかないで——

そう少女が念じた時、無音の空間に微かな音が響いた。

少女はそれに吊られるように、鈍々と顔を上げる。そして、視界に飛び込んで来た光景に、少女の頭は一瞬にして真っ白になった。

——駄目——

無意識に少女の唇が動く。

青年の【蒼】い瞳が、暗く澱よどんだ瞳が、冷酷に男を見据よっていた。

そして太刀を振り上げ、青年がそのまま男の頭上に振り下ろそうと構えた瞬間――少女の中で何かが弾け、風の障壁を消滅させた。



「もう止めなさい!! 慧雅けいがっ!!」

自然と口を突いて出たその言葉は、やけに大きくこの場に響いた。琳麗りんれいは内心そのことに驚きつつも、こちらを振り返り見る漆黒の瞳を、まっすぐに見返した。

「お前……」

呆然とし風情で、慧雅はそう言葉を洩らす。だがそれ以上は言葉もないようで、ただそこに立ち尽くし、琳麗を凝視していた。

(私……何をしたの……?)

一方、琳麗も戸惑いを隠せずに、その場に佇たたずんでいた。絶対に壊せないと思っていた結界が、いとも容易たやすく壊れてしまったのだ。そして今、自分は外にいる。一体全体、何が起こったのか、全くわからなかった。途方に暮れるというのは、こういうことを言うのかかもしれない。だが――、

（今は途方に暮れてる場合じゃない。私がやるべきことは……）

そう、自分が成すべきことは、慧雅を止めること……彼にあんな暗い目をさせないこと。――あの日、鏡の中の朱夏殿<sup>しゅかでん</sup>で決意したことなのだから。

琳麗はいつの間にか握っていた剣をきつく握り締め、目に意思を込める。

「……理由が何であっても、私があなたに殺させない」

己のその言葉に、慧雅が一瞬息を吞むのが、気配で伝わった。だが次の瞬間には、先程までの動揺が嘘のように、彼は綺麗に表情を消し去っていた。

「俺に殺させない……？ お前、何を言っている？」

「そのままの意味です！ 私はあなたに、もう殺しはしてほしくない！！」

「……」

琳麗は感情が高ぶるままに、慧雅にそう叫んだ。だがそれとは逆に、彼女を見返す彼の瞳は、どんどん温度を失くし冷えていく。

やがて慧雅は、静かに言葉を返した。

「俺が誰を殺そうが、お前には関係ない」

単調な口調で告げられる言葉に、琳麗の背にすうと冷たいものが走った。喉がヒュッと鳴り、言葉を詰まらせてしまう。だがそれを振り切るように、琳麗は一度大きく頭<sup>かぶり</sup>を振った。そして再び、慧雅の瞳を真っ正面から見据える。

「関係なくないです！ 私、蘇芳さんたちから頼まれたんです。あなたを捕まえるのに協力してほしいと」

「……………蘇芳たち」

慧雅が僅かに目を細め呟く。だが琳麗はその様子に気付かず、更に言葉を続けた。

「私自身、同じ気脈師として、あなたの今までの行いを許せません！ それにっ——…それに私——」

そう琳麗が言いかけた時だった。

ぐったりとした様子で倒れ伏していたはずの渾沌が、唐突に琳麗の目の前にいたのだ。

「……………っ!？」

咄嗟の反応ができず、琳麗は迫り来る渾沌の手をただ見つめる。そしてその手が琳麗の身体に触れる寸前、力強い腕が彼女の身体を引き寄せた。

直後——、少女の目の前で白刃が閃く。

琳麗は目を見開いて、その軌跡を追った。そして己の肩に腕を回している青年の顔に、視線が行き着く。

彼は【蒼】い瞳で、男を射抜いていた。瞳の奥で仄かな炎が揺らめき、肩に乗せられている手に力が込められる。

「慧雅……………」

「邪魔だ」

そっけなく言い放ち、慧雅は突き飛ばすように琳麗を後ろに押し退けた。漆黒の髪を背に揺らし、前へと進み出る。

琳麗と渾沌、その両者を隔てる壁<sup>へだ</sup>のように立つ背は、まるで少女を庇う行動に見えた。

「やっぱり、な……。そう動くと、思った、ぜい」

太刀を振り切られる寸前に、饕餮<sup>とうてつ</sup>の真横まで飛び退いた渾沌は、それらの行動の一部始終を見て、口端をニッと吊り上げる。当初の狙い通り、饕餮<sup>とうてつ</sup>の傍から慧雅を引き離すことに成功した。そのことに、渾沌は内心ほくそ笑む。

だがその顔色は土気色で、額には大量の脂汗<sup>にじ</sup>が滲んでいる。よく見ると、口元からは一筋の血が流れていた。

「……渾、沌」

その時、掠れた声が渾沌の鼓膜を揺らした。渾沌は金糸で縛られたままの饕餮<sup>とうてつ</sup>に、目線だけを向ける。

「たっく……。何、やって、んだよ、てめえは」

「ふ、ん……。主に……。言われ、とう……。ない、わ」

饕餮<sup>とうてつ</sup>のその言葉に、渾沌は眉間に皺を寄せる。いまだ血が滲む腹を、刀を持つ逆の手できつく押さえつけた。

「けっ……。とりあえず、この場合は、一旦、退こうぜ。【お姫】の、ことは、今は、諦めるしか、ねえだろ」

「……………そう、するしか……。ある、まい」



やり切れなさが残る顔を一瞥してから、渾沌はこちらを睨み据える【蒼】い瞳を見返す。

自分たちの力があの頃よりも削がれているとはいえ、ただの人間の奴にここまで圧倒されるとは思っていなかった。……いや、“ただの人間”ではないか。

渾沌は過去に一度だけ対峙したことのあるこの男を、脳裏に思い浮かべる。主以外にはじめて敵わないと思わせられた相手だった。あるじあの時ほど【死】というものを実感したことはない。

渾沌は一度ふっと息を吐き出し、口元の血を拭う。そしてとうてつ饕餮を縛り上げている金糸を、刀で一気に引き裂いた。

「俺たちはここで退かせてもらうぜ！」

もう蘇芳たちを相手にしている自分たちの分身は、既に消えてしまっている。恐らくこちらに向かっているだろう。長居は無用だった。

渾沌が慧雅に言葉を投げかけた後、とうてつ饕餮と渾沌の姿は、一瞬にかすて霞みのように消える。慧雅が言葉を返す暇もなかった。

「……逃げ足の速い奴らだ」

しばらくの間、慧雅は彼らが消えた場所を見ていたが、唐突に前へ歩き出した。徐々に遠ざかっていく背中を、琳麗は半ば呆然とした風情で見送っていたが、ハッと我に返ると慌てて彼の背中を追いかけた。

「あ、あのっ……！」

その背中に向かって、琳麗は声をかけた。だが、慧雅はそんな声など聞こえていないと言わんばかりの態度で、歩を進める。

「待って下さい！」

それでもなお、琳麗はめげずに声をかけ、彼の黒い袖口を掴む。すると、ようやく慧雅は琳麗を振り返った。彼女を見下ろす瞳は、もう既に元の漆黒に戻っている。だが、その顔は明らかに不機嫌そうに見えて、琳麗は思わず尻込みしてしまう。

「あの、その……」

言いたい言葉が出ず、琳麗は視線を彷徨わせた。その態度に、慧雅はますます不機嫌そうに顔を歪める。そして彼女に掴まれている袖口を振り払うと、さっさと前へ行こうとする。

「待って!!」

しかし、先程よりも強い口調で呼び止められ、慧雅は面倒くさそうに後ろを振り返った。

「……さっきから何だ？ 早く用件を言え」

「あの……あ、ありがとうございます」

咄嗟に出た言葉がこれだった。この言葉を言いたかったわけではないが、琳麗は自分がこの青年に、いまだお礼の一つも言っていないことに思い至る。彼がどんな人物だろうと、危ういところを何度も助けてもらったことには変わりない。礼をすることは、人として当然と言える。

だから琳麗は頭を下げて、再度この青年にお礼の言葉を述べた。

「二度も危ないところを助けて頂き、本当にありがとうございます」

た」

「それだけか？」

しかし慧雅の反応は薄く、彼は踵かかひすを返すと、再び前と歩き出してしまふ。

「あっ！ 待って下さい！」

琳麗は小走りで慧雅の背中を追いかけた。慧雅はその気配を感じ取り、ふうと呆れたように息を吐いた。

「……まだ俺に何か用事でもあるのか？」

「はい」

琳麗は慧雅の前に回り込むと、彼の瞳をまっすぐに見上げる。慧雅は居心地悪そうに、彼女から目線を逸らした。

「早く用件を言え」

冷たく言い捨てられ、琳麗は自分でも驚くくらい落ち込むのがわかった。目を伏せ、両手をギュッと強く握り締める。

慧雅はそんな琳麗の様子を黙って見下ろしていたが、ふっと息を吐いて歩を進める。すれ違いざま、琳麗の鼻を微かな雨の匂いが掠めた。やがて慧雅はある生き物の前で足を止める。

琳麗は離れた位置から慧雅を見、そして彼の足元にいるそれに、その丸い目を大きく見開いた。

「あ……」

彼女の視線の先に居たのは、自分をこの場所に連れてきたあの漆

黒の妖鳥だった。全身が酷く焼き爛れ、見るからに痛々しい姿をしている。

妖鳥はあの時と同じ虚ろな瞳で、こちらをじっと見つめていた。

（やっぱりこの妖魔……）

琳麗はその瞳を見返しながら、どこか違和感を感じていた。

あの鳥は明らかに妖気を発している。どこからどう見ても妖魔であることは疑いようもない。だが、やはりどこか違う。最初にこの妖鳥を見た時も、自分は同様のものを感じ取っていた。それに目が合った瞬間、「助けて」という声が聞こえたのだ。

「こいつはこの地の守り神」

考え込んでいた琳麗の耳に、不意に言葉がもたされた。琳麗は驚いて、青年を見る。

慧雅は相変わらずの読めない表情で、妖鳥を見下ろしていた。すると、彼は徐に、その妖鳥の前に屈み込んだ。スッと右手を翳し、目を閉じる。次の瞬間、慧雅の掌から温かな光が発せられた。それは妖鳥の身体を優しく包み込み、やがて辺りを眩しく照らした。

琳麗はその眩しさに耐えきれず、目を閉じる。そして光が治まった頃、彼女がようやくその瞼を開くと、

「綺麗……」

琳麗は思わず感嘆の息を洩らしてしまった。

そこには、淡い朱色の光を放つ一羽の美しい鳥がいた。逞しい体躯に、鋭く大きな鉤爪。威厳に満ち溢れたその姿は、大空を駆けるあの鷲ようだった。気を失ってしまっているのか、守り神は固く瞼を閉じている。

琳麗は静かな足取りで近付き、そつとその身体に触れた。

「……この子、大丈夫ですか？」

自然と出てきた問いだった。慧雅は淡々と答える。

「しばらくすれば、目を覚ます」

「そうですか……。よかったです」

安堵して、琳麗の強張っていた表情に笑顔が戻る。

彼女のその様子をしばし見つめていた慧雅は、やがて音を立てずスツと立ち上がった。それに気付いた琳麗が顔を上げ、慧雅を仰ぎ見る。

「待って下さい。私、あなたにどうしても聞きたいことがあるんです」

「……………俺に聞きたいこと…………？」

慧雅は感情の失せた瞳で琳麗を見下ろす。琳麗は立ち上がって、彼の漆黒の瞳を見返した。

「どうして…………どうして龍珠りゅうしゅを奪ううんです？ 何で罪もない人を殺すんですか？」

「蘇芳たちと関わり合いのあるお前に、話す義理はない」

「質問に答えて下さい」

「……お前、この場で殺されたいのか？」

冷酷な光が慧雅の瞳を過ぎった。本物の殺気を浴びて、琳麗の身体が身じろぐ。だが彼女はめげずに彼の瞳を睨み返した。

「私、あなたにこれ以上罪を重ねてほしくないの」

琳麗はそう言葉を重ねながら、あの鏡の中でのことを思い出す。周りのものは、全て破壊尽くされていた。そして、至る所に飛び散っていた夥しい量の血痕。それを見ながら、蘇芳たちは語った。あの夜のことを――自分がはじめて彼と出会ったあの夜のことを。

彼らはあの日、彼――慧雅を捕らえるため、龍珠のある場所――朱夏殿の裏の世界で待ち伏せをしていた。そして、彼を決してその場から逃がさないように、表からも裏からも四象結界を張ったのだ。「これで奴は逃げられない」そう思い、彼らは万全の状態で彼に挑んだ。だが結果は……大勢の死傷者を生むものとなってしまった……。そして、彼は龍珠を奪い、強固な結界をいとも簡単に破って外の世界へと逃れてしまったのだ。

蘇芳と藍雄らんゆうは、多勢に無勢の状況であつたのにも関わらず、自分たちの力が彼に全く及ばなかったこと。そして辛うじて何とか生き残ったに過ぎなかったこと。それを苦く語っていた。

琳麗はあの場で嗅いだ血の臭いが、またつんと鼻に衝いたような気がした。その時、慧雅が突然笑い出した。

「くっ、俺に罪を重ねてほしくない？ おめでたい奴だな。馬鹿馬鹿しいのにも程がある」

口元は笑っているのに、目は全く笑っていなかった。硝子玉がらすだまのような瞳で、琳麗を見下ろしている。琳麗はゾツとして、冷たくなつた両手を強く握り合わせた。だが意を決して、琳麗は慧雅の両手を包み込むようにそつと握った。

「お前、何を……」

「私……あなたにそんな暗い目をさせたくないの。だってあなたの瞳はすごく綺麗なのに……」

慧雅の動揺が手を通して伝わってくる。無機質だった漆黒の瞳の色に微かな感情が宿った。琳麗はその瞳を近くで見て、「ああ、やっぱ綺麗だな」と思った。はじめて彼とあったあの時も、湧きあがる感情に戸惑いつつも、どこか彼の瞳に魅せられていた。

「……お前が何故、そんな風に思う？ 二度しか会ったことのない俺に、何故？」

「わからない。でも——」

琳麗は慧雅の瞳を覗きこむように見つめ、そしてにこと笑った。無垢な笑顔で。

「あなたの手はこんなに温かいんだってことはわかる。人を殺す手なんかじゃない。人を救う手なんだって」

「……っ」

慧雅は息を吞んだ。琳麗から一歩後ずさろうとするが、握り締められた両手がそれを許さない。振り払おうとしても身体が言うことを聞かない。慧雅は金縛りにあったように、琳麗の顔を凝視する。

「私、蘇芳さんたちからあなたの話を聞かされてからずっと、慧雅と話したかった」

「……放せ」

「教えて下さい。あなたの目的を」

「手を放せ！」

慧雅が微かに震える声で言った時、

「琳麗どこだ！？　いたら返事しろ！！」

「琳麗どこなの！？　返事して！！」

「琳麗！！　お願いだ！　いたら返事してくれ！！」

「琳麗ちゃん！！」

自分を呼ぶ蘇芳たちの声に、琳麗ははっとなって後ろを振り返った。慧雅はその隙に、琳麗の両手を振り払う。それに気付いて、琳麗は咄嗟に前に向く。しかし、そこには慧雅はいなかった。風が湧き起こり、空を駆けていく。

「……慧雅……」

琳麗はまだ温もりの残る手を、そっと握る。

彼と正面から向き合えば、きっと話してくれると思った。自分の気持ちも伝わると思った。だが、実際はそんなに甘くはなくて……彼と正面で向き合うどころか、自分とまともに向き合ってもくれなかった。

琳麗はそんな自分がとても愚かに思えた。ほとんど他人の自分なにかに、深い事情を話す馬鹿など何処にいるのだろうか？　考えれば考えるほど、自分の愚かしさに腹が立って仕方がない。だが何よりも、彼に何もしてやれない今の自分が悔しい。悔しくて悔しくて悔しくて……そして、悲しかった。

琳麗が思わず俯きかけたその時――、

「琳麗！！」



直後、自分を再度呼ぶ珠珠しゅしゅの声が耳に飛び込んできた。振り返った途端、珠珠が琳麗の胸に飛び込んでくる。琳麗はそれを優しく抱き止めた。

「珠珠……心配させてごめんね」

「琳麗、大丈夫！？ 怪我とかしてない！？」

「平気だよ。怪我なんてしてないから」

涙声で問うてくる珠珠に、琳麗は苦笑を零しながら答える。すると、蘇芳が横槍を入れてくる。

「それ、本当かよ？」

「本当です」

蘇芳が疑わしい目つきで琳麗を見ていた。琳麗がそれに笑って答えると、その様子に残り二名はホッとしたように顔を和らげる。しかし、すぐに元の険しい顔つきに戻った。

「何があった？ 琳麗」

「それがよくわからないんです。転移させられた先に、変な男の人たちが二人いて、それから血を取られそうになって、“シュ”がどうのこうの……」

「“シュ”って？」

藍雄が質問する隣で黙って聞いていた紅華が、口を挟む。しかし、琳麗はそれにもやはり首を横に振った。

「わかりません。私にも何があったか……」

「じゃ、その男たちはどうしたんだ？」

「えーとそれは……」

蘇芳の質問に、琳麗は言葉を窮した。蘇芳がじっと見つめている。他の者も琳麗に視線を注いでいる気配がした。

どう答えるべきだろう？ 正直に話すべきだろうか？ でも――、

「わ、わかりません」

琳麗は咄嗟に嘘をついた。いけないことだと思う。けれど、何故か他の者には話したくなかった。

「そうか……」

「ごめんなさい……」

「いいってことよ！ お前が無事なら。 な、藍雄」

「ああ」

蘇芳たちが微笑んで琳麗を見る。本当に心配させたのだろう。琳麗はそれを見て、心が痛くなった。

「それにしても琳麗を連れ去ったあの妖魔は？」

「ああ。それならそこに……」

珠珠たちの問いかけに答えながら、琳麗は空を仰いだ。

（……慧雅）

空はいつの間にか晴れ渡っていた。流れていく雲を目で追いながら、琳麗は心の中で祈った。

（彼とまた話ができますように――）

いつかこの願いが叶いますように――。

——蠢ク『モノ』（七）——（後書き）

こんばんは。

凄くお久しぶりです。

ここまで読んで下さり、ありがとうございます。

もし待って下さっていた方がいましたら、本当にすみません。

今回は長いです。私の基準では。

内容の方は……かなり試行錯誤しました。はい（大汗）。

それでは、これで失礼させて頂きます。楽しんで読んで頂けたら、幸いです。

——加速スル齒車——

「……ほう。あやつに邪魔され、逃げ帰って来たと……」

月明かりを背に立つ男に、男二人が跪いてる。その内の一人が深く頭を垂れ、口を開いた。

「誠に、申し訳ありま——」

「謝罪はいい」

しかし、男は冷たい声音でその言葉を遮った。ゆっくりと首を後ろに巡らせ、かしづいている男たちを見下ろす。

振り返ったその顔は、影となって見えない。だが、暗がりの中で爛々と光る一對の瞳は紅い。

男は鬱蒼とその紅を細めた。口端を微かに持ち上げ、静かに言の葉を紡ぐ。

「しかし、まあよい。今度は許そう。楽しみは後の方がよいと言うからな。だが——」

言葉を途中で切り、男が一步前へ踏み出す。その瞬間、男の全貌が明らかに変わった。

白哲の美貌が月光を美しく照り返す。透き通るような髪の色は——白銀。男が動く度にさらさらと音を奏でるそれは、極上の絹糸のように艶やかだ。

男はゆっくりと、しかし確実に、男たちに近付いていく。彼らは気配でそれを捉えながらも、頭を上げない。

男は彼らの一步手前で、歩みを止めた。そして——、

「饕餮、渾沌。顔を上げよ」

静かな声が男たち——饕餮、渾沌の頭上に降った。しかし、呼びかけられた彼らは、またもや顔を上げない。じっと床を見つめたまま、微動だにしなかった。

その様子を見た男は、端正なその顔に薄く笑みを浮かべる。そして、形のよい唇をもう一度開き、先程より幾分柔らかい声音で彼らに語りかけた。

「顔を上げよ」

饕餮と渾沌はその声につられ、そろりと顔を上げた。だがその瞬間、彼らの表情は忽ちに強張った。暗闇でも分かる程にその顔を青白く変色させ、彫像のように固まったまま男の顔を凝視している。

男は笑みを浮かべて、彼らを見下ろしていた。その微笑みは誰もが見とれてしまう程に美しく、慈愛に満ち溢れているように見える。しかし、その目だけは全く笑っていなかった。冷たい色を宿した瞳は、彼らを睥睨したまま、ちらりとも動かない。

沈黙が続く。

やがて呼吸を十を数えた頃、男がようやくその口を開いた。

「次はないと思え」

冴え冴えとした声音は、静かな室に突き刺さるように響いた。男はやがて興味が失せたように、彼らから視線を外した。背を向け、再び窓側に歩み寄る。そして徐に、空に浮かぶ銀色の月を見上げ、ぽつりと言葉を洩らした。

「……この身に【呪】<sup>しど</sup>をかけられてから十六年あまりか……」  
「我が君……？」

急に語り出した男に、饕餮<sup>とうてつ</sup>は戸惑うような視線を向ける。渾沌もまた同様に、訝しげに男を見遣る。しかし、男はそれには構わず言葉が続けた。

「人の情とは、真に強きものよ。まさかこの私が、ここまで強い【呪】をかけられるとは思わなんだ」

「……我が君」

「お陰で【姫】の居場所は分からなくなり、私はこの地を離れない身となった。ただの人間だと、侮った結果がこれだ」

「――」

饕餮<sup>とうてつ</sup>は何か言おうと口を開くも、結局何も言えずに押し黙る。渾沌も口を閉ざしたまま、己の主をじっと見つめていた。男は相も変わらず月を見上げ続けている。

彼らはそんな主の後ろ姿を見て、思い出していた。

【姫】のもとに赴く命が下る前のことだ。

主本人から、その御身に強い【呪】を受けていることを告げられた。それを聞いた瞬間、自分たちは己の耳を疑った。しかし、それが冗談でないことを知った自分たちの心境は、言葉で言い表せられるものではなかった。

“信じられない”

この言葉が最もよく当て嵌まるだろう。

それ程その事実はありえないことだった。しかも主に【呪】をか

けたのが、なんと人間だという。そんなことはあつてはならないことだった。実に腹立だしいことこの上ない。

しかし、何より腹立しいことは、主のお傍にて役立てなかった自分たちのことだ。

その頃の自分たちは、いまだ目覚めない深い眠りの淵に着いていた。主の一大事の時に暢氣のんきに眠りこけていたのだ。

だからそんな己らを、自分たちはいまだ許せずにいる。主に御身を守れなかったことが、何より悔しかった。

「――饕餮とうてつ、渾沌」

俯き齒噛みしている彼らの耳に、男の低い声が響いた。饕餮とうてつと渾沌は顔を上げる。男はこちらを振り返っていた。

「そなたらに新たな命を下す」

「はっ！ 何なりと」

彼らは男の次の言葉を待つ。

そして男の口から発せられた命に、饕餮とうてつたちは目を白黒させた。

「本当にそれで……よろしいので……？」

「ああ。【姫】の血はまだよい。その方が面白くなりそうだからな。そなたらはそれまで【姫】たちを監視をし、逐一報告せよ。折において命は下す」

「畏かしこまりまして……ですが、あの男はどうなさるのです？ 私共が  
あやつらに回れば――」

「その心配はないですよ。饕餮とうてつ」

突如、割り込んできたその声に、饕餮とうてつは聞き覚えがあった。驚き  
振り返ると、壁に背を預けた青年がこちらを面白そうに見ていた。



「お久しぶりですね、お二方。それにしても饗餐は相変わらず真面目なですね」

「角端か……？」

「それ以外の誰に見えるって言うんです？ 渾沌」

笑みを浮かべながら近付く彼を、饗餐、渾沌はまじまじと見る。年の頃は、渾沌とそう変わらないだろう。長い黒髪を背に長し、それを緩く紐で結んでいる。瞳の色は黒で、そこに宿っている色は常に穏やかだ。柔和な顔は、笑みを浮かべると目元が更に優しく細まり、その顔立ちを際立させている。慧雅と同じ色の髪と瞳だが、彼とは若干異なり、光が当たると所々銀色に光るのが特徴だ。

「何故……お主がここに？」

「お二方と同じですよ。我が君に報告しに来たんです」

「儂が聞いているのは、そのことではない！」

「はい？ えーと……そのことでないとすると……何でしょう？」

本気で分かっていない風な角端に、饗餐は脱力を禁じえなかった。

「おゝぬゝしゝはゝ」

「角端、お前いつ目覚めたんだよ？」

床に沈んでいる饗餐を横目に入れつつ渾沌が問うと、その問いに答えたのはそれまで沈黙を貫き通していた銀髪の男だった。

「私が目覚めたのとはほぼ同時にだ」

「ああ、そうなんですか。じゃ納得——って、へ？」

「だから十六年前だ。ああ、そなたらにはまだ言っていなかったか？」

「言っていませんよ！ 俺が一番最初だと言っていたじゃありませんか！」

「四凶<sup>しきよう</sup>ではだ。そもそも黒麒麟<sup>くろきりん</sup>の角端とそなたらでは違う」

そういう理屈だろうか？ 角端は確かに、妖魔の自分たちとは違う。麒麟——つまりは神獣だ。しかし、だからといって言わない理由にはならないんじゃないだろうか？

渾沌の心情が伝わったのか、銀髪の男は若干申し訳なさそうな顔になる。

「いや、敢えて言わなかったわけじゃない。言う機会がなかったのだ。

それに私自身、その存在を失念していた」

「我が君……それはひどいです……」

「それよりも角端、報告を」

角端は抗議の声を上げるも、男はそれを完全に黙殺する。角端は恨めしげな目で男を見るも、男の鋭い視線に根負けしたように口を開いた。

「……………あの方は次の目標を定めていた最中、突然森の方角を見たかと思うと一瞬にして消え去りました。その後、饕餮<sup>とうてつ</sup>たちと交戦し彼らを退けた後、【姫】<sup>のち</sup>としばらくお話をなさっておいででした。その後は【姫】のお仲間が来られその場を去り、最後には郷<sup>さと</sup>にお戻りになりました」

「あやつに変化はあったか？」

「別段変わった様子はございませんでした。ただ【姫】と相対なさっておいでの際は、普段と違う様子ではございましたね」

「そうか。【姫】は？」

「【姫】はあの方を大層お気にしておりましたね」

「……………そうか」

最後の報告を聞いた途端、銀髪の男は長い睫毛を伏せた。だがそれも一瞬のことで、すぐにその表情は隠されてしまう。

「わかった。では引き続きあやつの監視を」

「御意」

淀みなく行われる報告に、蚊帳の外の鬘鬘たちは困惑げな表情を顔に張り付けていた。

「あの……我が君」

「なんだ？」

遠慮がちな鬘鬘の声に、我が君と呼ばれた男は顔を向ける。

「角端はその……あやつの監視を行っていたのですか？」

「ああ、そうだ。十五年程前からな。だから、そなたらは【姫】の方につけ」

「はっ！ 畏まりました」

そういうことか、と納得した鬘鬘と渾沌は、二人同時に返事を声を上げる。それを見た男は、満足そうに笑みを刻むと、再び中空に浮く銀月を仰いだ。

——名前がないの？ じゃあ私がつけてあげる。んとね……………

懐かしい声がふと耳の裏に甦った。その声は愛しくも、同時に憎くもある声だった。

（**【姫】** ……いつか会える日を楽しみに待っているぞ——）

——加速スル齒車——（後書き）

ここまで読んで下さり、ありがとうございます！

今回は新たな人物が登場です。

では、これにて失礼致します。

——罪深キ両手(二)——(前書き)

第二章開始です。

——罪深キ両手（二）——

荒涼たる景色が広がっていた。

大地はひび割れ、草木は枯れ果て、吹く風は死臭を運んできた。生き物の息吹を感じられないその地は、無音のみを漂わせる。

その痛い程の静寂の中を【私】は独り歩く。

太陽の温もりはだいぶ前に失われ、ただ冷たく吹き荒ぶ風が剥き出しの肌を叩いた。徐々に身体の熱が奪われ、剣を握る手が覚束なくなる。

【私】はそれを放すまいと、しっかりと握り締めた。

髪は乱れに乱れ、服はあちこちに裂けている。鬱血した傷跡たちが歩を進める度に痛みを訴え、身体中が悲鳴を上げていた。しかしそれでも――

【私】は足を止め、目の前を見据える。途端、視界が霞んだ。

ずっと会いたかった人がそこに居た。前と寸分変わらぬその姿に、胸がぎゅっと締めつけらる。しかしその身に纏う気配は明らかに違った。【彼】の放つ気は厳しくも、どこか温かさに満ちていたのに。でも今は――

【私】は思いを振り切るように、堅く目を閉じた。剣を持つ手に力を込め、構える。その切っ先の向かう先は――【彼】。

『貴方を——この場で滅します』

そして、【私】の両手は……あけ緋に染まった——。



「……っ、いやああああ——!!」

己の絶叫と共に、りんれい琳麗は跳ね起きた。

脂汗を体中に噴き出させながら、無意識に両手に目を遣る。赤いものがいまだ目の奥で明滅し、それが両手を染めた。

「やつ……いやあ……っ!」

真っ赤に染められたそれ両手に、身体の芯が一気に冷えていく。身体が震え、心臓はまるで氷に直接つかまれたかのよう——。

「いやっ……いやあ……いやあっ!」

両手に残った生々しい感触が、この手を染めたものが消えない。

【彼】の心臓を貫き刺したあの感触が消えない。



「いやっ……いやあ……いやあああー!!」

「琳麗!!」

「琳麗ちゃん!!　しっかりして!!」

半狂乱になっていた琳麗は、誰かが自分を呼んでいるのにも気付かなかった。嫌がる幼子のように、ただただ頭を振って、周りを拒絶する。

しかしそんな彼女をふんわりと包み込むものがあった。それはまるで子供をあやすかのように、拍子をつけてそつと背中を撫でた。

「大丈夫よ、琳麗ちゃん。それは夢で現実ではないから」

その一言が、まるで玻璃はりを砕くかごとく、琳麗を現実ひかりに引き戻した。

頭に添えていた手を外し、琳麗はそろそろ顔を上げる。すると見覚えのある顔が、心配そうにこちらを見下ろしていた。

「……こ……うかさん……?」

「ええ、その通りよ」

琳麗のどこか拙つたない言葉遣いに、紅華こうかは安堵の色を瞳に滲ませながら微笑む。

「琳麗……平気?」

「……珠珠」

横に顔を向けると、またもや心配そうな顔をしている珠珠と目が合う。琳麗はその瞳に笑んでみせてから、紅華を見上げた。

「紅華さん、ありがとうございます。もう平気です。……ご迷惑をお掛けしました」

琳麗が頭を下げて礼を言うと、紅華は首を横に振って答える。

「そんなことないわ。……嫌な夢を見たの？」

そつと身体を引き離しながらそう問い掛けてくる紅華に、琳麗は一瞬瞼を伏せる。

「……はい。よく覚えていませんが」

「そっか……。ならよかった。嫌な夢なんて、覚えていたって何のいい事もないもの」

元気づけるようにぽんぽんと頭を撫でられる。そのどこまでも優しい手つきに、琳麗は心温まるような気持ちになった。先程の、まるで氷に心臓を鷲掴みにされたかのようなあの感覚が、嘘のように薄れていく。

（お母さんって、こんな感じなのかな……）

物心ついた頃から自分に母親という者はいなかった。だがもしいたら、きつとこんな感じなのかもしれない。傍にいてくれるだけで安堵感を与えてくれるような、そんな存在。

「よし、だいぶ落ち着いたみたいね。お水飲む？」

「あ、はい」

「じゃあ持って来るわね。待ってって、すぐ持ってくるから」

そう言い置いて、紅華は部屋から出ていく。ぱたんと閉まる音が

してから、琳麗は寝台に倒れ込むようにうつ伏せに転がった。

「……珠珠」

くぐもった声が出た。目だけを横に動かし、傍にいる相棒を見る。すると藍色の瞳が、思慮深けにこちらを見ていた。兎うさぎのような長い耳がぴくんと揺れる。

「夢……見たのね？」

「うん」

「どんな夢？」

「……分からない。というより思い出したくない」

琳麗は仰向けになり、天井に手を翳かざす。その手をじっと見詰め、琳麗は思い付くままに告げる。

「いつも見ている夢とは違う。でも同じ」

「そう……」

「内容は覚えてないけど、もうあんな夢見たくない」

自分が吐露する言葉を、傍らの相棒は静かに受け止めてくれる。ふさふさの尾がまるで慰めるように額に触れ、それが妙にくすぐったかった。

「ねえ珠珠」

「ん？」

「何で私はこんな変な夢を見るのかなあ？」

その言葉に、額の上で動いていたものが止まる。だがそれも一瞬のことで、すぐにまた動き出す。

「そんなの私に分かるはずないでしょ？」

「あははっ！　だよねー」

さも可笑しそうに笑う琳麗を、珠珠は何とも言えない表情で見る。その時、こんこんと扉を叩く音がした。琳麗と珠珠が顔を向けると同時に、がちやりと音を立てて扉が開かれ、紅華が顔を覗かせる。

「遅くなちゃってごめんね。はいお水」

「あ、ありがとうございます」

「いえ、どういたしまして。……うん、さっきより少し顔色は良くなったかな」

ゴクゴクと水を飲み干しす琳麗を見て、紅華は嬉しげに顔を綻ほころばせる。しかし最後のその言葉に琳麗は動きを止め、紅華を思わず見上げた。

「私、そんなに顔色悪かったですか？」

「ええ。暗がりでも分かるくらい青白かったから」

「心配おかけして、すみません……」

「謝ることないわよ。今日は疲れているのかもね。妖魔と戦やり合っ  
たし」

「……そうかもしれませんが」

琳麗は苦笑いを浮かべた。

確かに今日は妖魔と戦った。山道を歩いている最中、蛮蛮という名の妖魔に奇襲されたのだ。数は多かったものの、幸い天候もよかったため、四人と一匹で何とか退治することができた。だが顔色が悪いのは、きっとその所為ではない。

琳麗は窓の向こうの景色を見や遣った。

ざあざあと振り続ける雨。

外で降り続けている雨音が、静かに部屋に満ちる。

その音はとても優しく、けれどもとても残酷に、琳麗の耳に残った。

——罪深キ両手(二)——(後書き)

こんにちは。

ここまで読んで下さり、ありがとうございます。

初の連続投稿です。けれど、これ以降きつとないでしょう(苦笑)。

それでは、これにて失礼いたします。

——罪深キ両手（二）——

三頭の馬が緑の平野を駆ける。

力強く大地を蹴り上げる蹄の音が、緑の平野を駆け抜け、茜空を突き抜けて轟く。

そのとき、風がサアと大地を吹き抜けた。草が揺れ、緑の海に波が起きる。

その流れに乗るように、馬上の人物たちは馬の首を巡らした。波の間を突き進み、風と一体となる。風と共に疾駆する彼らのその姿は、まるで風の化身・白虎神のようだ。

「もう少し速度を上げるぞ！」

そのとき、馬を駆る人物の一人が、唐突に声を張り上げた。

「このままじゃ、岑緑に着くまでに完全に日が暮れちまう！」

そう続けて叫ぶと、その人物は沈みゆく地平線の彼方を、苛立たしげに目を細めて見据える。瞬間、翠の瞳が夕陽を反射して、キラリと煌めく。

すると、いきり立って馬を駆ろうとする男のその様子を、隣に愛馬を並走させながら眺めていたある人物は、呆れたように溜息をついた。

「確かにそうだが……。だが、これ以上速度を上げると、翔たちが完全に潰れる。」

ここずっと休みなく走らされて、疲労も頂点に達してきているはずだ。もう無理はさせられない」

「藍雄の言う通りよ。蘇芳、私たちはこの馬たちの主なのだから、

もう少し考えなさい」

冷静に言葉を返す青年に続き、彼らの後ろをぴったりと付いてきた女もまた、男を諫める言葉を発した。

「そんなの分かってる!!」

しかし、男は怒鳴るように彼らに返してから、ふっと疲れたように息を洩らした。

「だけどこんな所で夜は明かせないだろう？　こう何もない真っ平らな場所じゃ、野盗やら妖魔やらに襲って下さいと言ってるようなもんだぜ？

この平原はそいつらが出ることと有名なのは、お前らも知っているだろう？　それに――」

そう言って蘇芳は隣の青年を――いや、青年の腕の中にいる少女を見る。

「琳麗<sup>りんれい</sup>にはきついだろう。いくら藍雄と一緒に乗っているとは言え、馬に慣れていないんだからな。

しかも、ここ二日ばかりずっと馬の上だ。早く街に行って、宿で休ませた方がいいに決まってる。また明日もこの二日間と同じ強行軍なんだからな」

労るような視線を向けられ、少女――琳麗は薄く笑みを浮かべた。

「蘇芳さん、そんなに心配しなくても私は大丈夫ですよ？　丈夫なことが私の取り柄なんですから」



琳麗のその言葉に、蘇芳は端正な眉を潜める。

「そんなこと言っただけな……第一お前、身——」

「なーにが“丈夫なことが私の取り柄なんですから”だ!？」

そのとき、蘇芳の言葉尻を取って、誰かが叫んだ。

琳麗は顔を思いつ切り歪めながら左耳を押さえ、肩にしがみついているその誰かを半眼で睨み付ける。

「珠珠、耳元で叫ばないで。うるさいよ……」

「これが叫ばずにはいられるかっ!」

「もう……。珠珠は心配しすぎだって」

「心配するに決まってんでしょ!」

「む……」

珠珠の相変わらずな……いや前よりひどくなったこの心配症に対し、琳麗はどう言葉を返そうか閉口する。だが、自分が何を言っても悪化の一途を辿るような気がするので、何も言わない方が返っていいかもしれない。

琳麗は眉間に皺を寄せながら、頭を悩ませる。その視線の先は彼女の頭を悩ませている当人だ。

自然、互いを睨み合う形となる。

傍から見ると無言で視線を戦わせているように見える二人。後ろから付いてきていた紅華は、半ば呆れたように言葉を挟んだ。

「全く……。二人とも喧嘩はやめなさい」

「そうだ。それに琳麗、珠珠の言う通りあまり無理をするな。辛いなら言え」

紅華に続くように、藍雄が言葉を発した。

琳麗は己を囲っている青年の顔を、仰ぐように見上げる。すると、藍雄は柔らかい眼差しで彼女を注いでいた。目は優しげに細められ、慈しむように見つめられる。

琳麗はその眼差しに何だか落ち着かない気分になりながらも、そこに自分の身を心配する色を宿しているのを見て取ると、彼に微笑み返す。

「本当に大丈夫ですよ、藍雄さん。私、馬には始めて乗りましたけど、藍雄さんのお陰で少しも辛くはありません。むしろ快適すぎて思わず寝てしまいそうになってしまいます。それに、師匠にさせられた修行より、ずーっとましですし、平気です」

にこにこしながら紡がれる言葉たちに、ぷるぷると身を震わせ耐えていた珠珠は、「平気です」と言った琳麗の最後の言葉を切欠に、遂に頭の琴線がプツンと切れた。

「な〜に〜が平気だっ!?!」

「ちよっ珠珠……! 耳元で騒がないでよ!」

先程よりも大音声だいおんじょうの声に、今度はさすがに両耳を塞ぐ。同乗している藍雄も些か迷惑そうに、眉を顰ひそめている。しかし、珠珠はそんな彼らには構わず、声高に言葉を続ける。

「あんたの大丈夫ほど当てにならないものはないの!! そう言って初日に倒れたのを、まさか忘れたとは言わないでしょうね!?!」

「それは仕方がないじゃん! だってあの日は――」

そう言いかけて、琳麗はハッとなって口を噤つぶむ。

「何が仕方がないんだ?」

しかし、口を嚙むも最早遅く、追い打ちをかけるように蘇芳が口を挟んできた。琳麗はビクツと身体を震わせ、恐る恐る蘇芳の方に視線を向けた。

すると、彼は普段とは違う真剣な表情でこちらを見ていた。翠の瞳は射抜くように鋭い。

琳麗の背中に冷や汗が流れていく。

「な、何でもない、です……」

「お前さ、俺らに何か隠してるだろう？」

真実を見極めようと、琳麗を見据える眼光が更に鋭くなる。それから逃れるように、琳麗はギクシャクと妙に固い動作で、蘇芳から目を逸らしていく。しかし、逃げられるわけはなく、横から痛い程の視線が突き刺さってくる。彼以外の二名も、自分に視線を注いでいるのが気配で感じられた。

（どうしよう！？）

焦る琳麗はギュツと唇を噛みしめた。

あの夢のことは、彼らに話したくないのだ。しかし、この短い期間の突き合いでも、彼らがとてもいい人たちであることは分かる。

だが――、

（……やっぱり話したくないよ）

目が覚めた瞬間、忘れてしまう夢だけけど、あの夢の生々しさだけは妙に残っている。

まるで心を徐々に蝕んでいくように、はつきりと。

もしその事を彼らに話したら、きっと心配させてしまう。

けれど、それ以上に彼らに知られるのが何故か……怖い。

琳麗は無意識のうちに、ギュッと手を握り合わせた。その様子を琳麗の肩から黙然と見ていた珠珠は、彼女の手が白くなるのを見て取ると、宥めるように彼女の頬を尻尾でふわりと触れる。

「琳麗。そんなに強く握ると手を痛めるわよ」

「え？ あ……うん」

そんな彼女らのやりとりをしばし無言で見ていた彼らは、何を言うまでもなく互いに顔を見合わせる。そこには、困惑気な何とも言えない表情が広がっていた。

そのときだ。馬を駆らせていた彼らの先に、小さくあるものが見えたのは。

それは馬車の一団。その一団の周りを大勢の人が囲っていた。

「おい、あれ……」

その光景を見た蘇芳は、表情を次第に陰しくさせる。蘇芳の低い声に、顔を伏せていた琳麗は目線を上げた。

前方のそう遠くない位置に、五台の幌馬車がちちらに向かってまっすぐ疾走していた。彼らは形振り構わず馬を飛ばしている。あのままでは近い未来、馬の脚が完全に潰れてしまうだろう。だが、彼らの雰囲気には鬼気迫るものがあり、それらのことは念頭に置いていないように思われる。そして、そんな彼らを追うように三十人程の柄の悪い男たちが周りと取り囲んでいた。

「あれはまさか――」

「そのまさかだ！ おい飛ばすぞ！！」

息を呑む琳麗に、焦る蘇芳は乱暴に答える。そして次の瞬間、彼らは馬を全力で走らせた。その反動で琳麗の身体はカクンと仰け反りそうになる。琳麗は小さく悲鳴を上げながら、振り落とされないよう目の前にある鬣たてがみに必死にしがみ付く。

そんな琳麗を尻目に、蘇芳たちは各々の武器を手に取っていた。蘇芳は片手で素早く印を組むと、鋭く叫んだ。

「礼朱『凌霄橙炎』——！」

瞬間、幾つもの橙色の炎が蘇芳の周りで生じ、幌馬車を襲っている者たちに鳥の形となって襲いかかった。

「うおっ！ 何なんだ！？ これは!?!」

「く、来るなあっ!! あっち行——うぐわあっ!!」

「熱い！ 熱い！ 誰か助け——」

急な襲撃に、それまで均整の取れた動きをしていた野盗たちに乱れが生じる。幌馬車を必死に守っていた者たちは、ハッとなってこちらを見る。

「攪乱には成功したな——汐！」

蘇芳は愛馬の名を呼び、その首を軽く叩いてやる。

「俺がいいと言うまで俺たちから離れている！」

そう言い聞かせると、彼は朱塗りの槍を片手で携えたまま、疾駆する馬からひらりと何の躊躇もなく降り立つ。と同時に、野盗どもに向かって突っ込んでいく。

「あっ！　こら待て蘇芳！！　一人で勝手に行動するんじゃないっ！！」

「……全く」

紅華の叫びも空しく、彼女の弟は敵陣に一人で乗り込んでいく。一方、蘇芳のその行動に慣れ切ってしまっている藍雄は、もはや諦めの風情で一つ溜息をついた。

「紅華さん、俺たちも行きましょう。……あいつだけに任せておくと、とんでもないことをやらかしますから」

「……そうね」

紅華は一瞬遠くなった目をすぐに元に戻すと、藍雄の腕の中で必死に鬣を掴んでいる琳麗に視線を移す。

「琳麗ちゃん、やれる？」

紅華のその問いかけに、琳麗はこくんと頷いた。

「それならあなたを戦力として数えるからね？　潮、よろしくね」

紅華は愛馬の首を一撫ですると、出現させた三本の火の矢を瞬時に<sup>つが</sup>番える。

「援護するわ！　だから彼らをお願い。翔たちのことは任せて」

全速力で駆ける馬の上から狙いを定めると、紅華は一寸の迷いもなく矢を放つ。ヒュンと音を立てて放たれた矢は、正確に野盗たちの馬の脚を射抜く。脚を射抜かれたことで馬は倒れ伏し、野盗たち

も一緒に地面へと叩きつけられる。

「翔、紅華さんの言う事を聞けよ？」

藍雄は愛馬にそう話し掛けると、二本の小太刀を後ろの腰紐に挟み込む。そして、琳麗のお腹に片腕を巻き付けると、

「行くぞ」

と短く彼女に告げてから、彼は彼女を抱えたまま駆ける馬から羽のようにひらりと地面に降り立つ。

琳麗は半日ぶりに地面に立った所為で、思わず脚がよろけてしまう。しかし、藍雄がつかさず手を差し伸べてくれたお陰で、琳麗は尻もちをつくという失態をおかさずには済んだ。

「あ、ありがとうございます……」

「ここに居てもいいぞ？」

紅華と同じ問いを再度かけてくる藍雄に、琳麗は首を横に振った。

「戦えます」

「ならいい」

殊勝な顔でこちらを見上げてくる琳麗に、藍雄は一つ頷いてみせてから、背に挿してある二刀の小太刀を一気に引き抜いた。

「俺は蘇芳の援護しに行く。あまり一人で無理はするなよ？」

金色の瞳が前方を向けられたかと思うと、はなだいろ縹色の軌跡を残し、藍雄の姿は一瞬にしてその場から消えた。

琳麗はしばし藍雄の消えた箇所を見る。いつ見ても、彼の術は凄いと感心させられる。

藍雄は雷術師だ。

その戦い方は李姉弟とは違い、破壊力を重視されたものではない。炎術は広範囲かつ威力が高いものが多く、しかし術者に隙が生じされ易いのもまた事実だ。

一方、雷術は炎術のように広範囲の攻撃はあまり多くはない。どちらかと言うと、接近戦型のものだ。そのため、風術のように長距離移動はできないが、短距離の移動だけならばその速度は風術を軽く上回るのだ。

だが、今はそんなことどうでもいい。

琳麗は頭を一度振って、取留めもない思考を払い落す。そして、閉じていた瞳を開く。

「――私たちも行こう！ 援護よろしくね？ 珠珠」  
「了解！」

肩にいる珠珠を一度見や遣ってから、琳麗は前方に向かって走り出す。そして、いつも通り剣ツルギを手に顕現させ、その柄を握り締めようとした瞬間、彼女の脳裏にある光景が駆け巡る。

荒廃した景色。

曇天の空。

手に持つ剣の確かな重さ。

そして、両手を染めた温かい鮮血。

琳麗は握り締めていた剣の柄を放す。どすつと音立てて地面に突き刺さったそれは、夕陽の残光を撥ね返し鈍く煌めいた。



「……………琳麗？」

既に駆け出していた珠珠は、いつまでも付いて来ない彼女を訝いぶかつて振り返る。そして、彼女の身体が震えているのを目にする。それを見た途端、珠珠は元来た道を急ぎ戻る。

「琳麗！ どうしたの！？」

彼女の顔を覗き込むように、珠珠は見上げた。途端、愕然とする。そこには表情らしきものが一切なかった。ただ蒼褪めた顔がそこにあるだけだった。

「琳麗！ 琳麗っ！！」

叫ぶも彼女の耳には声が届いていない。見開いた目はただ虚空を見つめるばかり。

珠珠は必死だった。だがその所為で、いつもなら気付けたはずの気配を見逃した。

「琳麗！ 琳——きゃあっ！！」

珠珠の身体は遠方に飛ばされた。小さな身体は平原の草の上を跳ねるように転がっていく。そして、ぽつんとある大岩にぶつかる、そのままぐったりと動かなくなる。

珠珠の小さな身体を思いつ切り蹴飛ばした男は、硬直している琳麗を憎々しげに見つめる。その男の出で立ちはかなりぼろぼろだった。ところどころ皮が擦り剥け、血が滲んでいる。男は蘇芳たちに叶わないと知るや、一人ここに立つ琳麗に目を付けたのだらう。彼ら二人の目から逃れて、彼女に近付いた。

「てめえらのせいだ！　よくも……！！」

男は頭上に太刀を振り上げる。

ここで彼女を人質にでもすれば戦況がいくらか変わっただろう。しかし生憎、男はまともに考える思考を持ち合わせていなかった。己の感情のまま、琳麗の頭目掛けて太刀を振り下ろす。

「珠珠ちゃん！？」

一方、彼女たちからだいぶ離れた位置で愛馬を駆らしていた紅華は、珠珠の悲鳴を聞きつけ咄嗟にそちらの方角へと視線を滑らした。そして、広がっている光景に背筋を強張らせる。

「琳麗ちゃんっ！！」

もう既に敵陣へと乗り込んだものと思っていた琳麗が、藍雄と別れた位置から一步も動いていなかったことに疑問を持つ暇もなく、紅華は馬を走らせる。それに続くように、二頭の馬も追従した。

紅華は弓に矢を番えたまま全速力で琳麗に近付く。しかし、射程が足りないため、彼女を襲おうとしている輩には届かない。

「死ねえ！！」

「り、琳麗……！！」

「琳麗ちゃんっ！！」

微動だにしない琳麗の頭上に刀身が迫る。もう駄目かと思われたそのとき、彼女との間に割って入る影があった。カッキンと澄んだ鉄の音が平原に響き渡る。

「げほげほっ……藍、雄？」

岩に背中を強かにぶつけられた珠珠は、うまく呼吸ができず噎せながらも、琳麗の窮地を救った男の名前を呼んだ。

「野盗風情がいい気になるな」

剣呑に言い放った藍雄の瞳が一瞬激しく燃え上がると、そのまま男を袈裟斬りに斬り捨てた。

――罪深キ両手(二)――(後書き)

ここまで読んで下さり、ありがとうございました！

楽しんで読んでもらえていたら、幸いです。

——罪深キ両手（二ノ一）——

袈裟斬りに小太刀を一閃させた瞬間、藍雄らんゆうの端正な顔に鮮血が飛び散る。しかし、藍雄はそれを気にすることなく、絶命の叫びを上げながら地面に倒れ落ちる男を冷めた目つきで見下ろした。次いで、何事もなかったかのように、刀の血糊を振り払う。

「……下種が」

吐き捨てるようにそう呟くと、藍雄はその男にもう一切目を向けることなく、刀が空に消えるのと同時に、背後を振り返った。

「琳麗りんれい！ 大丈夫か！？」

しかし、名を呼んだ少女はピクリとも反応を示さず、茫洋とした視線を藍雄に返すばかりである。

「琳麗……？」

訝いぶかしんだ藍雄は、少女に近寄ると、その琥珀色の瞳を覗き込んだ。その瞬間、藍雄の全身が凍りつく。

少女は目の前の藍雄を見てはいなかった。琥珀の瞳はただ虚空を写し出すだけだった。

「おい、琳麗？ どうした！？ しっかりしろ！！」

藍雄は少女の華奢きゃしゃな肩を揺する。だが、少女はそれでも何の反応も示さず、揺すられた勢いそのまま、ふらりと藍雄の腕の中へと倒

れ込んできた。

藍雄は咄嗟に少女の身体を受け止める。だが、そのあまりの軽さに、彼は思わず目を見開いた。

藍雄はぐったりと瞳を閉じている琳麗の顔を見下ろす。その顔色は青白く、生気が感じられなかった。まるで死人のような顔色にゾツとして、彼は反射的に少女の口元に手を翳<sup>かざ</sup>す。すると、掌に微かな風を感じた。よく見ると、胸がゆっくりとだが、規則的に上下している。

藍雄はその様子を見て、肺の中の空気を全て吐き出す。安堵感がどっと胸に押し寄せ、いつの間にか強張っていた肩の力も抜けていく。

「何ともないみたいだな……。」

でも、いったい……。」

唸るような声音が、藍雄の口から洩れた時、

「藍雄っ!!」

背後で切羽詰まった声が響いた。

その声色に、沈んでいた藍雄の思考が、一気に現実へと引き戻される。

「紅華<sup>こうか</sup>さん……。」

藍雄が声を追って振り返ると、紅華が赤茶の髪を翻しながら、こちらに向かって馬で駆けて来るのが見えた。

「琳麗ちゃんは無事？ 怪我とかしてない？」

紅華は藍雄たちの近くまで来るなり、一息で鞍から飛び降りると、すぐさま側へと駆け寄り、琳麗の容態を確認する。

「……よかった。どこも怪我してないみたいね」

安堵の息をつく紅華とは逆に、藍雄は顔に陰を落とす。

「はい、怪我はしていません。ですが……」

言いづらそうに口ごもる藍雄に何か不穏なものを感じたのか、紅華の安堵した顔がみるみるうちに険しいものへと変化していく。

「何か、あったの……?」

「俺にもよく分かりません。ただ琳麗の様子が少しおかしかったとしか……」

「様子がおかしい……?」

藍雄のその言葉を聞いて、紅華は何か思い当たったのか、ますます険しい顔つきで考え込んでしまう。

「……紅華、藍雄」

緊迫した空気が、まさに二人の間に走ろうとした瞬間、か細い声が彼らの耳に届いた。

紅華がハツとした風情で、声のした方向を見る。藍雄もその声を追うように、そちらの方向へ顔を向けた。

すると、青痣だらけの痛々しい姿の珠珠しゅしゅがそこにいた。

「珠珠ちゃん……!」

紅華は悲鳴を上げた。絶句したように口を両手で押さえ、藍色の瞳で自分たちを見上げてくる珠珠を見つめる。

そんな反応を見せる紅華に、珠珠は微かな笑みを向けた。

「紅華そんな顔しないで……。私は平気よ……。」

それより早く蘇芳のところに行きなさいよ……。あいつ一人じやさすがに無理でしょ……。！

二人してこっちに来てどうするの……。！」

珠珠に言われ、紅華と藍雄は今その事実が付いたかのように、顔を固く強張らせる。だが、すぐにその硬直を解くと、二人は素早く乱闘の場に視線を走らせた。

一人残された蘇芳が、荷馬車の護衛数人とともに、奮闘していた。鮮やかな槍捌きで、蘇芳は次々と野盗どもを蹴散らし、その数を減らしていく。だが、元からの人数はあちらの方が多いのだ。それに加え、何かを守りながら戦うことは、大変難しい。

いくらこちらが精鋭であっても、長時間、数で押され続けてしまえば、あつという間に不利な状況へと転がってしまう。あまつさえ、野盗どもは仲間の大部分を減らされたためか、逆に頭が冷え、冷静な判断を下せるようになったようだ。先程よりも確実に、連携が取れている。

「二人とも早く行って……。琳麗一人くらい私で守れる……。」

弱々しい声でそんなことを言い出す珠珠に、紅華は眦まなじりをきつくする。

「何言ってるの！ そんな怪我してるのに、無茶言わないの！！」  
藍雄、二人は私が見てるから、あっちを——」



お願い、と言い切る前に、琳麗を手渡される。

「藍雄……」

「頼みます」

目を見開いて目の前の人物を見返す紅華に、彼はただ一言そう言  
って背を向ける。その手には、いつの間にか二対の刀が携えられて  
いた。

しかし、踵<sup>かかと</sup>を返して歩いていた藍雄は、数歩で立ち止まった。  
背後を振り返り、紅華の腕に預けられている少女を振り返る。そ  
の一瞬、どこか悔いているような陰りが、彼の表情を過ぎった。

「藍雄……?」

不意に見せた弟分のその表情に、紅華は眉を顰<sup>ひそ</sup>める。しかし、藍  
雄は何事もなかったかのように再び歩き出し、その場からふっと姿  
を消した。

紅華は藍雄の消えた場所をしばらく見つめた。次いで、彼のいる  
であろう戦場に目を移す。

「……琳麗ちゃんが倒れたのは、あなたの所為ではないでしょうに  
……」

電光石火の勢いで敵陣の中を駆け回り、縦横無尽に刀を走らせる  
藍雄に、聞こえないと分かっているにしても、紅華は言葉を向けた。

先程の藍雄の表情は、一度だけ見たことがあった。琳麗が雨の中、  
倒れた時のことだ。

琳麗が地面と激突する寸前、藍雄は彼女を抱き止めた。

ぐったりと意識を失くしている琳麗を、藍雄は彼女の相棒よりも必死に呼びかけ続けた。しかし、意識の戻らない琳麗に、次第に取り乱し始めた藍雄を、誰よりも冷静に状況を把握していた蘇芳が一喝して、彼の頭を冷やさせた。

だが、その直後、妖魔の大群が襲ってきたことで、その出来事はうやむやになり、その後、続けざまに起こった出来事によって、やがて忘れ去られた。

しかし、いま冷静に思い返してみれば、藍雄の取り乱した様を見たのは、あの時が初めて、そして最後だった。琳麗が忽然と姿を消してしまった時でさえ、少し前に取り乱していたとは思えないほど、普段と変わらず冷静に対処していた。

（本当……あんな表情をした藍雄を見たのは、あの時が初めてだった……）

「――華、紅華？ 聞いているの……？」

珠珠の呼びかけに、己の思考に沈んでいた紅華はハッと目を瞬<sup>またた</sup>かせる。

「ごめんね、珠珠ちゃん。何？」

「琳麗は……平気……？」

「ええ、平気よ。どこも怪我してないから、安心して」

「そう……。よかった……」

「というより珠珠ちゃん。あなたこそ怪我は平気なの？」

珠珠の怪我の具合を確認しながら、紅華は刀を振るう弟分に思いを馳せた。

（あの子はずっと他者に心を閉ざし続けていた。私たちにすら、最

後の一步を踏み入れさせようとはしなかった。でも、ようやく――)

紅華は何があっても、琳麗を守ろうと思った。たとえ彼女に問題が山積みであったとしても、蘇芳と自分に初めて会った時の藍雄を自分は知っているから。その時の彼に戻ってほしくはないから。

紅華は琳麗を抱いている腕に力を込めた。

(何があっても守るから――)

彼女のこの時の決心は、やがて琳麗と彼女との命運を別けるものとなる――。

——罪深キ両手(二ノ一)——(後書き)

ここまで読んで下さり、ありがとうございました。

楽しんで読んで頂けたら、幸いです。

――罪深キ両手(三)――(前書き)

更新が遅れて、大変申し訳ありませんでした。

——罪深キ両手（三）——

静寂が支配する夜。

空には半分に欠けた月が浮かび、雲間からときどき顔を覗かしては、地上を仄かに照らし続けている。その月の光を、鏡のように凧いだ湖面が反射し、その上に鎮座する社を厳かに照り返していた。それは、まるで社自体が自ら光を発していると錯覚しそうになるほど、幻想的な光景であった。

その時だった。

緩やかな風が、湖面の上を吹き抜ける。水面が波立ち、湖の畔に打ち寄せる。月は雲に隠され、辺りに闇が広がった。地上は闇に包まれ、先を見通すことはできない。

しかし、その闇に紛れ、音もなく湖面の上に降り立つ影があった。水滴が水に落ちる様のように、トンと爪先が水に触れる。瞬間、波立っていた水面が、影を中心に嘘のように凧いでいく。

しんとした静寂が、また広がる。

月明かりも射さない闇の中、人影の素顔は黒い衣も相俟って窺え知れない。

人影は、水面の上を滑るように静かに歩き出した。まるで地面の上を歩くように、その足取りに迷いはない。波紋を幾重にも作りながら、まっすぐに社へと歩みを進める。

しかし、社の一歩手前まで来ると、人影は足を止めた。何かを探るように、纏っていた気を研ぎ澄ます。

空気が凜と張り詰めた。

微量な風が、人影が纏っていた布を僅かに巻き上げる。瞬間、闇

より冴える漆黒の瞳が、布の隙間から煌めく。

「……やはり強化はしてあるか……」

人影——慧雅は小さく呟いた。

社の周りには、幾重にも渡り、強力な結界が張り巡らせてあった。しかし、慧雅はそれらに怯むことなく、結界に触れるか触れないかという位置で、片手をそっと掲げた。瞳を閉じる。

その瞬間、微かに大気が震えた。しかし、それも一瞬の変化のことで、すぐに元に戻る。

慧雅はしばらくの間その体勢でいたが、やがて何か掴んだのか、閉じていた瞼をゆっくりと押し開く。僅かに蒼みを帯びた漆黒の瞳が、社の奥を見据える。漆黒の輝きの中でゆらゆら揺れるその【蒼】は、まるで湖の底のように掴みどころがない。

鋭い眼差しを社に向けていた慧雅は、不意に柳眉を寄せた。

「……あの時、やはり殺しておけばよかった」

今にも舌打ちしそうな口調で、低くそう呟く。  
その時だ。

「……おい、誰がいるぞ？」

風に紛れて、湖の岸边の方から微かに人の声が聞こえた。一拍遅れて、社の奥も僅かに騒ぎ始める。おそらく外の者が伝えたのだらう。

情報の伝達は早いと評しつつも、慧雅は冷めた眼差しを岸边に向ける。

「……首都と聞いて飽きれるな」

何の感情もこもっていない言葉が、誰とも知れず洩らされる。  
ざわざわと、人の動く気配がする。

気配を殺しているつもりなのかもしれないが、岸边と社の奥からだんだんとこちらに近付いて来るのが、手に取るように分かった。  
慧雅は被っていた黒い衣を、奥深くまで被り直す。そして、自分の周囲に風を集め始めた。風の精たちはそれに応え、楽しそうに彼の周りを躍り回る。

慧雅はそんな彼らの様子に目を細め、柔らかい眼差しを送る。

「お前たちはいつも楽しそうだな。……頼む」

慧雅がそつと囁くと同時に、岸边に数人の人影が姿を現す。それとほぼ同時に、社の門が外され、数人が外に飛び出した。

しかし、そこには誰もいなかった。風だけが名残のように、彼らの頬を撫でていく。そして、月を覆っていた雲が晴れた。



城から少し離れた人気のない路地裏に、慧雅は降り立った。その拍子に、頭から衣がずり落ち、艶あでやかな漆黒の髪が背中に踊る。

慧雅は顔にかかる髪を邪魔そうに払い除けると、先程までいた場



所に視線をやる。その眼差しは、氷のように冷たい。

「……夏至まであと二日」

社に周りに張り巡らせてあった結界は、さほど問題ではない。四象系統ようしょうのものなら、感知されることなく、簡単に結界内に入れるだろう。しかし、神鏡に仕掛けられていた結界術は、実に厄介だった。この間の柳宮にかけられていた結界術よりもずっと。

術の詳細は分からないが、五行系統のものであることは確かだ。その場合、気脈師きみやくし以外の術者であれば、離れた場所に一人、術の対象の側に四人いることが定石だ。

「……なら、見つけて術者を消すか」

外側の術者があの結界の要のはずだ。そいつを消しさえすれば、五行の結界の均衡は崩れ、消滅する。しかし、今、術者に危害を加えれば、更に警戒され兼ねない。今以上にやりづらくなるだろう。消すのならば、実行する直前だ。

静かに沈思する慧雅の耳に、ふとある声が甦る。

——私、あなたにこれ以上罪を重ねてほしくないの——

悲しそうに紡がれた言葉。だが、自分を見据える琥珀の瞳には、意思の強さを湛えた光があった。目を逸らそうにも、その瞳から逸らすことができなかった。

「……………」

慧雅は意識して忘れていたことを思い出してしまい、端正なその顔を歪ませた。そこに浮かぶ表情は、まるで苦虫を何十匹も噛み潰

してしまったかのような、何とも苦々しいものであった。

「……あの女のことなんて、どうだっていい」

そう、思い出す価値なんてない。記憶に留める価値すらない。今思い出しても、あの綺麗事には虫酸<sup>むしず</sup>が走った。あのような言葉を吐けるのは、愛されて育ってきた証拠だろう。現実を何も知らない甘ちゃんだけが吐ける、薄っぺらい中身のない言葉。自分が一番嫌いな言葉。なのに――、

「……胸糞悪い」

いくら忘れようとしても、忘れることができない。あの少女が言った言葉が、こちらを見据える琥珀の瞳が、両手を包み込む温もりが、今も記憶にはっきりと残っている。それは時が経つにつれ、次第に鮮明になっていった。

「……ふざけるな」

徐々に、自分を浸蝕してくるそれに、慧雅は苛立ちを覚えずにはいられなかった。時節、思い出されるその記憶に、憎しみにも似た感情を抱く。だが――、

――私、あなたにそんな暗い目をさせたくないの。だってあなたの瞳はすごく綺麗なのに――

向けられた温かい眼差しに、何も言えなかった。憎むことなんてできなかった。

それに、自分のこの忌まわしい瞳を誉めてくれたのは、義父と義兄二人以外初めてだった。己の瞳を恐れることなく、まっすぐに見

返ってきてくれた存在は、あの三人以外初めてだったのだ。

慧雅は額に手を伸ばし、そのまま前髪をくしゃと掻き乱す。口元には、力無い笑みが浮かんでいた。

「はっ……いったい何なんだ？」

いくら考えても、分からない。あの少女に関しては何も。

分かっていることはただ一つ。自分を掻き乱す存在であるということだけ。たかだか二回しか会ったことのない人物に、自分は乱されている。

「……本当に胸糞悪い」

考えれば考えるほど、ドツボに嵌まっていく。あの少女のことしか考えられなくなる。

——あなたの手はこんなに温かいんだってことはわかる。人を殺す手なんかじゃない。人を救う手なんだって——

また、優しい声音が耳の奥に響いた。

慧雅は自分の掌を見下ろした。今はまだ綺麗な手だ。だが、また血で汚れるのだろう。少女——琳麗りんれいと初めて逢った時と同じく、返り血を浴びて。

「……関係ない」

あの少女の言葉など聞いてやる必要などない。そんな義務などない。

「俺は自分の決めた道しか歩まない」

たとえ、この先に血塗れた修羅の道しかなくとも、誓ったのだ。  
今は亡きあの三人に。あの郷を、この地を命を懸けても護ると。それしか自分の生きる道はないから。

慧雅はひとり決然と顔を上げると、止めていた足を動かし、暗い路地裏を突き進む。そして、そのまま風に掻き消えるように、静かにその場を去った。

——罪深キ両手(三)——(後書き)

ここまで読んで下さり、ありがとうございます。  
楽しんで読んで頂けたら、幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3180k/>

---

黎明の空

2011年11月15日20時14分発行